

朝鮮語文法概要

ソ連文化省高等教育総局により大学用教材として承認

外国語文献出版所
モスクヴァ 1954

第2部

翻訳者から

翻訳にあたり次の点に留意されたい。

- 1) これは朝鮮語の専門家の便利に供するものである。
- 2) 朝鮮語の例文に付けられた転写, 訳は, 必要ある場合を除いて, 省略する。
- 3) 転写はキリル字をラテン字に直す。
- 4) ロシア語の術語はできるだけつけない。
- 5) できるだけ忠実な逐語訳をめざしたが, 術語や表現は朝鮮語学の伝統に従って改めたところがある。
- 6) 理解を助けるために, できるだけ訳者による注をつけた。1 は原著者注, (1) は訳者注である。文中の [注] も原著者によるものである。
- 7) 原文の太字 (ボールド) と隔字部分はゴチック体で表す。
- 8) 意味は < > 内に記す。
- 9) [] 内は翻訳者が補ったものである。漢字語の漢字は [] の中に補った。

菅野裕臣

4. 形容詞

§72. 形容詞の語彙構成の特徴 現代朝鮮語のすべての形容詞は語彙的に6つのグループに分けられる。第1のグループに入るのは非派生形容詞である: **붉다**, **낮다**, **높다**のタイプ。第2のグループに入るのは語根の合成によって作られた形容詞である (**움바르다**⁽¹³⁸⁾, **움다**と**바르다**から)。第3のグループに入るのは接尾語によって作られた形容詞である (**자유스럽다** [自由—], **자유** [自由] から; **누르스럽다**⁽¹³⁹⁾, **누르다**から)。第4のグループに入るのは補助動詞によって作られた形容詞である (**이익하다** [利益—]⁽¹⁴⁰⁾, **이익** [利益] から; **가능하다** [可能—], **가능** [可能] から)。第5のグループに入るのは接尾辞によって作られ

た形容詞である (장기적 [長期的], 장기 [長期] から; 지도적 [指導的], 지도 [指導] から; 불요불굴의 [不撓不屈-] ⁽¹⁴¹⁾, 불요불굴 [不撓不屈] から). 最後に特別な部類をなすのは最後の要素가용「用」, 상 [上] 等のタイプの語根であるような形容詞である⁽¹⁴²⁾ (등황용 [灯火用], 등화 [灯火] から; 력사상 [歴史上], 력사 [歴史] から). 以下に見るように, 始めの4つのグループは形態論的に活用形容詞の部類をなし, 最後の2つは非活用形容詞の部類をなす. 最後のものには새<新しい>のタイプの少数の「非形態的」形容詞が属する⁽¹⁴³⁾.

接辞付け 少数の形容詞接辞のうち唯一生産的なのは名詞から関係形容詞を作る接尾辞 -적 [的] である⁽¹⁵⁴⁾ (식민지적 [植民地的], 식민지 [植民地] から; 야수적 [野獸的], 야수 [野獸] から). 우섭다 / 우습다⁽¹⁴⁴⁾ (웃다から), 미답다 (민다から) のような形容詞における接尾辞 -업-, -음- あるいは -읍- は非生産的である.

接尾語 接尾語は朝鮮語において形容詞の部類を補充するあまり生産的でない方法である. ここに入るのは次のものである:

a) 名詞から形容詞を作る接尾語. 例: -지다 (세모지다, 세모から); -답다 (여름답다, 여름から); 인간답다 [人間-] (인간 [人間] から); -스럽다 (자연스럽다 [自然-], 자연 [自然] から; 자미스럽다⁽¹⁴⁵⁾, 자미⁽¹⁴⁵⁾から) -롭다 (-스럽다と同じ意味. 해롭다 [害-], 해[害]から; 영예롭다 [榮譽-], また영예스럽다[榮譽-], 영예[榮譽]から); 리롭다[利-], 리[利]から).

b) 他の形容詞からある形容詞を作る接尾語. ここに属すものは, 次の例に見えるように, 性質の大小の程度, 性質の様々なニュアンスを表す接尾辞である:

붉다 붉웃하다⁽¹⁴⁶⁾ 붉으레하다⁽¹⁴⁷⁾ 붉으스럽하다⁽¹⁴⁸⁾ 붉으속속하다⁽¹⁴⁹⁾
 붉으덩덩하다⁽¹⁵⁰⁾

ここで生産的な形容詞の第2語幹に接合する接尾語 -웃하다, -으레하다, -스럽하다, -속속하다は性質のますます低下する強度を表すのに用いられる. 性質の強化という似た役割を持つものとして次の接尾語がある: -다랗다 (第1語幹に接合する. 語幹末の l を持つ形容詞の場合 l のない語幹に接合する): 높다랗다 (높다から), 기다랗다 (길다から); -속하다 (及びこの変種 -죽하다, -직하다): 길죽하다⁽¹⁶⁰⁾ (길다から), 깊숙하다 (깊다から), 높직하다 (높다から) 等々.

[注] 色を表す形容詞とともに母音調和する接尾語 -얇다 / -얕다가特に母音調和する接頭辞세-/시- とともに用いられる: 까맣다 / 꺼멓다あるいは 새까맣다 / 시꺼멓다 (검다から).

合形成容詞は2つの語根=語幹の結合であり, 時に補足的に接尾辞によって複雑になる. これらはその構造から3つの基本的なタイプからなる:

a) 名詞語幹と非派生形容詞の結合. もっとも多いタイプは第2要素が있다고

없다であるような複合形容詞である : 재미있다, 맛없다 ;

b) 名詞語幹と動詞の結合 : 맛나다⁽¹⁶¹⁾ (맛と나다から) ; 빛나다⁽¹⁶²⁾ (빛と나다から) ;

c) 2つの非派生形容詞の結合 (このうち最初のは語根の形を持つ) : 올바르다⁽¹⁶²⁾ (옳다と바르다から) ; 굳세다 (굳다と세다から) (힘이 세다参照) ; 검붉다 (검다と붉다から). 2つの形容詞の結合のうち, 2つの語幹が接辞によって複雑になるグループが取り出される. これは검디검다⁽¹⁵¹⁾ (검다と接辞 -디-⁽¹⁵¹⁾から ; 語根のだぶりと接辞 -디-⁽¹⁵¹⁾は性質の強さを表すのに役立つ) のタイプの単語である. さらに붉웃붉웃하다⁽¹⁵²⁾ (붉다から) のタイプの単語がある. 語根のだぶりと接辞 -웃, -웃하다は恒常的でない性質, 対象の全面ではなく部分に固有な性質をあらわすのに役立つ. 最後に크나크다 (크다から), 멀고멀다 (멀다から) のタイプの単語がある. 語根のだぶりと接辞고及び나は性質の著しさを表すのに用いられる.

複合形容詞の構成部分の間の結びつきの緊密さはさまざまであり得る : ある場合にはこの結びつきは形容詞全体があたかも分割されない総体であるほどに緊密であるが, このことは殊に, 総体の意味がその部分の意味から導き出し得ないところに現れる. 例 : 맛없다⁽¹⁵⁶⁾ (맛と없다から). ほかの場合には諸要素間の結びつきは弱い ; これの緊密さの少なさは, 第1に, そのような複合語を単語結合 (結びついたタイプの) に転換する可能性, 第2に, 複合語の構成部分の1つが独自に用いられる可能性に現れる ; 例として배고프다を挙げることができる ; 배가 고프다参照, しかししかるべきコンテキストで単なる고프다⁽¹⁵³⁾も.

特に生産的なのは, 接尾辞 적 [的] の助けによる新語の形成と並んで, 補助動詞하다による単語形成である : 리익하다 [利益—] ⁽¹⁴⁰⁾ (리익 [利益] から), 징정하다 [真正—] (진정 [真正] から), 자연하다 [自然—] (자연 [自然] から), 째끔째끔하다 (でこぼこのざらざらしたものという印象を伝える様態副詞 째끔째끔から).

多くの場合하다は拘束された形でのみ現れる語幹とのみ結合する : 유명하다 [有名—] (生産的な単語유명 [有名] はない), 유력하다 [有力—] (生産的な単語유력 [有力] はない ; 유력가 [有力家] における同じ語幹を参照せよ), 두둑하다 (生産的な単語두둑はない) 等々.

§73. 形容詞の文法的クラス 朝鮮語の形容詞は文法的に次のクラスに分かれる.

a) 적다, 징정하다 [真正—] のタイプの形容詞のクラス. このクラスの特異性はそれが動詞に形態論的かつ統辞論的に近いこと, しかし動詞との近似性が,

ある研究者たちの意見にもかかわらず⁹⁾, 同一性にまでは達していないことにある。動詞への形態論的近似性はそのような形容詞が個別の文法範疇（位置的及び非位置的）を持ち得ることに現れる。動詞への統辞論的近似性はこのクラスの形容詞が動詞に似て文の任意の成分, 殊に主語になり得ることに現れる。

このクラスには固有の朝鮮語の非生産的形容詞が入る。ここには語根の合成によって作られたすべての形容詞, 及び接尾語と補助動詞하다によって自由な語幹あるいは拘束された語幹から作られた形容詞が属する。하다を持つ形容詞の多くは中国語から借用された語幹から作られる。

b) 민주주의적 [民主主義的], 계획적 [計画的] のタイプの形容詞のクラス⁽¹⁵⁴⁾。形態論的にも統辞論的にもこのクラスは動詞とは何の共通点もない。形態論的にはこのクラスは個別の文法範疇（位置的及び非位置的）が存在しないという特徴を持つ。統辞論的にはこのクラスは規定語として, そして稀に合成述語の繫辞付きの成分として現れる可能性があるという特徴を持つ; この種の形容詞は規定語として現れる時はしばしば繫辞の（随意的な）規定形인に伴われる: 기계적인 [機械的—]。

このクラスの特異性はなおも, 적 [的] なしに語幹と随意的に交替し得ること（これは名詞への接続する規定語として機能する）にある（合成名詞の第1要素としての적 [的] なしの変種の解釈は可能ではあるのだが, 今のところ証明されない): 자본주의적 [資本主義的], しかし자본주의 [資本主義] も (자본주의제도 [資本主義制度] において)。

c) 불요불굴의 [不撓不屈—], 백전백승의 [百戰百勝—], 최대의 [最大—]⁽¹⁴¹⁾のタイプの形容詞のクラス。形態論的にも統辞論的にもこのクラスはまさに動詞と何らの共通点も持たない。第2のクラスとは違ってこれは名詞に近付いている; この近似性は属格の特徴であるところの形態素 -의によってこの形容詞が形成され得ることに現れる。しかし名詞との類似は名詞との同一性にまで達しない。すなわち名詞は完全な格のパラディグマを持っているが, このような形容詞はただ1つ属「格」のみを持っているのである。この「格」の形態素にいかなる他の格の形態素が対立しないのであれば, それは格の特徴ではない（ロシア語 “peshkom” <徒歩で>, “begom” <走って>が, “peshkom”, “begom” の “-om” が起源的には具格であるにもかかわらず, 語尾 “-om” を持つ副詞であって, 名詞の具格形ではないことを参照せよ）。統辞論的にはこのクラスは通常規定語の位置に現れ得るという特徴を持つ。このクラスのいくつかの単語は第2のクラスの単語と随意的に交替する: 최후의 [最後—] / 최후적 [最後の]。

d) 새のタイプの形容詞のクラス⁽¹⁴³⁾。形態論的にはこのクラスは完全に語形変化がない, 形態素に分かれ得ないという特徴を持つ（形態素 -적によって取り出される第2のクラスと形態素 -의によって取り出される第3のクラスを参

照せよ) : 새해. このグループの単語は, 語形変化のないものとして規定語としてのみ現れ, 事実上接頭辞の境界線上に立つ. 朝鮮語文法でこの範疇が二重に解釈されることがこのことによって説明される: すなわちある文法書ではそれは規定語的形容詞(冠形詞)として, ほかの文法書では形態素=接頭辞として規定されている. 多分いずれの解釈も完全に正しいとは認められないだろう. このグループの単語の一部が接頭辞に移行したことは確かだが, しかし単語のすべての性質を保っている (§4).

第1のクラス(적다のタイプの形容詞)は3つのほかのクラスに対して, 活用形容詞の部類対非活用形容詞の部類として対立し得る. 活用形容詞の部類は形態論的な形の発達した体系を持っており, それらの形はその意味とともに多数の文法範疇を作る; それ故この部類は形態論において観察されなければならないのである. 非活用形容詞はもっとも単純な形態論的構造を持つ(第2グループにおける接尾辞 -적及び第3グループにおける形態素 -으); 第4のクラスの形容詞は形態論的にさえ語形変化がない. これがこの部類の形容詞が形態論の特別な研究の対象とならない理由である; これらは統辞論で, 文におけるこれらの単語の機能を研究する際に扱われるのである.

§74. 自立的形容詞と補助形容詞 活用形容詞は2種類に分けられる. 第1種にはそれ本来の語彙的意味においてのみ用いられる形容詞が入る. これは語彙的に自立した形容詞である. 第2種に入るのは文法的機能のみを果たす形容詞である. これは補助形容詞である. 例えば따뜻하다, 맑다, 어리다は自立的形容詞であるが, 만하다, 싶다는補助形容詞である; 만하다는可能性の文法範疇をなし(먹을만하다), 싶다는希望法の文法範疇をなす(먹고싶다). いくつかの単語, 例えば있다は双方の意味を併せ持つ: すなわち自立的形容詞としての있다는「ある」, 「いる」の意味を持ち, 形容詞であるが, 補助形容詞としての있다는持続的状態の文法範疇をなし(쌍여있다), 動詞である⁽¹⁵⁵⁾.

§75. 活用形容詞の文法範疇 活用形容詞は, すでに述べたように, 多く動詞に近いので, 形容詞の文法範疇の記述は形容詞を動詞から区別する特徴を列挙することに帰せしめられる.

形容詞は動詞と同じく非位置的範疇と位置的範疇を持つ (§29). しかしこれらの範疇とその構成の数はある点で異なる.

非位置的範疇 非位置的範疇の中では次の特徴がみられる.

a) 形容詞は自動詞性=他動詞性(非転移性=転移性)とヴォイスの範疇を持たない; 知られるように動詞においてヴォイス的及び自動詞的=他動詞的(非転移的=転移的)意味を表わすのに用いられる 接尾辞 -히 / -히, 接尾語지다及び補

助的単語하다 (§§32-34) が形容詞に接合するのは形容詞を動詞にかえるためである: 낮후다⁽¹⁵⁷⁾ (낮다から), 붉어지다 (붉다から), 용이하게 하다 (용이하다から).

例えば크다, 밝다等のようにいくつかの単語は自動詞的(非転移的)意味を持ち得る. しかしこの場合それらはすでに形容詞ではなく, 形容詞から作られた動詞なのである: 크다는形容詞としては「大きい」を意味するが, 動詞としては「大きくなる, 育つ」を意味し, 밝다는形容詞としては「明るい」を意味するが, 動詞としては「明るくなる」を意味する. したがってこの場合ある品詞から他の品詞へのいわゆる転成(無接尾辞的単語形成(造語))が行われるのである.

b) 形容詞は絶対的テンス(第1部 77-80 ページ参照)のみを持ち, 相対的テンスはない. 相対的現在にはネガティブな形態素によって表される; 接尾辞 -ㄴ / -는は形容詞の後では不可能である.

c) 形容詞は動作様式の文法範疇を持たず(第1部 84 ページ参照), このことはとりわけ形容詞には具体的持続性の範疇がないことを意味する.

d) 接尾辞付けと補助形容詞によって表される法の範疇は不完全に示される. 例えば接尾辞 -ㄹ- と -ㄷ- によって表される可能性の範疇はない(未来テンスの接尾辞及び蓋然性の接尾辞としての -ㄹ- とは混同してはならない; これらの接尾辞は形容詞の後ろでも可能である); 多分モダリティーの範疇はまったくないであろう.

位置的範疇 位置的範疇には次のような特徴が見られる.

a) 終止形の範疇のうちでは断言法 (§51) と命令=勧誘法 (§53) が欠ける.

中立=直説法の語尾は動詞の同じ範疇の語尾とほぼ一致する. しかし現在テンスでは疑問形語尾 -ㄴ의代わりに普通 -이가用いられ, 疑問形語尾 -느냐の代わりに -냐のみが用いられ, 最後に叙述系語尾 -네の代わりに普通 -예가用いられる. これらの語尾は第2語幹に接合する. 過去テンスと未来テンスでは動詞と同じ語尾が用いられる.

b) 形容詞の連体形は動詞の連体形とは反対に1つの意味しかもっていない: すなわちそれは形容詞の名詞に対する関係の規定的性格を示し, テンスを表さない; それ故動詞の3つの連体形の代わりに形容詞には1つのテンス(その特徴は語尾 -ㄴ)しかない: 낮은, 높은; 語尾は第2語幹に接合する. いくつかの補助名詞—名詞及び助詞—の前の特別の条件では -ㄴ (낮을, 높을; -ㄴの意味と等価) が用いられる; この -ㄴの前では過去テンスの接尾辞が可能である(높았을). この語尾 -ㄴは蓋然性を表し得る. 時に形容詞は語尾-던を取ることがある(第1部 111 ページ参照).

c) 接続形の体系は全体として動詞の体系と一致する. 同時性 (-면서), 先行

(-고; 結合的接続形 -고と混同してはならない. これは形容詞でも可能である), 目的 (-러), そして多分瞬間性 (-자) の接続形が欠けている. 最後に, 結合的接続形は形容詞が補助的な単語と結合する機能を果たさない (놓고싶다가不可能なことを参照せよ).

かくして次のことが明白である: 活用形容詞は形容詞を動詞から質的に区別する1つの特殊な文法範疇をも持っていない. 活用形容詞は形態論的に表された比較級を持たない; 名詞の比較格 (語尾 -보다あるいは -보담) は形容詞の絶対的な意味を比較的な意味から区別するのに充分である.

조선어는 일본말보담 발음이 어렵소.

副詞더, 덜, 가장はロシア語で比較級と最上級を表わす意味を区別するための補足的な手段である.

§76. 単語있다と없다について 単語있다と없다가ロシア語では動詞に訳されるとしても, 朝鮮語ではそれらは形容詞の範疇に属する. それらが形容詞に属することはこれらの単語が形容詞と同じ位置的範疇と非位置的範疇を持っていることにより規定される. 例外をなすのは없다の連体形で, この場合없은 (形容詞並み) と並んで없는 (動詞並み) も可能なのである⁽¹⁵⁸⁾.

5. 副詞

§77. 副詞の形態論的クラス 形態論的特徴によりすべての副詞は2つの基本的なクラス, すなわち非派生副詞 (第1次的副詞) と派生副詞 (第2次的副詞) に分かれる. 例えば늘, 매우, 어서는非派生副詞であり, 조식으로⁽¹⁵⁹⁾, 깊이는派生副詞である (前者は조식⁽¹⁵⁹⁾から, 後者は깊다から).

§78. 非派生副詞 非派生副詞と名付けられるものは, 副詞を生産するいかなる単語にも起源を求め得ず, したがって原初的と知覚される副詞である. 原初的ということはそのような副詞が単純であること, 「語形変化がない」ことを前提としない. 非派生副詞はその構造の性格から単純非派生副詞と合成非派生副詞に分かれる.

単純非派生副詞はそれ自身の構成において形態素を取り出さず, 部分に分割不可能である. 이미, 오래, 가끔, 잘, 좀, 거의, 자주等がそうである.

合成非派生副詞はそれ自身の構成において個々の形態素をあらわにし, それは分割可能である.

分割可能な副詞のうちでは2つのグループが取り出される.

第1グループ これは末尾の音節 -연 [然] を持つ副詞である: 우연 [偶然],

천연 [天然] <自然に>; -연 [然] はここでは副詞を表わす形態素として現れている。しかし現代朝鮮語にとっては副詞性を表わすこの借用された手段は、言語的実践が示しているように、不十分なものである。接尾辞 -히の助けによる副詞性の補足的な表示が要求される(以下参照): 우연히 [偶然一] 等々。このことはそのような副詞は現代語では形容詞から派生したものとして知覚されていることと関連がある: 接尾辞 -히を持つ우연히 [偶然一] (鳴音の後ろで히は*i*と発音される); なぜならそれは우연하다 [偶然一] 等々にさかのぼるから。このことは現代朝鮮語では -연は曖昧になった語源的意味を持つ形態素であることを意味する。同じ状態にあるのは末尾の우 / 오を持つ副詞である: 너무 (너모), 비로소 (ここでは우 / 오はかつては動詞の特別な状況的な形の特徴だったが、それは今では非派生副詞である)。

第2グループ これは語根の反復を伴う副詞である: 차차 [次々] <だんだん>, 착착<着々と>, 점점 [漸漸] <だんだんと>, 차례차례 [次例次例] <順々に> (また차례차례로 [次例次例一] も; 以下参照), 방방곡곡 [坊坊曲曲] <津々浦々>, 종종 [種種] <たまに> 等々。

この第2グループではものあるいは動作の外的様態からの印象を伝えるいわゆる様態副詞の特別な下位クラスが取り出される: これらの印象は聴覚的, 視覚的, 触覚的, 嗅覚的等々であり得る。このような副詞は通常2つの半分からなり, その各々は1音節から3音節までからなる: 감감 (濃い, 不透明な霧の感覚), 반짝반짝 (輝く, ゆらめくものの印象), 구두덜구두덜 (ロシア語の動詞 'vorchat' <ぶつぶつ言う>, 'brjuzzhat' <愚痴をこぼす>によって伝えられる動作の特徴)。その際後半部分(すなわち繰り返し)はあるものは音的に最初のものと同じであり(例は以下を参照), あるものは後半部分とはなんらかの子音によって(오롱이조롱이—いくつかのものの大きさが等しくないという印象を伝える副詞; 例えばことわざ 한 어머니 자식도 오롱이조롱이), あるものは母音によって(싱숭생숭—不安な状態の感覚を伝える副詞), あるものはあれやこれやによって異なる。このような副詞は2-3及びそれ以上の同義語を持つが, それらは互いにあるものは子音によって(빙긔빙긔と뽕긔뽕긔—ロシア語の動詞 'ulybat'sja' <ほほ笑む>によって伝えられる動作の特徴), あるものは母音によって(빙글빙글と빙글빙글—빙긔빙긔と同じ意味), あるものはあれやこれやによって異なる。このような同義語は不完全である: それらはそれらによって表される特徴, 様相の強さによって区別される。子音が替わることは普通弱子音の強子音, 長子音への移行(ㄱからㄴへ, ㄷからㄹへ等々)であるが, これは特徴をより強烈にする。母音における変化は特徴の強烈さを弱め, その度合いの弱さを示す。普通開母音ㅏ, ㅑは閉母音ㅓ, ㅕ, ㅗ, ㅛよりも強度の弱い特徴を表わす。

様態副詞は普通自立的な動詞に対する状況語として現れる: *떨떨 날리다*. しかしそれらはもっとしばしば, 後続の接尾語とともにひとつの全体を作り, それ自体きちんとした意味を表わすものとして現れる. 上に挙げた例で떨떨を実際に *phol'phol'* のように '*razvevat'sja*' <ひるがえる> と訳すのだとしたら, *소근소근하다* あるいは *편근편근하다* はそれぞれ '*sheptat'sja*' <ひそひそ話す>, '*shchurit*' <(目を細める)> (*morshchit*' <しわを寄せる>) 'を意味する自立的な動詞としてそっくり訳される. 動詞から副詞を作るのは2つの方法によって達成される: 하다によって (もしも副詞が繰り返しならば: *편근편근하다*) あるいは 거리다 / 대다によって (もしも副詞の中に繰り返しなしの前半があるのならば: *편근거리다*).

§79. 派生副詞 派生副詞は名詞と形容詞によって補充される. 動詞派生の副詞は朝鮮語にはほとんどない. 派生副詞のこのような品詞からの形成が行われる手段は多様である. 一方では, それは単語形成 (造語) の特殊な副詞接尾辞である; 例えば接尾辞 *-이* (単語 *많이* において; 形容詞 *많다* から). 他方では, それは副詞的単語形成 (造語) の接尾辞であり, これは他の品詞 (名詞, 形容詞) における単語変化 (屈折) の接尾辞と同義的である; 例えば接尾辞 *-로* / *-으로* (単語 *열심으로*⁽¹⁶⁴⁾ [熱心—] において; これと同音異義的なのが名詞語尾 *-로* / *-으로* であり, 具格の指標である: *칼로*). 単語形成 (造語) の接尾辞としては *-로* / *-으로* は副詞の範疇を作り, 語尾としてはそれは名詞の変種の1つ—名詞の格のみを作るのである. 接尾辞が似ていることはそれらのあるもの (副詞的) が他のもの (格的) から発生することで説明される. ロシア語における類似の状況を比較せよ: "*nozh-om*" <ナイフで>, ここでは *-om* は格であるが, "*begom*" <走って>, ここでは *-om* は副詞の指標である.

これらの接尾辞によって副詞をいわゆる拘束された語幹から, すなわち絶対に独立した単語としては機能しないような語幹から作ることができる. 例えば副詞 *별로* [別—] は副詞の特徴 *-로* を持っているが, この単語の語幹 *별* [別] は独立しては用いられず, それ故この副詞は何らかの一定の単語から作られたと言ってはならないのである. このような副詞は派生副詞と非派生副詞の中間的な位置を占める. 簡単化の目的でわれわれはそれらを派生副詞と同じグループに入れて観察しよう.

§80. 格の同音異義形によって作られた副詞 ここに入るのは次のようにして作られた副詞である:

- a) 具格の同音異義形 *-로* / *-으로* によって.
 - 1) 名詞から:

조식으로 (조식から), 열심으로 [熱心—] (열심 [熱心] から), 진실로 [眞實—] (진실 [眞實] から), 전문으로 [專門—] (전문 [專門] から), 자유로 [自由—] (자유 [自由] から), 처음으로 (처음から);

2) 接尾辞 -적 [的] が指標である活用形容詞 (§73 参照) から: 사실적으로 [事實的—] (사실적 [事實的] から), 승리적으로 [勝利的—] (승리적 [勝利的] から), 작전적으로 [作戰的—] (작전적 [作戰的] から). -적 [的] によって作られた単語自体が非常にまれな場合に副詞となり得ることを考慮に入れなければならない; これらの場合における分化はコンテキストにおいて達成される: すなわち名詞の前ではそれは規定語=形容詞であり, 動詞の前ではそれは状況語=副詞である. しかしながら現代朝鮮語はこの分化を形態論的にも行おうとしている. まさにこのことによって -적 [的] で終わる単語に形態素 -로 / -으로及び -인が補足的に接合することが説明されるのである; 前者は -적 [的] で終わる単語の副詞的性格を強調し, 後者はその形容詞性を強調する;

3) 拘束された形でのみ存在する語幹=語根から: 별로 [別—], 실로 [実—], 절로, 억지로等々.

同じ接尾辞はいくつかの非派生副詞にも接合する: 즉시로 [即時—] / 즉시 [即時], 직접으로 [直接—] / 직접 [直接].

b) 与格の同音異義形 -에によって. この語尾を副詞の接尾辞として用いることを助けるのは, それが名詞においても非派生副詞に固有な場所, 時間のような意味を表わすのに用いられるという状況である. それが接合する語幹は今では大部分語源的には名詞にさかのぼる; いくつかの場合にこれらの語幹はそれ自身非派生副詞であり, したがって接尾辞は単語の副詞的性格を補足的にのみ強調する: 마침에⁽¹⁶⁵⁾, 나중에⁽¹⁶⁶⁾, 의외에 [意外—] (しかしながら同じ意味を持つ의외 [意外] を参照せよ)⁽¹⁶⁷⁾.

§81. 接続形の同音異義形によって作られた副詞 ここに入るのは次のようにして作られた副詞である:

a) -고接続形の同音異義形によって. この接尾辞は動詞 (特徴は補助的な単語하다) に主として接合する; 結合形하-고は普通分割されない -코に融合する; それ故実際には動詞 *hada* の特徴を変えて動詞から副詞を作る接尾辞 -코と言ってよいのである: 결단코 [決断—]. この接尾辞は拘束された語幹にも見られる: 결코 [決—];

b) -게接続形の同音異義形によって. 接尾辞は活用形容詞に接合される (§74 参照): 신속하게 [迅速—] (신속하다 [迅速—] から); -게の代わりに接尾辞 -히が用いられ得る; このことから신속하게 [迅速—] と同時に신속히 [迅

速一]をも用いる可能性があるのである(以下を参照)。さらに, この接尾辞は「名詞+있다」という結合からなる特別な形容詞に接合する: 맛있게 (맛있だから), 힘있게 (힘있だから) 等々。似たような方法で 이렇게 (이러하다から), 그렇게 (그러하다から), 저렇게 (저러하다) 及び 어떻게 (어떠하다から) ⁽¹⁶⁸⁾ というしばしば用いられる代副詞が作られる。

[注] 副詞の範疇を作る接尾辞としての -게 の単語形成的(造語的)役割はまるで明瞭ではない。末尾の -게 を持つ単語が副詞なのは, -게 が単語派生の手段である場合だけである。それらが明らかに状況語の機能を持つ活用形容詞なのは, -게 が統辞論的な機能のしるし, 状況語のしるし(これは必ずしも副詞と等しくはない)である場合である。われわれの記述は -게 が単語派生のしるしであるという言い尽してはいないが実際には便利な前提から出発している。単語形成(造語)の手段と単語派生の手段の区別の問題にかかわるこの問題のすべては一般理論的な意味を持っており, ここで詳しくは論じられない。

しかし, 形態素 -게 が副詞のしるしでも, 状況語のしるしでもないという1つの場合がある。述語として「転換」の動詞(何かになる, 何かにする等々), また意味がそれに似ている単語が現れる文では, -게 によって作られた単語は形容詞であり, 主語あるいは補語に対する一種の規定語(いわゆる後置的規定語)として用いられる。例: 곡식이 [穀食一] 누르게 익소. 그는 나를 가장 행복스럽게 [幸福一] 만든 사람이었다。

ここでは 누르게 と 행복스럽게 [幸福一] は副詞ではなくて形容詞である。

§82. 特別な副詞接尾辞によって作られた副詞 ここに入るのは互いに似ている2つの接尾辞 -이 と -히 である:

a) -이 は副詞を作るのに用いられる:

1) 固有の朝鮮語に入る活用形容詞から。接尾辞は母音の前に用いられる語根の変種に接合する: 깊어 (깊다から), 많이 (많다から), 빨리 (빠르다から; 빨리⁽¹⁶⁹⁾—語根の変種の1つ), 굳어⁽¹⁷⁰⁾ (굳다から), 멀어 (멀다から; しかし 멀리로—接尾辞 로 による副詞の補足的な表示を参照)。特にしばしば名詞+形容詞 없다 の副詞形という結合が用いられる; この結合は1つの合成否定副詞と見ることができる: 의심없이 [疑心一] (의심 [疑心]), 힘없이 (힘), 생각없이 (생각), 지체없이 [遲滯一] (지체 [遲滯]), 소리없이 (소리), 기운없이 [氣運一] (기운 [氣運])。しかしながら, 名詞と 없다 の間に助詞 도 が入り得, またそのような結合で名詞に対して規定語が付き得ることを参照せよ: 아무 말도 없이, 주점함도 없이, 말할 수 없이, 더 할 수 없이 等々;

2) 名詞のだぶり語幹(時に音声的変化を伴う)から: 다달이 (달から),

나날이 (날から), 곳곳이 (곳から) 等々.

b) 接尾辞 -히는하다を持つ形容詞から副詞を作るために用いられる: 副詞を作るに際して하다は接尾辞 -히と取り換えられる: 분명히 [分明—] (분명하다 [分明—] から), 조심히 [操心—] (조심하다 [操心—] から), 엄격히 [嚴格—] (엄격하다 [嚴格—] から), 묵묵히 [黙黙—] (묵묵하다 [黙黙—] から), 간절히 [懇切—] (간절하다 [懇切—] から) 等々. 話し言葉では *h* は接尾辞で鳴音 (*n, l* 等) の後ろで普通落ち, したがって接尾辞 -히と -이는 音声的に一致する. すでに述べたように, 副詞のこの形成方法は上に記述した -게で終わる副詞のタイプと相関的である.

c) 接尾辞 -이는語源的には고집스레 [固執—] 等々のタイプの副詞にも見られる. それらは接尾語스럽다가しるしであるような形容詞から作られる: 이상스럽다 [異常—], 고집스럽다 [固執—] 等々. 現代語の単語形成 (造語) の観点からはこの場合스럽다가스레と取り換えられると言い得る. しかし語源的にはそうではない; 語源的にはここにあるのは接尾語스럽다の語根の第2の変種に接合する接尾辞 -이である: 스투이 (規則によってこう推測される); しかし末尾の半母音 *w* が落ちた結果語尾 *i* は末尾母音とともに1つの音に融合する: 스투이 → 스투이 → 스투. «*φ*~*u*» (무겁다) のタイプの形容詞からいくつかの名詞を作る際の類似の過程を参照せよ: 무거우이 → 무거이 → 무게.

d) まったく非生産的なのは接尾辞 -내で, いくつかの名詞派生の副詞に見られる: 끝내, 마침내.

§83. 状況的關係の助詞と副詞 以下に見るように, 朝鮮語にはあれこれの品詞に接合してその品詞を状況語に変える一連の助詞がある: 例えば分離的意味を持つ씩は数詞を動詞=述語に対する状況語に変える: 하나씩⁽¹⁷¹⁾; まったく同じように比較の助詞처럼は文における名詞の状況的機能を示す. そのような助詞は多い. しかしそれらのどれ1つとしてこの助詞に先行する品詞を副詞には変えない; 例えば比較の助詞처럼の前の名詞は規定語を取る能力を保っている; もしも名詞が副詞の変わったなら, それはこの能力を失うであろう. 1つの助詞だけを多分副詞のしるしと考えることが可能だろう. これは動詞あるいは形容詞の一定の形 (動詞 -는形, 形容詞 -ㄴ形) の後ろの比較の助詞듯이⁽¹⁷²⁾である: 절망하듯 [絶望—] (절망하다 [絶望—] から), 놀라운듯이 (놀랍다から), 근심스러운듯이 (근심스럽다から) 等々.

§84. 副詞の無接尾辞的形成 著しい量の時間と場所の副詞は起源的には名詞である. それらのある品詞から他の品詞への移行は特別な接尾辞によっては表現されない. これは無接尾辞的単語派生である. 例として副詞종일 [終日], 오늘,

래일 [来日] ⁽¹⁷³⁾等々を挙げることができる.

§85. 副詞の後ろの助詞 多くの第1次的な副詞は自身の後ろに助詞 -는と -도を許容する; 前者は分離的機能を持ち, 後者は強調的な機能を持つ: 잘도.

6. 代名詞⁽¹⁷⁴⁾

§86. 単語の特別な部類としての代名詞 言語のすべての単語はそれらによって表される現実の観点から2部類に分かれる. あるものは現実の個々の現象(対象, その性質, 動作, 状態)を名付け, 名付け的機能を持っている. 他のもは現実のあれこれの現象(対象, その特徴等々)を名付けずに示し, コンテキストにおいてすでに言及されたなんらかの単語を示し得る (“vernulsja otec; on byl v teatre” <父が帰って来た; 彼は劇場にいた>); これらの単語は指示的機能 ukazatel'naja funkcija (現実の現象を示す場合は指示的 deikticheskaja, コンテキストですすでに言及された単語を示す場合は前方照応的 anaforicheskaja) を果たす. 名付け的機能を持つ単語には “tetrád” <ノート>, “sinij” <青い>, “zhuzhzhát” <(虫などが) ぶんぶんいう>等々が属する. 指示的な機能を持つ単語には “étot” <この>, “zdes” <ここに>, “takoj” <そのような>等々が属する.

一定の条件のもとでは名付け的機能を持つ単語が指示的な単語として用いられ得る(単語 “dannyj” <英 given 当該の>が文の中で “étot” <この>の意味で用いられる: “Dannyj fakt ne podtverdilsja” <この事実は確認されなかった>). 逆に指示的機能を持つ単語は一定の条件のもとで名付けとして用いられ得る(単語 “sam” <自身>が談話のいくつかの文体で “muzh” <夫>, “xozjain” <主人>という意味で用いられる: “Sam prishel” <かしらが来た>).

すべての指示的な単語は名付けの単語と関連付けられる. しかしそれらのうちあるもの, すなわち客観的現実の対象を示すもの (on <英 he (男性)>, ono <英 it (中性)>, to <英 that>, chto <英 what>等々) は名詞 (stol <英 desk (男性)>, okno <英 window (中性)>, more <英 sea (中性)>等々) に関連付けられる.

それらのうち他のもの, すなわち特徴を示すもの (takoj <英 such>, kakoj <英 what どんな>等々) は形容詞 (svetlyj <明るい>, vysokij <高い>等々) に関連付けられる.

それらのうちさらに他のものは副詞等々に関連付けられる. この相関性は普通指示的な単語が, それらが相互関連する名付けの単語の形態論的構造を多かれ少なかれ反映していることに現れる.

指示的機能を持つ単語は一般的な名付け—代名詞によって統合される。この術語は相対的なもので、大多数の伝統的な術語と同じく、この種の単語の真の意味を反映していない。

代名詞は特別な品詞と見なされ得る。この場合それは指示的（指示的，前方照応的）機能を持った単語の部類として規定される。しかし代名詞は品詞をなさないこともあり得る。この場合それらは異なる品詞に配分され、その構成において指示的機能を持つ単語の特別なグループ（例えば代名詞，代形容詞，代副詞）をなす。いずれかの方向での問題の解決は、この種の単語がどの程度形態論的及び統辞論的に独立しているかにかかっている。

朝鮮語では指示的機能を持つ単語は、一連の形態論的及び統辞論的特殊性を持つので、独立の品詞にとりたて得る。

第1に、代名詞は、それらが関連付けられる品詞に固有な統辞論的潜在力を賦与されてはいない。代名詞は普通限定された統辞論的結合可能性を持っている。形容詞は副詞との結合に入り込み得る（*ochen' xoroshij* <たいへんよい>）が、それと関連付けられる代名詞（代形容詞）は副詞とは結合しない（“*takoj*” <そのような>，“*kakoj*” <どんな>のタイプの単語はそれ自身の前に副詞を持ち得ない）。名詞は名詞の規定語との結合に入り込み得るが、それと関連付けられた代名詞は名詞の規定語との結合に入り込まない。名詞は規定語=形容詞との結合に入り込み得るが、それと関連付けられた代名詞がこの可能性を持つのは例外的な場合、文学的言語の一定の文体においてのみである。例は増やし得る。したがって統辞論的には代名詞はそれらと関連付けられる品詞に明らかに対立しているのである。

第2に、代名詞は形態論的にも著しく自律的である。例えば一連の代名詞（이, 그, 저, 무슨等々）は規定語として現れる時に、名付け的機能を持った単語（名詞，形容詞，動詞）とは逆に修飾性 *atributivnost'* の特徴を失う；これは、したがって、語形変化のない構造を持つ単語である。他の代名詞（나, 너）は曲用において本質的なずれを持ち、これらのずれは代名詞を名詞に対立せしめる。一連の特殊性は複数の形成にも現れる。曲用の可能性を持つ一連の代名詞はすべての格を持つわけではない。

したがって形態論的にも代名詞はそれが関連付けられる品詞に著しく対立するのである。

上に述べた考えにより代名詞はわれわれにより特別な品詞に取り立てられるのである。

朝鮮語のすべての代名詞は二重にグループに分けられる。モーダルな関係では代名詞は疑問=不定代名詞と肯定=定代名詞（あるいは単純定代名詞）に下位区分される。

指示(対象への指示, 特徴への指示等々)の性格の観点からは代名詞は代名詞 **imennye mestoimenija** (広い意味での「対象」への指示), 代形容詞(特徴への指示), 代副詞(特徴の特徴への指示), 代数詞(数への指示)に下位区分される⁽¹⁷⁵⁾.

§87. 疑問=不定代名詞 形式的な関係では朝鮮語における疑問=不定代名詞は非派生疑問=不定代名詞及び派生疑問=不定代名詞に分かれる. 非派生代名詞はロシア語の疑問代名詞と不定代名詞を併せ持つが, 文アクセントによってのみ区別される: すなわちアクセントなしの代名詞は不定代名詞と理解され, 代名詞の上にアクセントがあれば, それを疑問代名詞に変える: **여기 무엇이 있소? chto zdes' est'?** <ここに何がありますか?> (「何」にアクセントがある), しかし **여기 무엇이 있소 zdes' chto-to est'** <ここに何かがあります> (アクセントは述語「ある」にある). 疑問代名詞を不定代名詞の意味で用いることは, 知られているように, ロシア語にも備わっている; **“Esli kto pridet, skazhite, chto ja skoro vernus”** <誰かが来たら, すぐ帰ると言ってください>. 派生代名詞は疑問の意味は持たない. 以下に見るように, 派生代名詞は非派生代名詞に一連の形態素を接合することによって作られる.

非派生代名詞は代名詞, 代形容詞, 代副詞, 代数詞に下位区分される.

a) 代名詞は次のように分類される

1) 人称代名詞: 누구, 누, 님 <誰, 誰か>

[注] 누は主として主格で用いられる: 누가 힘이 센가?

님은主格と属格の古形である.

代名詞「誰」は朝鮮語では不定の意味を持ち得る: 누가 아니 왔소? <誰かが来なかったか?>, 누가 올지라도 <誰かが来ても> 等々.

2) 対象代名詞: 무엇, 무어 <何, 何か>

[注] 무어は無엇の話し言葉の変種.

3) 場所代名詞(場所と方向の指標): 어디 / 어데 (古形어대) <どこ, どこか>

代名詞어디 / 어데では未分化の場所と方向の意味は格語尾 -로が接合することによって分化し得る: 어디로 / 어데로 <どこへ, どこかへ>.

b) 代形容詞は次のように下位区分される:

1) 指示代形容詞: 어느 <どの, どれかの, ある>

この代形容詞は肯定代形容詞「この」, 「その」と関連付けられる. しばしば 어느때 <いつ>, <いつか>; 어느것 <どれ>, <どれか>; 어느곳 <どこ>, <どこか> 等々という単語結合にあらわされる.

2) 規定代形容詞 무슨 <何の>, <何かの>; 어떠하다 (述語の位置で),

어떠한, 어떤 (어떠하다の省略形) <どんな>, <なんらかの>.

c) 代副詞は次のように下位区分される:

1) 動作様式: 어떻게<どのように>, <どのようにか>.

2) 時間: 언제<いつ>, <いつか>.

d) 代数詞: 몇<何, いくつ>, <いくつか>. 얼마<いくら>

派生代名詞は非派生代名詞に形態素 -나 /-이나, -든지 /-이든지, -ㄴ지 /-인지⁽¹⁷⁶⁾を接合することによって作られる. 音声 i は一種の結合母音と見なされ, 末尾子音を持つ代名詞語根を -나, -든지, -ㄴ지と結ぶものである⁽¹⁷⁷⁾. それらのうちの一部は否定述語の際にはロシア語の否定代名詞の意味を獲得する.

a) 形態素 -든지によって作られた派生代名詞. 形態素 -든지 はロシア語の ‘-nibud’ ‘-libo’ (kto-nibud’, kto-libo<誰か, 誰であれ>等々) の意味を持つ; 否定述語の際には非定代名詞を作る.

누구든지 <誰でも>

무엇이든지<何でも>

어디든지<どこでも>

어디로든지<どこにでも>

어디서든지<どこでも, どこからでも>

무슨. . . (이)든지<何の. . . とも>

어떠한. . . (이)든지<どんな. . . とも>

어떻게든지<どうでも>

언제든지<いつでも>

얼마든지<いくらでも>

規定語としてのみ用いられる代形容詞무슨, 어떠한には形態素 -든지は直接接合しない; 形態素 -든지は無슨, 어떠한がかかわる名詞の後ろに付く; したがって -든지はこの場合 移動的な形態素である.

形態素 -든지を持つ代名詞が用いられる例:

무엇이든지 먹을 것을 주시오.

이학년생의 누구든지 부르시오.

b) 形態素 -ㄴ지によって作られる派生代名詞; 形態素 -ㄴ지는ロシア語“-to” (kto-to, chto-to<誰か>等々) の意味を持つ.

누구인지<誰か>

무엇인지<何か>

어딘지<どこか>

어디론지<どこへか>

어디선지<どこかで, どこからか>

形態素 -ㄴ지を持つ代名詞が用いられる例:

어디로인지 갔다.

어디선지 시계가 여덟시를 치는 소리가 들려온다.

c) 形態素 -나 (母音の後) / -이나 (子音の後) によって作られる派生代名詞 ;
この形態素は一般化のタイプの代名詞を作る :

누구나 <誰も>

무엇이나 <何も>

어디나 <どこも>

어디로나 <どこへも>

어디서나 <どこでも>

누구나 아니라 할 것이다.

이것이 누구에게나 필요하다.

ここで見るように, 形態素 -나는格語尾の後ろに接合される.

§88. 肯定=定代名詞 この代名詞は2つのグループに分けられる. 1つのグループには指示代名詞が語幹の中にある代名詞が入り, 他のグループには人称代名詞が入る.

A. 第1グループ—指示代名詞及びその派生代名詞

本来の指示代名詞は名詞, 形容詞, 副詞の代替物である代名詞の基礎に横たわっている. 話し手 (1人称) との関係に応じて代名詞は3つのグループに分かれる: 第1平面の代名詞 (話し手に近い), 第2平面の代名詞 (話し手から遠ざかった), 第3平面の代名詞 (話し手からもっとも遠ざかった).

指示代名詞 :

第1平面 : 이, 요

第2平面 : 그, 고

第3平面 : 저, 조

代名詞요, 고, 조は侮蔑的なニュアンスを持つ.

名詞代替の代名詞 (対象代名詞) :

a) 対象名詞の代替物 :

第1平面 : 이, 이것

第2平面 : 그, 그것

第3平面 : 저, 저것

代名詞이것, 그것, 저것には補助名詞것がある ; その変種거あるいは게 (이거 / 이게, 그거 / 그게, 저거 / 저게) は書き言葉的ではない.

b) 人称代名詞の代替物 :

第1平面 : 이, 이이

第2平面 : 그, 그이

第3平面 : 저, 저이

代名詞이이, 그이, 저이には補助名詞이がある ; 이の代わりに은があり得る (이분, 그분, 저분) ; その場合代名詞は鄭重さの意味を獲得する ; 이の代わりに놈もあり得る (이놈, 그놈, 저놈) ; その場合代名詞は粗暴な,あるいは親しい意味を獲得する. 이, 분, 놈の代わりにもっと具体的な意味を持つ他の名詞 (例えば사람) の代入が可能である ; この場合多分指示代名詞と名詞の結合 (이사람) は代名詞と等価の機能を持つのであろう. 上述のことから第3人称代名詞の構造は指示代名詞の体系に基づいていることが明らかである.

c) 場所の意味を持つ名詞の代替物 :

- 第1平面 : 여기, 예
- 第2平面 : 거기, 게
- 第3平面 : 거기

d) 方向の意味を持つ名詞の代替物 :

- 第1平面 : 이리
- 第2平面 : 그리
- 第3平面 : 저리

すべての名詞の代替代名詞はそれによって取り換えられる品詞と同じ形態論的特徴を持つ. このことは特に, それらが格によって変化し (여기로, 여기서, 이리로等々), 複数形 (이것들, 여기들, 이리들等々) を持ち得ることを意味する.

形容詞の代替代形容詞 :

a) 述語として :

- 第1平面 : 이러하다, 이렇다
- 第2平面 : 그리하다, 그렇다
- 第3平面 : 저리하다, 저렇다

b) 規定語として :

- 第1平面 : 이러한, 이런
- 第2平面 : 그러한, 그런
- 第3平面 : 저러한, 저런

副詞の代替代形容詞 :

- 第1平面 : 이렇게, 이리
- 第2平面 : 그렇게, 그리
- 第3平面 : 저렇게, 저리

B. 第2グループ一人称代名詞 本来の人称代名詞と考えられるものは1人称と2人称の代名詞だけである. それはまず何よりも나と너である. 主格ではそれらは내가, 네가를, 属格では2つの変種나의 / 내, 너의 / 네를, 与格でも2

つの変種나에게 / 내게, 너에게 / 네게を持つ. これで見ると, 人称代名詞の属格はロシア語の物主代名詞 (所有代名詞) に対応する. 疑問代名詞누기에 関しても類似の現象を比較せよ.

이것이 누구의 손수건입니까?

人称代名詞に入るすべての他の単語は語源的にはあるものは非人称代名詞であり, あるものは代名詞として用いられた名詞である. 例えばすべての3人称代名詞は語幹の中にある指示代名詞にさかのぼる (上述参照).

特別に指摘しなければならないのは, 3人称代名詞が朝鮮語では卑称, 謙遜の意味を伴う1人称の意味で用いられ得ることである.

나는 가르치는지요 저는 배우는자라.

저는 아주 개를 싫어합니다.

上の例文のうち最初のものでは저は「彼」の意味を持ち, 2番目の文で同じ代名詞は「わたくし」を意味する⁽¹⁷⁸⁾.

代名詞として転義的に機能する多数の名詞のうちよくつかわれる당신 [当身] <あなた>を指摘しなければならない. 古い書き言葉にはそのような名詞は非常に多数あった.

人称代名詞の複数は特別な単語により (우리), 語尾 이 (희から), 들により,あるいはこれらの語尾の組み合わせにより—저이 (저희から), 너이 (너희から) / 너희, 우리들, 그들, 저이들 (저희들から) 等々—作られる.

7. 後置詞

§89. 後置詞のクラス 後置詞はロシア語の前置詞と等価である. 後置詞の前置詞との基本的な違いは名詞あるいは代名詞に関して占められる位置であり, 前置詞は名詞あるいは代名詞の前, 後置詞は後ろである⁽¹⁸³⁾. 朝鮮語の後置詞は名詞派生⁽¹⁸⁴⁾, 動詞派生, 副詞派生, 本来の後置詞⁽¹⁸⁴⁾の4つの部類に分けられる. それらは起源, 構造及び従属する単語 (名詞, 代名詞) との結びつきによって互いに区別される.

§90. 名詞派生の後置詞⁽¹⁸⁴⁾ 名詞派生の後置詞がそう呼ばれるのは, それらが後置詞に変わった名詞 (後置詞の機能を持った) だからである.

a) それらは普通は名詞の辞書形の後ろに接合される; もしも名詞が有情名詞ならば, 後置詞の前に属格形 (稀に用いられる) を取り得る; 属格形は人称代名詞は必ず取る;

b) 名詞の辞書形とともにそれらは文の1つの成分として現れ得る総体をなす;

c) 「名詞+後置詞」という結合は文の成分をなさない；文の成分になるためには、それは格語尾を取らなければならない。格の選択はこの結合が結びついている単語にかかっている。格語尾（これはゼロでもあり得る）によって「名詞+後置詞」という結合は補語、状況語あるいは規定語等々になる。

名詞派生の後置詞は直義と転義を持ち得る。後置詞の直義は空間的意味である。後置詞の転義は時間的意味と総体的意味である。名詞派生の後置詞のすべてが直義と転義の双方とも持っているわけではない。

後置詞は絶対的に、すなわちそれに先行する名詞あるいは代名詞なしに用いられ得る。このことからそれが後置詞であることを止めないのは、例えば他動詞“pet’”<歌う。英 to sing>が文 “on poet”<彼は歌う。英 he sings> (“on -- pevec”<彼は歌手だ。英 he is a singer>という意味で)で絶対的に用いられる時に他動詞、まして動詞であることを止めないのと同じである⁽¹⁷⁹⁾。

いくつかの後置詞は動詞の後ろで用いられる；動詞が何よりもしばしば述語となり、文の従属的な成分を取り得るのであるから、後置詞は単語結合の後ろに、そして文の後ろにさえ付き得る。この用法は後置詞の転義から出て来る。この場合後置詞は接続詞の機能を獲得する。

最後に、後置詞は複合語に第1の要素として入り得る。後置詞はしたがって単語形成（造語）、すなわち言語の語彙構成の補充に参加する。この場合後置詞は後置詞であることを止め、複合語の語根、語根複合の1つに転換する。

名詞派生の後置詞の徹底的な研究は特別な作業の対象である。以下に各々の名詞派生の後置詞に関するもっとも基本的な情報が与えられる。

a) 後置詞앞 (ㅏ~ㅑのタイプの交替語根を持つ) 及び뒤

直義：

우리 학교앞을 지나는 큰 길은 장거리로 가는 길어요。

남순이는 책상앞에 앉아서 열심히 공부하고 있습니다。

우리 마을뒤에는 높은 산이 솟아 있고 앞에는 넓은 들이 있으며 맑은 시내가 흐르오。

점순이는 달구지를 끌고 그뒤를 따라갔다。

これらの後置詞の転義は時間的意味である；뒤の場合はそれは普通である；앞の場合は多分それは絶対的な用法（以下参照）でのみ可能だろう：그뒤에。

絶対的な用法（先行する名詞なし）：얼굴을 앞으로 들다；앞에 있다。

複合語における後置詞：앞이⁽¹⁸⁰⁾<前齒>，뒷산 [一山]。

b) 後置詞우あるいは위及び밑あるいは아래；우及び위⁽¹⁸¹⁾は相互に交換可能な変種である。後置詞밑はあるものが他のものの下に（pod, 英 under）ある時に用いられるが，아래はあるものが他のものの下方に（vnizu, 英 below）ある時に用いられる。

直義 :

일찍 밖에 나가 보니 눈위에 여러가지 발자국이 났다.
 어름위를 끌어주었습니다.
 개미들은 돌아가는 공위를 여기 저기 기어다니고 있었습니다.
 산위에서 부는 바람! 서늘한 바람!
 눈위의 발자국.
 언덕아래로 흐르는 시내는 햇볕에 번쩍이고 있습니다.
 나무 그늘아래서 쉬다가 잠이 들었습니다.
 산아래에 집이 있소.

轉義は多分後置詞のみが持っている ; この轉義は相対的意味であり, 時間的意味ではない ; . . . 의 표제밑에 [標題—] 보도하다 [報道—] ; 지도밑에.

3つの後置詞とも 絶對的に用いられ得る.

複合語では우 / 위⁽¹⁸¹⁾及び아래가用いられる : 아랫이⁽¹⁸²⁾<下齒>, 윗사람, 웃이⁽¹⁸²⁾<上齒>.

c) 後置詞안あるいは속, 밖 (ㄱ~ㅍのタイプの交替語根を持つ)

後置詞안은内部が中空の空間(家, 内部に家のある構内, 生徒のいる教室等々)であるようなものに関して用いられる. 他のあらゆる空間の内部は後置詞속で表わされる.

直義 :

책상속에 책이 있소.
 개구리와 뱀은 땅속에서 겨울을 납니다.
 물속을 다니는 군함을 잠수함이라고 합니다.
 우리들은 진작 물속에 뛰어들고 싶었다.
 아버지와 형님은 뜰안의 눈을 끌고 나는 이웃에 통하는 길을 끌었다.
 공장안에 들어서니 노동자들이 기계를 부리고 있었습니다.
 그때에 선생님이 새 일력을 가지고 들어오셨습니다. 그리고는 잠시 교실안을 두루 살펴보시다가 남쪽 벽에 거시었습니다.
 창밖에 머리를 내여밀다.
 문밖에 넓은 길이 있습니다.

後置詞속의轉義は相対的意味である.

가혹한 전투환경속에.

轉義の後置詞밖은ロシア語の 'krome' <ほかに> の意味を持ち, 普通否定の述語にある場合に用いられる.

다섯밖에 없다. **Imeetsja vsego lish' pjat' (shtuk).**
 오리밖에 아니 남았다. **Ostalos' vsego lish' pjat' li.**

[注] ロシア語訳に際して否定述語は肯定として訳し, 後置詞ㅁは上の例にあるように‘vsego lish’とするのがよい.

d) 後置詞옆 (ㅄ~ㅅのタイプの交替語根を持つ) 及び곁 (ㅅ~ㅆのタイプの交替語根を持つ). 後置詞옆は後置詞앞及び뒤と相関的である. それは ‘sboku’ <横, 脇>, ‘okolo’ <そば> という意味を持ち, あるものが他のものの脇にあることを示す必要がある時に用いられる.

後置詞곁は後置詞앞, 뒤, 옆と対立し, それらに対してもっと抽象的, もっと一般的である. それはあるものが他のものと並んであり, それが「そば」にあること (前, 後ろあるいは横かを) を正確に規定しないことを示す必要がある時に用いられる.

これらの後置詞は多分直義だけを持つ.

우리들은 그의 옆으로 가서 가리키는 곳을 바라보았습니다.

손으로 뺨옆으로 부채질을 해 보십시오.

길옆 나무에 말을 매었다.

형님의 곁에 앉았다.

자기의곁에 히었다.

e) 後置詞가운데.

直義 :

우리 학교는 마을가운데에 있소.

この後置詞の転義は相対的意味である.

제비는 많은 새들가운데서 사람들에게 가장 리로운 새란다.

それは複合語に入り得る : 가운데소리, 가운데손가락.

名詞派生の後置詞には多分사이も入る : 밤사이.

名詞派生の簡潔でもっとも一般的な観察は詳細な補足的な証拠を必要とするいくつかの予備的な結論を出すことを許す.

a) 名詞派生の後置詞は元の名詞と異なる関係を持つ ; 例えば, 後置詞ㅁは疑いなく名詞속 ‘nutro’ <中>, ‘dusha’ <心> と緊密に結びついている. この後置詞が名詞に起源があることは疑いがない : すなわち名詞自身が今まで朝鮮語に存在するのである ; ここではある品詞の他の品詞への転化を述べるができる. 逆に, 後置詞ㅁ <外>, <ほか> は名詞のどれとも関係を持たず, それ自身名詞の機能を持たない ;

b) 名詞派生の後置詞は非同種的なパラダイグマを持つ, すなわち格変化は一樣でない ; ある後置詞のパラダイグマは最大限に完全で, 逆に, 他の後置詞のパラダイグマは最小である ; 例えば, 後置詞가운데는語幹格のほかになおも2つの格を持っている : 가운데서, 가운데에 ;

c) 名詞派生の後置詞のすべての格が同じ使用頻度を持つわけではない. もっ

ともしばしば用いられるのはそれ自体場所的意味を持つ格である：すなわち後置詞自体のもっともよく用いられる意味が直義，すなわち空間的関係の表示であるから，このことは完全に理解できる。まさにそれ故に後置詞の後ろに与格及び与位格（語尾 -에 と -에서）がもっともしばしば現れるのである；

d) 転義の観点からは名詞派生の後置詞はまことに一様ではない。例えば，多分転義を許用しない後置詞 *옆* や *앞* のような後置詞がある。例えば，時間的転義のみを許用する *뒤* のような後置詞がある。最後に総体的転義のみを許用するような *밑* のような後置詞がある；

e) 名詞派生の後置詞は機能の点でも一様ではない。例えば，*앞* のような名詞のみを支配し得る後置詞がある。例えば，*뒤* のように名詞に対する支配とともに動詞に対する支配を許用するような後置詞がある。最後の状況はそのような後置詞を単語結合と文をそれらの間で結ぶために用いる，言い換えればそれらを接続詞の機能で用いる可能性を与える（このことについて詳しくは「統辞論」参照）；

f) すべての後置詞が絶対的用法を許容するのではなく，絶対的用法におけるいくつかの後置詞は，例えば，*앞으로*（‘*vpered*’，‘*vpred*’ <今後>の意味で）のように副詞を成立せしめる；

g) 最後に，すべての後置詞が等しい程度において単語派生，複合語の形成に参加しているわけではない。例えば，後置詞 *앞* と後置詞 *뒤* が複合語の形成に広く用いられているとするならば，複合語を作るための *ㅁ*（もしも *안ㅁ* を考慮しないならば）あるいは *ㅁ* の使用の場合はわれわれには知られていない。

これらすべての命題は予備的なものであり，補足的な研究を必要としている。

§91. 動詞派生の後置詞 動詞派生の後置詞は，いくつかの例外を除いて，2つの形：連体形と連用形を持つ。連体形 *priimennaja forma* は後置詞によって形作られた名詞が他の名詞に従属し，それに対して補語となる場合に用いられる（“*vojna za svobodu i nezavisimost*” <自由と独立のための戦争>）。連用形 *priglagol'naja forma* は後置詞によって形作られた名詞が動詞に従属し（“*voevat za svobodu i nezavisimost*” <自由と独立のために戦う>），それに対して補語あるいは状況語となる場合に用いられる連体形の特徴は -*ㅁ* で，動詞の過去連体形にさかのぼる語尾である；連用形の特徴は現代語では -*여* で（古い書き言葉で -*야*），先行の接続形にさかのぼる語尾である。例：

連体形	連用形
관한 [関—]	관하여 [関—]
대한 [対—]	대하여 [対—]
위한 [為—]	위하여 [為—]

의한 [依一]	의하여 [依一]
통한 [通一]	통하여 [通一]
처한 [処一]	처하여 [処一]
비롯한	비롯하여

後置詞있어서 / 있어は名詞の前に用いられて, 属格形を取る: 있어서의. いくつかの後置詞は一般に連体形を持たない; そのような後置詞に齒, 例えば, 인하여 [因一] が属する.

- 외무상 연설에 대한 출판물의 반향.
- 공장과 운수를 위한 연료를 더 많이 생산하라!
- 조선은 자유와 독립을 위하여 싸운다.
- 제일차 세계대전에 있어서의 국가간의 관계.

名詞派生の後置詞とは異なり動詞派生の後置詞はそれらに従属する名詞を間接的に, 格を通じて支配する. 後置詞が支配する格は与格, 对格, 具格, 共格である.

与格を支配する後置詞:

- (에)있어서
- (에)대하여 [对一]
- (에)관하여 [関一]
- (에)의하여 [依一]
- (에)이르러
- (에)처하여 [処一]
- (에)제하여 [際一]

对格を支配する後置詞:

- (를)통하여 [通一]
- (를)위하여 [為一]
- (를)걸쳐
- (를)향하여 [向一]
- (를)비롯하여

具格を支配する後置詞:

- (로)하여
- (로)말미암아
- (로)향하여 [向一]

共格を支配する後置詞:

- (과)아울러

大部分の後置詞は漢字語語根要素から作られる; 例外は말미암아, 아울러, 있어서, 이르러, 비롯하여である.

後置詞は自身の基本的な, 第1次的な機能のほかにある単語結合あるいは文を他の単語結合あるいは文と結合するために用いられ得る; この場合それらは接続詞的機能を持つ. しかしながらそのような機能はすべての後置詞が持つのではない. 例えば, 대하여 [対一] はそのような機能は持つが, 통하여 [通一] は持たない. 複合文と単語結合における後置詞の機能は「統辞論」で述べられている.

§92. 本来の後置詞 本来の意味での後置詞に属させるべきものは, それらの元になった品詞と直接の関係を保たない後置詞, 及び起源が何もわからない後置詞である.

これらの後置詞はいくつかのグループに分かれる:

第1グループ⁽¹⁸⁴⁾には名詞派生の後置詞に関連づけられる後置詞が入る. その起源からしてそれらは中国語の単語である. 朝鮮語ではそれらは後置詞としてのみ機能する. 単語속が「心」, 単語앞が「前」の意味で用いられるとすれば, それらに対応する中国語の単語내 [内], 전 [前] はそのような意味あるいはそれらに近い意味を表わさず, ある単語の他の単語への関係⁽¹⁸⁵⁾を表わすためにのみ機能する. したがって, これは真の意味での後置詞である. この第1グループに入るものは次のものである:

a) 전 [前]; 時間的意味のみを持つ; 例: 기한전에 [起源前一], 삼년전에 [三年前一]; 単語結合及び主文に付く付加文を結ぶために第2体言形(語尾기)の後ろに用いられる: 意味「...する前に»: 날이 채밝기전에 [前一];

b) 후 [後]; 多分時間的意味のみを持っているだろう; 혁명후에 [革命後一], 삼년후에 [三年後一]; 状況語的意味を持つ付加文あるいは単語結合を表わすために過去連体形の後ろにも用いられる: 그가 나가신후 [後];

c) 하 [下]; 相対的意味のみを持つ: 관할하에 [管轄下一] 두다; 쏘련군의 [一聯軍一] 원조하에 [援助下一]; 지도하에 [指導下一]; 자본주의하의 [資本主義下一] 독점 [独占];

d) 내 [内]; 直義と転義を持つ: 동소문내 [東小門内], 기한내에 [期限内一];

e) 외 [外]; 転義, 非空間的意味でのみ用いられる: 이상 [以上] 열거한 [列举一] 수입외에 [收入外一];

죄악외에는 아무 것도 아니다. ; 이외;

f) 중 [中]; 普通は転義でのみ用いられる:

그들중에 누가 옳고 그르겠습니까?

ここで見るように, 名詞派生の後置詞とそれらと関連付けられる本来の後置詞の間には機能と意味に根本的な違いが見られる. 本来の後置詞は主として転

義, 特に相対的な意味を表わすのに用いられる.

本来の後置詞の第2グループをなすのは受信者あるいは動作の源を表わす朝鮮の固有語である. ここには次のものが入る:

a) 더러⁽¹⁸⁶⁾: 動作, 特殊には言葉(質問等々)が向けられる受信者を示す.

누구든지 동생더러 『애 정애야 너는 누가 제일 고우나?』 하고 물으면 서슴지 않고 『영애 언니가 제일 곱지』 하고 대답합니다.
저사람더러 물어 보시오.

b) 한테⁽¹⁸⁶⁾: 動作の有る時は受信者(「誰に」), 有る時は源(「誰から」, 「誰の側から」)を示す. この後置詞は有情名詞とともにのみ可能である; 助詞 -는及び格語尾 -서及び -로によって形作られ得る.

나한테 오십시오!

그들한테서 새 맛이 다 살아졌다.

나는 아버지가 어머니한테서는 생전 한번도 맞아 본 적은 없어요.

일본 군대는 우리 의용군한테는 늘 패를 보았습니다.

次の文における後置詞の特殊な意味を参照せよ:

조선 인민은. . . 일천구백사십오년 팔월십오일 쏘련의 힘으로 일본한테서 해방이 되었다.

c) 하여금(書き言葉하여곰⁽¹⁸⁷⁾) - 具格を支配する後置詞; 動作をさせる, 起こさせる, 助力する, 大目に見る相手の人物を示す; 言い換えるなら, この後置詞は使役ヴォイスにおいて動作の直接の遂行者を作る. しかし時にこの後置詞は他動詞(転移動詞)とともに単に対象を示すのに用いられる.

일청전쟁에서 청국의 패복은 일제로 하여금 조선을 완전 장악케하였다.

この種の後置詞には多分与格を支配する다 / 다가⁽¹⁸⁸⁾を入れるべきだろう. この後置詞の意味は不明瞭である. 事実上それは与格にいかなる補足的なニュアンスをももたらさない: 물에 / 물에다가; 동무에게 / 동무에게다가等々.

第3グループ부터⁽¹⁸⁶⁾, 까지⁽¹⁸⁶⁾

後置詞부터は基本格, 具格あるいは与位格を支配する:ゼロ+부터あるいは-로+부터⁽¹⁸⁹⁾あるいは-에서+부터⁽¹⁸⁹⁾. これは, 名詞派生の後置詞と同じく, 基本的意味と転義を持つ. 부터の基本的意味は空間的である. この意味ではそれは独立しても, 後置詞까지によって形作られる他の名詞と対をなして用いられ得る.

평양으로부터 편지가 왔다.

평양으로부터 원산까지 몇리나 됩니까?

일 이 삼학년 학동들은 한 줄로 버려져서 산기슭에서부터 토끼를 울려 보시오.

この後置詞の他の意味は時間的である；ここでもこれは独立しても，後置詞
까지（この場合時間的意味を持つ）によって形作られる名詞との結合におい
ても用いられる。

아침부터 저녁까지 공부합니다。

중국인민지원군은 그 첫날부터 조선인민군 부대들과 함께 영웅적으로
투쟁하였다。

지금으로부터 이년전。

後置詞부터は第3の意味（相対的であり，抽象的關係を示す）で用いられる。

로동자들이여! 공장을 수재로부터 방위한 룡녕천 제 방에 다 같이 돌격
하자!

第4グループ⁽¹⁸⁷⁾は共格を支配し，一般的意味によって統合された後置詞によ
って取り立てられる。これは함께，더부러である。

우리 형님과 더부러 꽃 구경 갔다왔다。

중국인민지원군은 조선인민국과 함께 영웅적으로 투쟁하였다。

上にわれわれは第4タイプの後置詞，すなわち副詞的後置詞に言及した。こ
のグループの後置詞のうちわれわれに知られているのは共格を支配する같이 1
つだけである；같이は形容詞갈다の副詞形である：그와 같이 왔다，ただし絶対
的用法 같이 온 동무。

8. 助詞

§93. 「助詞」の概念の定義. 助詞の部類 「小詞⁽¹⁹⁰⁾と呼ばれるものは，...
他の単語，単語群，文の意味に主として補足的なニュアンスをもたらし，さま
ざまな文法的... 關係を表わすのに用いられる単語のクラスである」(V. V.
Vinogradov, *Russkij jazyk*, 1947, str. 663. V・V・ヴィノグラードフ、『ロシア語』,
1947, 663 ページ)。

すべての助詞はいくつかの部類に分けられる：接合助詞，限定助詞，対立助
詞，分離助詞，比較助詞，量助詞，否定助詞等々。いくつかの場合では同一の
助詞がいくつかの機能を持つ；このような助詞をなんらかの部類に所属せしめ
るのは条件付きである。朝鮮語で助詞の数と分類は確定していない。それ故以
下に提案される助詞の記述は簡単で予備的なものである。

§94. 助詞の個々の部類の記述 a) 限定助詞 動詞あるいは形容詞の後ろの
限定助詞は，すべての他の動作，状態あるいは性質がこれらの動詞あるいは形
容詞によって表されるもの以外はこの対象のために除外されることを示す(“éta
mashina tol’ko molotit”<この機械は脱穀するだけだ>)。名詞の後ろの限定助詞

は、すべての他の対象あるいは人物がこれらの名詞によって表されるもの以外はこの特徴を持たないことを示す (“*tol’ko éta mashina molotit*” <この機械だけが脱穀する>). 限定助詞は文全体にかかわることがある；この場合限定助詞はこの文に記述されたことのほかには何らかの他の事件が存在しないことを示している (“*poka tol’ko grom gremit*” <今のところ雷がなっているばかりだ>). これが限定助詞の基本的意味である.

朝鮮語で限定助詞に入るのは만, 뿐, 따름, 다만, 뿐더러, 라야⁽¹⁹¹⁾である.

만は名詞の後ろにのみ接合される；만을動詞あるいは形容詞に接合するためには만에名詞形を付与しなければならない：すなわちそのような形とは体言形（語尾 -기）である；「体言形+만」という結合は補助動詞하다によって完結する：막기만 하다.

그 사람만 아니 왔다.

기계는 쉬지 않고 돌기만 하면 상하기 쉽습니다.

漢字語動詞では만は하다に先行する.

그와 나는 묵묵히 한참동안 말을 못하고 악수만 했다.

뿐は述語にのみ接合する；뿐を動詞あるいは形容詞に接合するためには뿐に未来連体形を付与しなければならない. この場合の連体形のテンスは形式的であり，現実的ではない；「未来連体形+뿐」という結合は，発話の条件に応じて，繫辞（肯定形も否定形も）によって完結する.

불뿐이다；바람이 불뿐아니라 비가 옵니다；그것뿐이다.

뿐더러は뿐とは違って限定的意味ではなく限定=接合的意味を持つ；この助詞は動詞あるいは形容詞の未来テンス連体形に接合して（時間の意味は形式的），対象に固有なのが動詞あるいは形容詞によって表される性質あるいは動作だけではなく，補足的になおもなんらかの他の性質，他の動作でもあることを示す..

욕을 할 뿐더러 때리오.

따름は述語の後ろにのみ接合する；따름を動詞（繫辞を含む）あるいは形容詞に接合するためには，따름に未来テンス連体形を付与しなければならない；この場合の連体形のテンスは形式的である；「未来テンス連体形+따름」という結合は，発話の条件に応じて，繫辞（肯定形も否定形も）によって完結する.

불 따름아니라 도와 주시오；먹을 따름이오；다만 작자가 조선사람일

따름이다（他のこと，例えば，話題にも，作品にも何も朝鮮的なものはないことが言外に理解される. 限定は文全体にかかわるものである）.

야は先行の接続形（語尾 -아 / -어）の後ろに，当為性の分析的な形 (§43 参照) で見られる：읽어야 한다；

환자를 입원시켜야 된다. しかしこれはこの分析的な形以外にもある야のもっと広い用法の一部に過ぎない.

적을지 보아야 알겠소.

온전한 씨야 이런 목적을 이르겠소.

라야は야とは逆に名詞の後ろに, 多分普通は主語の位置で, 接合される:

그사람이라야 그런 일을 하겠소.

중국 글로 된 것이라야 중국 문학일 터이지요.

例で見るように, 末尾の子音を持つ名詞の後ろでは라야の代わりに이라야が接合される.

上述のすべての限定助詞はそれらがかかわる単語の後ろに続く. 助詞다만はそれに先行する; 다만は文の中に他の限定助詞만, 뿐, 뿐만がある場合にのみ用いられ得る; テクストにしばしばみられる뿐만は2つの助詞뿐と만의結合である.

b) 分離助詞 分離助詞は文の同種的成分及びこの同種的成分がかかわる文の成分の結合の特別な性格を示す. この結合の特別な性格は非両立性と呼ばれる. “on izvestit vas libo pis’mom, libo telegramoj” <彼は手紙あるいは電報であなたに知らせる>という文で2つの可能性(手紙で知らせる, 電報で知らせる)のうちなんらかのひとつの可能性だけが実現し, 他方の可能性は絶対的に除外されることが表わされる; この場合同種的成分のうち1つはそれが従属し, それが結びついている文の成分とは絶対的に両立し得ないという (“on izvestit i pis’mom, i telegramoj” <彼は手紙でも電報でも知らせる>という文での逆の関係を参照せよ). “on to smeetsja, to plachet” <彼はある時は笑い, ある時は泣く>という文では2つの動作(笑う, 泣く)のうち現実には2つとも実現することが表されている; しかしこれらの動作のうちのあるものが他のものを排除するのは, 一定の条件のもとにおいてだけ, 例えば, この場合のように, 同時性の条件のもとにおいてだけである; この場合同種的成分はそれらがかかわる文の成分とは相対的に両立し得ないという.

朝鮮語で分離助詞に入るのは나(母音の後) / 이나(子音の後), 든지(母音の後) / 이든지(子音の後)である; 나 / 이나는名詞の後ろに接合される; 든지 / 이든지는名詞の後ろにも動詞と形容詞の終止形(語尾 -다)の後ろにも用いられる; もしも든지が動詞あるいは形容詞の第1語幹に接合するならば, それはすでに分離助詞ではなく, 分離助詞の語尾である.

꽃과 같은 눈이나 거울과 같은 얼음이나 주전자에게 끓어오르는 김이나 다 우리가 모양을 변하여 된 것이다.

배든지 감이든지 무엇이든지 좋소.

그것은 결코 다른 나라를 빼앗겠다든지 약한 나라를 치기 위하여 만든 것이 아닙니다.

したがって, 分離助詞がある場合にはいくつかの可能性からの選択がある;

しかし形成された状況の結果選択がある対象に限られるところでは分離助詞は、例えば、次の文におけるように特別なニュアンスを獲得する：

배나 먹어라. 梨でも食べろ. (選択のために他のなにかが存在しないので).

c) 接合助詞 名詞の後ろの接合助詞は、今まで他の対象に帰せしめられた動作、状態あるいは性質が名詞及び接合助詞によって表される対象あるいは人物にも今では補足的に帰せしめられることを示す。動詞あるいは形容詞の後ろの接合助詞は、今まである動作あるいはある性質が帰せしめられた対象あるいは人物が動詞あるいは形容詞によって表される他の動作あるいは性質を今では補足的に持つことを示す。

朝鮮語で接合助詞に属するのは도, 조차, 까지である。

助詞도は名詞の主格, 対格及び属格以外の任意の格に接合する；格はこの助詞に先行する；

나도 가겠다.

助詞도를動詞あるいは形容詞に接合するためには、動詞あるいは形容詞に名詞形(体言形語尾 -기)を付与する必要がある；「体言形+助詞도」は動詞하다によって完結する。漢字語動詞の場合도는動詞の名詞部分と補助動詞하다の間に挿入される。

기제는 쇠를 나무보다도 더 험하게 자르기도 하고 깎기도 합니다.

もしも第2の、補足的に主語に帰せしめられる動作が、以前に同じ主語に帰せしめられる動作と時間において客観的に両立し得ないのであるならば、接合助詞도는分離的意味を獲得する。

우리들은 몸을 너무 쓰면 피곤하여집니다。그럴 때에는 우리는 쉬기도 하고 잠을 자기도 합니다。그러면 기운이 다시 돌아옵니다。

助詞조차はその接合的意味からして도와似ており、도와は接合的意味のニュアンスによって異なる；조차はなんらかの点でこの動作にとって唯一であるような対象あるいは人物を接合する(彼でさえこれを知らなかった、小さな子でさえこれを知っている)。

너조차 내 말을 안 들으면 어떻게 하니?

어머니는 어디로 갔는지 이곳에 없었습니다。다른 곳으로 무사히 피난을 하였는지 그렇지 않으면 원주에게 죽음을 당하였는지 알 길조차 없었습니다。

同じ意味を助詞까지も持っている。

당신까지 이것을 모릅니까?

d) 強化=取り立て助詞 この助詞の基本的意味はそれが接合する文の成分の取り立て、強調である。

朝鮮語で強化=取り立て助詞あるいは強調助詞に属するのは야말로, 도, 는 (母音の後ろ) / 은 (子音の後ろ) である。

助詞야말로は論理的アクセントが置かれる名詞を取り立てる。

그것이야말로.

助詞도 (これの同音異義語である接合助詞도と混同してはならない) はそれが接合する単語を強調する。

이것 저것보다도 좋다. 잘 잔다, 잘도 잔다

取り立て助詞のうちもっともよく用いられるのは는 / 은である。この助詞はいかなる品詞の後ろにも接合し得る；この助詞はどの品詞の後ろにも接合し得る；名詞はこの助詞が格語尾の後ろに接続する（語幹格は語髄に）；属格，対格，具格語尾の後ろにはこの助詞は不可能である。는 / 은を動詞あるいは形容詞に接合するためには，動詞あるいは形容詞は名詞形を取らなければならない；固有語動詞の場合これは体言形（語尾 -기）であり，漢字語動詞の場合これは語根（생각, 생각하다から）である。「体言形+는 / 은」あるいは「動詞語根+는 / 은」という結合は補助動詞하다によって完結する：잡기는 하다, 생각은 하다. 最後に，助詞는 / 은は副詞にも接合し得る。

この助詞の機能は多様だが，この多様性の中で，文の構造と緊密に結びつき，それ故われわれによって「統辞論」で観察される (§103 参照) 1つの木歩9ん的に見が取り出される。

e) 否定助詞⁽¹⁹²⁾ 否定副詞には아니と못が入る。それらは動詞あるいは形容詞の前に接合する (§45 参照)。動詞あるいは形容詞の後ろではそれらは多分独立した単語を作らず，複合語아니다及び못하다（これらも否定の形成に用いられる）に入り込む (§45 参照)。

f) 近似助詞 ここに入るのは助詞나 (母音の後ろ) / 이나 (子音の後ろ)，ㅏである。第1のものは数詞あるいは数詞の入っている名詞 に接合し，第2のものは名詞の後ろに接合する。

서울에는 언제 왔습니까? 벌써 칠년이나 되었소.

래일쯤 오리다.

두시간쯤 되었소.

구백이상이나 장성하였다.

g) 比較助詞 これは2つの範疇：様態比較助詞と程度比較助詞に分かれる。様態比較助詞に入るのは처럼, 같이⁽¹⁹³⁾, 만큼, 만⁽¹⁹⁴⁾等々である。

우리들은 개구리처럼 물속에 뛰어들어갔습니다.

고래처럼 큰 동물은 없다.
 이배만치 크지 못하오.
 검은 옷은 흰 옷만 못하오.
 저강은 넓이가 바다 만하오.

ここで見るように、助詞만⁽¹⁹⁴⁾の後ろには必ず補助動詞하다가続く（否定の場合 못하다）。

比較=対照助詞のうちで特別な位置を占めるのは커녕である。これは名詞に接合する。この助詞は、2つの同種的な対象がある場合、これらの対象と結びついた動作がそれらの対象のひとつにも、より程度の小さい対象にさえ及ばないか、あるいは2つの対比される対象のうちのひとつ、その際程度の大きい対象にだけ及ぶことを示す。

술커녕 맥주로 먹지 아니하오.
 오년커녕 십년이나 지났다오.

この助詞は対立的な意味をも持ち、動作がこの対象に関して期待されたこととに直接対立することを示す。

감사하기는 커녕⁽¹⁹⁵⁾ 도로혀 비웃는다。

9. 接続詞

朝鮮語の接続詞は2つの基本的タイプ：単語を連結する接続詞と文を連結する接続詞に分かれる。

単語を連結する接続詞のグループは次の特徴を持つ：a) 形態論的構成ではそれらは単純語で、構成部分に分割できない、多くの場合1音節語である；b) 意味ではそれらは並立的である；従属的接続詞は朝鮮語にはない；c) 最後に、統辞論的機能ではそれらは名詞付加的である；それらは名詞、代名詞（名詞型）、数詞だけを連結する；稀な場合に接続詞は動詞と形容詞を連結し得る；この場合動詞と活用形容詞は体言形、すなわち名詞形を取る。単語を連結する接続詞の例として과（末尾子音を持つ名詞の後ろ）/ 와（末尾母音を持つ名詞の後ろ）⁽¹⁹⁶⁾、및, 혹은 [或—] 等々。

従属的接続詞及び動詞と活用形容詞を連結する接続詞がないことは理由、目的、条件、譲歩等々の接続形の豊かに発達した体系によって埋め合わされている。

文を連結する接続詞に関しては、文の間に分離的中断、言い換えるなら文がピリオドで分かれる時にのみ可能である。文を構成する部分の間に分離的中断のない複合文は接続詞によっては連結されない。ロシア語の接続詞の機能をこの場合持つのは接続形、体言形の相応の格の形、補助名詞、後置詞、助詞であ

る。

分離的中断の後ろの並立的接続詞と従属的接続詞は多くの場合代形容詞그렇다から作られ, これはなんらかの接続形を取るか (그러나, 그러니까等々), 連体形と後続する補助名詞を取るか (그런고로 [一故一], 그런데等々), 体言形の格の形を取るか (그림으로等々) して接続詞として機能する。

統 辞 論

統辞論は次のことを研究する文法の部分である: a) 文の中の諸単語間の関係, これらの関係の基本的タイプ及びこれらの関係をなす諸要素としての文の成分; b) 自由な単語結合と名付けられるさまざまなタイプの単語結合 (語彙論の対象としての不自由な単語結合とは異なる); c) 文の総体とさまざまなタイプの文; d) 文が結合してそれより高い部類の統一体, すなわち複合文をなすこと。文の成分, 単語結合, 文, 文の結合の形式も, これらの形式によって表される内容も研究される。統辞論が研究するのは, 諸単語間の各々の具体的な関係 (例えば, 特殊に “znaju korejskij jazyk” <わたくしは朝鮮語を知っている> という文に現れた関係, そして特殊に “chitaju interesnuju knigu” <わたくしは面白い本を読む> という文に現れた関係) ではなく, 文 (複数) の間の各々の具体的な関係 (例えば, 特殊に “derevnja, gde skuchal Onegin, byla prelestnyj ugolok” <オネーギンが退屈していた村は魅力的なところである> という文の結合に現れた関係, そして特殊に “gorod, gde ja provel detstvo, byl raspolozhen na beregu Volgi” <わたくしが幼年時代を過ごした都市はヴォルガ河の岸にある> という文の結合に現れた関係) ではない [____と____ (下線は菅野のもの) は異なる文をなす一菅野注]。統辞論で研究されるのは, これらのすべての多様な具体的な関係の背後に見られる一般的なものである。この一般的なものは主語, 付加文, 理由の文, 説明文等々のような統辞論の術語に固定される。

I. 単 文

§95. 文の成分 単語は言語の文法の管轄に入り, 単語結合と文を作る時, 互いに一定の関係に入る。そのような関係は言語には無限にたくさんある; 各々の関係はそれ自体の具体的な特殊性を持っている。しかしこれらすべては限られた数のもっとも一般化された関係に帰せしめる。例えば, “solnechnyj den” <晴天の日>, “smelyj shag” <勇敢な一歩>, “vernyj drug” <忠実な友人> という単語結合では “solnechnyj” <晴天の>, “smelyj” <勇敢な>, “vernyj” <忠実な> という単語の間関係, 及びこれらと “den” <日>, “shag” <一歩> ,

“drug”＜友人＞という単語との関係との間には一見何も共通点はない；これらはすべて異なる関係である。しかし共通性は実際あるのであって、この共通性は「特徴とそれの持ち主との関係」という公式あるいは「規定的関係」という文法的術語に機能している。関係は常に最低限2つの要素からなる；そうでなければ関係はあり得ないだろう。文法における関係の項 (chleny; 英 members) は文の成分と呼ばれる。朝鮮語の文では次の文の成分が取り出される：主語，術語，規定語，付加語，補語，状況語。主語と述語は文の主成分である。他の文の成分は二次的成分と呼ばれる。

§96. 文の成分の間関係 文の成分の間に関係，つながりがあれば，その関係は表現されなければならない。もしも関係が表されなければ，関係自体も存在しない；単語は文の成分をなさず，字母順によらない語彙の羅列である (“na zare ty ee ne budi”＜明け方におまえは彼女を起こすな＞と“na zarja ty ona ne budit”＜に，明け方，おまえ，彼女，英 not，起こす＞参照)。朝鮮語では文の成分の間関係は次のものによって表される；語尾，補助的な単語，小品詞（接続詞，後置詞，本来の助詞）及び他の文の成分との関係によるある文の成分の位置（あるいは普通は不正確にいうところの語順；実際はそれは単語の順序ではなくて，文の成分の順序である）。多くの場合小品詞と補助的な単語は関係を表わし得ない；例えば，術語と主語との関係は小品詞（接続詞，後置詞）によっても補助的な単語によっても表わされない。同じように語尾も存在し得ない。；その明瞭な例は状況語としてのいわゆる非派生副詞である；表現の弱い場合は話し言葉において主語，補語で語尾がないことである。「語順」，すなわち他の文の成分との関係によるある文の成分の位置はどの文にも常に存在する。これは文の成分の間関係の一般義務的，普遍的な表現方法である。それ故まず始めにそれらを知る必要がある。すべての他の表現方法は各々の文の成分を研究するに従って知られるであろう。

上に列挙した諸関係の表現方法はなんらかの単語がいかなる文の成分：すなわち主語，術語，補語あるいは何か他のものになるかを示す。その際しばしばそれらは何らかの文の成分の表現に共同で参加する。例えば，들이 낫다という文で들이が主語であるということ判断するためには主格 -이だけでは不十分である；主格がある種の繫辞の前で繫辞付加の成分をもなすからである。主格（語尾），位置（術語の前）のような特徴の結合は들이が主語であることのゆるぎない保障となるのである。

§97. 語順⁽¹⁹⁷⁾ 文の主成分。主語は常に述語に先行する。

나는 학생입니다。

文の二次的成分. 一般的な規則: 小野ぼのの二次的成分はそれが従属するものに先行する. このことは規定語は規定されるものに先行することを意味する; 規定語は規定されるものに直接先行する: 서늘한 바람 (しかし *paramsonyrhan* ではない), 높은 산 (しかし *san nophyn* ではない). このことはさらに名詞付加の補語が補充される名詞に先行することを意味する. 規定語は補充されるものにも先行する: 조선 인민과의 단결. このことは最後に補語と状況語がそれらを支配する文の成分に先行することを意味する; 補語と状況語はこの成分にも直接先行するのである.

나는 유리창을 닦소.

ここでは補語がそれが従属する述語に直接先行している.

어서 일어나거라!

ここでは状況語がそれが従属する述語に直接先行している.

これがある文の成分が他の成分を指揮する基本的な規則である. これらの規則からどれ一つとして文の成分は述語の後ろにはあり得ないことになる. 述語はしたがって文を完結するのである. 述語の特徴についての知識が句読法の無いテキストを読むためには朝鮮語にとっても重要である所以である.

上に挙げた規則は朝鮮語の語順がロシア語よりも厳密であることを語っている. これは拘束された語順である. しかしこのことは語順が常にそういうものだというを意味しない. ここで見られた語順は直接的と名付けられる. しかし直接的語順と並んでなおも「非直接的語順」がある. これは補語と状況語を主語の前の位置に持ってくることである. どういう場合にこれが生ずるかはわれわれは以下に見るであろうし, 二構成分あるいは一構成分の問題を検討するであろう (§103 参照).

§98. 文の成分と品詞 なんらかの文の成分として機能するのは単に単語ではなく, なんらかの品詞の代表としての単語である. われわれが, 例えば, “gremit grom” <雷が鳴る> という文で主語としてあらわれるのが “grom” <雷> という単語ではなくて “grom” <雷> という名詞であると普通言う所以である.

文の成分を研究する際にはいったいどんな品詞がなんらかの文の成分としてあらわれるかに特別な注意を向けなければならない. このことと通常結びついているのは文の成分の形式でもある. 例えば, 朝鮮語では動詞も主語になり得る. しかし, この場合動詞は体言形を取るが, 主語としての名詞は体言形を取らないし, このことと関連して体言形なるものはない. したがって文の成分と品詞の間には一定の関係がある. この関係は同一性ではない. もしも文の成分と品詞の間に同一性があるならば, 名詞は主語でしかなく, 動詞は述語でしかないだろう; 形容詞は述語になり得ず, 規定語でしかあり得ないだろう. その

場合二重の術語（主語と名詞，述語と動詞，規定語と形容詞）はあらゆる意味を失い，余計な術語上の浪費となるであろう．それにもかかわらず現実がわれわれに教えることは名詞は必ずしも主語ではなく，補語にも規定語にもなり，動詞は述語だけでなく主語にも規定語にもなる等々ということである．例えば，책을 본다（책は補語），이것이 책이다（책は述語の一部），이 책은 비싸오（책は主語）等々．したがって品詞と文の成分との関係は同一性とはなんの共通点も持っていないのである．しかしこのことは完全な矛盾でもないし，相互関係の完全な欠如ではない．相互関係，しかも一定のそれが存在することは日常の言語感覚にとってさえ明らかである．文の中の形容詞が何になり得るかという間に対しては答えはさまざまであり得るが，第1の答えは常に規定語だという同じものである．われわれが一連の名詞を挙げてくれるよう頼んで，“*stol* <机>，*ruka* <手>，*gorod* <都市>” [いずれも名格] の代わりに “*stolu* <机に> [与格]，*rukoi* <手で> [具格]，*gorodom* <都市によって> [具格]” という答えを聞くことほどに，あらゆる他の答えは思いがけないものであろう．品詞と文の成分との間には同一性はないが，一定の対応はあるのである．この対応は，各々の品詞に特有なのが何よりもまず基本的な一次的統辞論的機能であり，これに関して他のすべての機能は二次的であることに現れる．この際一次性と二次性は概念においてのみ存在する主観的なものではない．一次性的あるいは二次性は単語自体の形に，すなわち客観的に現れるのである．この客観的基準は次のように定式化され得る：品詞の一次的，基本的統辞論的機能とは単語の基本形 *isxodnaja forma* [多く辞書の見出し語形] によって表される機能であろうし，派生的機能とは単語の派生形によって表される機能である．例えば，朝鮮語で막다は막다，막은，막아，막음等々の形を持つが，これらの形のうち日常の意識にとってさえ基本的な形は막다だけであり，すべての他の形は動詞막다の連体形，接続形，体言形のような派生形として知覚されている．막다が述語としてのみ機能し得るのであれば，述語は文の中で動詞の基本的な機能であり，막은，막아，막음（二次的な形）がそれぞれ規定語，状況語，主語，補語として機能するのであれば，規定語，状況語，補語，主語の機能は動詞にとって二次的機能であると結論付けられる．したがって文の成分と品詞の間には一定の相互関係，対応が確立しているが，それは同一性には転換していない．なんらかの文の成分を記述するに際し以下にわれわれは何よりもまず基本的機能が与えられた文の成分であるような品詞を観察するであろう．この後でのみわれわれはこの文の成分である可能性が二次的であるような品詞に映るであろう．

[注] 単語の基本形 *isxodnaja forma* はいつも辞書形なのではない．例えば，形容詞の基本形は形態素ㄴ (ㄴ은, ㄴ은等々) が特徴である連体形である．それにもかかわらず辞書では形容詞は基本形と一致しない語尾 -다を持つ

た形が普通与えられている⁽¹⁹⁸⁾。

主 語

主語は名詞, 数詞, 動詞, 曲用形容詞, 代名詞の統辞論的機能である。しかしここに挙げた品詞の各々にとって主語となる可能性は一様でない。名詞(そして代名詞)の主語となる可能性は名詞の一次的統辞論的機能である(前項参照)。他のすべての品詞にとって主語となる可能性はそれらの二次的統辞論的機能である。このことは主語は何よりもまず名詞(及び代名詞)であることを意味し, このことは統計的にも確認される。名詞から主語の分析を始めなければならない。

§99. 名詞=主語 テキストの分析から始めよう。現代朝鮮語の任意の典型的なテキストの統計的な研究は大略次のような結果(書き言葉で効力を持つ)を与える:

- 1) 多くの場合主語は語幹格形を持ち, これは助詞 -는 / -은に伴われる;
- 2) ずっと稀に主語は主格(語尾 -가 / -이)を持つ;
- 3) なおも稀に主語は次のようなあまり典型的でない形を持つ: a) 語幹格形; 助詞도, 까지等に伴われる; b) 与位格形; しばしば助詞 -는に伴われる: -에서(-는); c) 属格形 -의。

時折特に話し言葉で語幹格を従える助詞 -는 / -은は存在しない。

名詞=主語の上述の典型的な表現方法のあいだの違いは何にあるか? 最初に説明の観点からもっとも簡単な場合を取り出そう。

§100. 与位格形の主語(しばしば助詞 -는を伴う): -에서(-는)。与位格は, 名詞が集合的概念で, 人間集団を表わす場合に, 主語を表わすために用いられる。しかしこのことから, 名詞が集合的概念で, 人間集団を表わす場合に, 主語が必ず与位格によって作られるということにはならない。そのような名詞が上述の格によって作られるのは随意的である。

したがって主語の与位格による表示は容易に説明し得る主語形成の最初の場合である。

북조선 인민위원회에서는 그 동안 참 많은 일을 하여 주었다。

§101. 属格形の主語 属格は, 名詞が付加的規定文の主語である場合に主語を表わすために用いられる。しかしこのことから, 名詞が付加的規定文の主語である場合に, 主語が必ず属格によって作られるということにはならない。その

ような名詞が属格によって作られるのは随意的であり, 主格によって作られるよりもはるかに少ない⁽¹⁹⁹⁾ (以下参照). したがって主語の属格による表示は容易に説明し得る主語形成の第2の場合である.

「注」付加的規定文としてこの場合理解されるものは, 自立的名詞に対する規定語でもあり, いくつかの補助的単語に対する規定語 (양 [様], 대로 等々) でもある; したがって属格に関して付加的規定文の概念は現実の規定文と形式的規定文の場合を含んでいる.

순옥이도 꺾바위의 일 잘 하는 것을 보고 부지중 칭찬하는 말을 하였다.

§102. 主格形の主語 主格は, 名詞が付加的規定文の主語である場合に主語を表わすために用いられる. 上に述べたように, 付加的規定文の主語は属格によっても作られるから, このことから, 主格と属格はこれらの条件における主語の平衡的な表現方法ということになる. したがって主語の主格による表示は容易に説明し得る主語形成の第3の場合である. しかし上に述べられた規則は主語における主語の基本的な機能を説明していない. この基本的な機能については以下に述べられるであろう.

「注」この場合でも現実の規定文と形式的規定文が問題となる (属格の項の注参照).

남은 학동들은 선생님이 가르치시는 대로 구멍에 물을 붓고 묘목을 심습니다.

§103. 語幹形の主語 語幹格は書き言葉において, 名詞が까지, 도等々のようなくつかの助詞に伴われる場合に主語を表わすために用いられる. 例: 나도 가겠다. したがって主語のいくつかの前の語幹格による表示は容易に説明し得る主語形成の第4の場合である. しかしこの規則は助詞 -는/ -은の前の語幹格の主要な機能を説明するものではない. この主要な機能については以下に言及するであろう.

「注」主語が助詞に伴われ得ない語幹格名詞であるという一連の構造がある. これは多分主語と述語のみからなる規定文であろう. これらの文をもっと正確に規定することは可能ではない.

거리에 전차 지나가는 소리가 들려옵니다.

우리 나라에는 나무 없는 산이 많습니다.

かくしてわれわれは主語形成の4つの場合を見てきた. 残ったのは次のものである.

a) 非規定文の中の主語における主格の機能,

b) 助詞 *-는/ -은* を持つ語幹格の機能.

これらの2つの機能は相対的なものであり、主語形成の統計的にはもっとも多い方法であり、説明にもっとも難しいものである。

主語形成のこの2つの方法の間の違いを多かれ少なかれ満足がいくように明きらかにするためには、文及びその意味上の分割という問題に簡単に言及する必要がある。

知られているように、どの文も思考の表現である。文に表わされた文の思考の内容の観点からはすべての文は一構成文と二構成文という2つのタイプに分かれ得る。二構成文は2つの構成に分かれる。1つの構成では、与えられた具体的な条件において述べられるのはなんらかの理由により知られているものである。それが知られていることがあり得るのは、例えば、それについてこれ以前に言及されたためである。例えば、*“starik lovil nevodom rybu”* <老人は網で魚を捕まえた>という文でこの構成に属するのが単語 *“starik”* <老人> であるのは、それについてはこれに先行する文 *“zhil starik so svoej staruxoj u samogo sinego morja”* <老人は老婆と一番青い海のもとで住んでいた> で言及されているからである。それ故にこそ *“starik lovil nevodom rybu”* <老人は網で魚を捕まえた> という文では単語 *“starik”* <老人> の前に単語 *“étot”* <この> (すなわち *“tot, o kotorom tol’ko chto shla rech”* <たった今言及されたこれ>, したがってすでに知られている老人) を入れることができるだろう。もう1つの構成では、与えられた具体的な条件において述べられるのは、なんらかの理由により発話の瞬間以前には聞き手あるいは読み手に知られておらず、当の発話のおかげでのみ聞き手あるいは読み手に知られるようになるものである。例えば、*“starik lovil nevodom rybu, staruxa prjala svoju prjazhu”* <老人は網で魚を捕まえ、老婆は糸を紡いだ> という文ではこの構成に属するのは *“lovil nevodom rybu”* <網で魚を捕まえた> と *“prjala svoju prjazhu”* <糸を紡いだ> である。もちろん、第2の構成において述べられた新しいものが述べられるのは常に、第1の構成において述べられ、それ(この例では老人と老婆)に属するものに関してである。上に記述した2つの構成が現れる文は二構成文と呼ばれる。与えられた具体的な条件において知られるものが表わされる構成を第1の構成(あるいは具体化される構成)と呼び、与えられた具体的な条件において新しい、それ以前は知られていない新しいものが表わされる構成を第2の構成(あるいは具体化する構成)と呼ぼう。2つの構成の境界は助詞 *-는 / -은* である。この助詞の前にあるのが第1の構成である。この助詞の後ろにあるのが第2の構成である。

述べられた思考の観点から2つの構成に文を分けることは文を主語及びそのグループ(主語群)と述語及びそのグループ(述語群)に分けることとは必ず

しも一致しない。2つの構成への文の分割は文の主語群と述語群への分割と一致することもしないこともあるのである。

“**Zhil starik so svoej staruxoj u samogo sinego morja...Starik lovil nevodom rybu, staruxa prjala svoju prjazhu**” <老人は老婆と一番青い海のもとで住んでいた... 老人は網で魚を捕まえ、老婆は糸を紡いだ>。

上の抜粋された2つの文で第1の構成(“**izbestnoe**”「既知」)は主語“**starik**” <老人>，“**staruxa**” <老婆>と一致しており、これは主語でもあり、先行するコンテキストから既知のものでもある。

“**Vorotilsja starik ko staruxe,** <老人は老婆のところに戻り,
U staruxi (pojavilos’) novoe koryto”. 老婆のところには新しい桶が(生じた)>。

上の抜粋された第2の文で第1の構成は主語とは一致せず、主語群は単語“**novoe koryto**” <新しい桶>であるが、それは先行するコンテキストから既知でなかった新しいものをまさに表わしている；第1の構成(既知のものを表わす)には単語“**u staruxi**” <老婆のところには>は代名詞“**u nee**” <彼女のところでは>、すなわち“**u togo, o kom rech’ tol’ko chto shla**” <たった今言及した人のところでは>と置き換え得るであろう。

もしも文の2つの構成への分割が文の主語(主語群)と述語(述語群)への分割と一致するなら、主語(あるいは主語群全体、どちらも同じことだが、それは主語群は主語をもって完遂するからである)は助詞 **-는 / -은**が(第1の構成の末尾のしるしとして)後ろに続く語幹格によって作られる：

1. _____ **主** / 2. _____ **述**

ここで「主」とは主語(あるいは主語群)、「述」とは述語(あるいは述語群)、記号 / は第1の構成と第2の構成の境界を示す。

우리 조국은 아름다운 나라입니다。

우리 한글은 지금으로부터 오백년전 세종 때에 만들었습니다。

もしも文の2つの構成への分割が文の主語(主語群)と述語(述語群)への分割と一致しないなら、主語と述語とは一緒に第2の構成(上掲の文では：“**u staruxi novoe koryto**” <老婆のところには新しい桶がある>)にある。

1. _____ / 2. _____ **述** **主**

これらの条件においては主語は語幹格、ましてや助詞 **-는 / -은**によって作られ得ないのは、この助詞が主語の中に存する第1の構成の境界を示すものであるからである。そして実際そのような主語は主格で表わされるのである。しかしこの場合既知である第1の構成に入るのは何なのか？この場合の第1の構成に入るのは通常具体的な条件によって既知であるさまざまな状況語と補語である。ついであるが、このことはこれらの構造においては状況語と補語が主語の後ろに付くという普通の語順は破られることを意味する。文の成分のこの異な

る順序は非直接的語順と呼ばれる。助詞 -는 / -은はこれらの条件においては状況語と補語の後ろに付くのである。もしもこの状況語が副詞（普通は時間の状況語あるいは場所の状況語）によって表されるならば、助詞 -는 / -은は副詞に直接接続する：

오늘은 아침부터 눈은 내리기 시작하였습니다。

もしもこの状況語が名詞によって表されるならば、助詞 -는 / -은はこの状況語が持つ格語尾の後ろに付く。同じ規則は補語にも適用される。

저녁에는 라디오를 듣습니다。

우리 집에는 전기인두와 전기시계와 전기풍로도 있습니다。

第1の構成が特別に強調されるならば（これは特別なイントネーションにも伴われる）、状況語あるいは補語の格は落とされる。助詞 -는 / -은だけが残る。

그런 문제는 한말로 대답하다가 곤란합니다。

이 결과는 누구나 다 압니다。

[注] 主語も特別に強調され得る。しかしこの場合助詞 -는 / -은は助詞 -야말로に取り換えられる。

이 말마디야말로 그에게 다른 어떠한 말보다도 아쉬운 말이였다。

述語（あるいは述語群）は第1の構成に入り得るか？ 多分否である。もしも述語であり得るだろうものの内容が与えられた具体的な条件において既知ならば、言語においてはこの内容は主語（この場合主語に現れるのは動詞である）に現れる（以下参照）。このことによって動詞=主語を持つ文の存在が基本的には説明されるのである。

一構成文は、与えられた具体的な条件において、なんらかの理由によって未知である1つの構成を持っている。このような文においては主語は常に主格形を持っている。そのような文に何よりもまず属するのは、主語が “kto” <誰>，“chto” <何>等々のタイプの疑問詞であるような文である。このようなタイプには先行するタイプの文に対する答えであるような文が属する。

누가 왔습니까?

학생들이 왔습니다。

§104. 代名詞=主語 主語の位置にあるすべての人称代名詞は名詞と同じ規則に従う。これらの規則に従うものは朝鮮語で指示代名詞（すなわち “éto” <これ>，“zdes” <ここ>等々；§87 参照）を基礎として作られた対象代名詞でもある。疑問=不定代名詞のうちこの規則に従うのは非派生代名詞（“kto”，“chto” <何>等々；§86 参照）だけである。“kto-to” <誰か>，“kto-nibud” <誰でも>，“chto-to” <何か>，“chto-nibud” <何でも>等々のタイプの派生代名詞、言い換えるならば -든지, -니지, -나가しるしである代名詞は主語として形をと

らない.

누구든지 번역을 잘 하는 이는 없지요.

§105. 数詞=主語 主語の位置にある数詞は名詞と同じ規則に従う. この規則に従うのは量数詞, 対象数詞の双方である.

마침 한개가 모자라는 판인데.

数えられる名詞 (対象数詞と関連付けられた) は先行するコンテキストから復元される.

§106. 動詞=主語 動詞が主語として現れるのは, 動作 (しかし対象ではなく) が与えられた具体的な条件において思考の既知の対象である時である (上述の名詞=主語を参照). 動詞はまた, 対象ではなく動作の特徴 (能動的特徴と受動的特徴) を解明する必要がある場合に現れる.

主語のしるしはこの場合も主格, 助詞 -는 / -은を持った語幹格 (稀に助詞なし) が現れる. 動詞自体は体言形 (言語の文体に応じて第1体言形あるいは第2体言形) あるいは連体形と補助名詞짓との結合を取る. 動詞=主語の公式:

하기는	하기가
함은	함이
하는것은	하는것이

もちろん体言形も連体形もさまざまなテンスを持ち得る: 하였기는⁽²⁰⁰⁾ (過去), 하였음은 (過去), 한것은 (過去) 等々.

動詞は自身と関連ある状況語と補語を持ち得るので, これらの文の二次的成分に伴われる動詞=主語は単語結合という総体に転化する. しかしこのことは主語の形成にいかなる影響も及ぼさない.

그런 문제는 대답하기가 곤란합니다. (主語대답하기가) .

제비는 많은 새들가운데서 사람들에게 가장 리로운 새란다. 채소와 곡식을 굶어 먹는 해로운 벌레들을 잡아 주는 것은 제비다.

述語

述語は動詞と曲用形容詞の統辞論的機能である. 名詞, 数詞, 非活用形容詞及びいくつかの副詞はそれ自体術語を作らない. それらは繫辞とともにのみ述語の形成に参加し, 述語において繫辞付加的成分として現れる. したがって単純述語と合成述語の2つの基本的タイプが取り出される. 単純述語と呼ばれるものは動詞あるいは活用形容詞からなる述語である (§73). 例えば, 비가 온다という文における온다.

合成述語と呼ばれるものは繫辞付加成分としての名詞（あるいは代名詞）、数詞、非活用形容詞及びいくつかの副詞と繫辞である。例えば, 인간은 사회적 동물이다という文における 동물이다.

このほか特別な条件において活用形容詞が合成述語に入り得る（以下参照）.

§107. 単純述語 これは述語の位置における動詞あるいは活用形容詞である。このような述語の基本的な特徴は終止形の範疇があること、つまり人間関係の範疇と法の範疇（中立=直説法, 目撃法, 伝聞法, 断言法, 蓋然法あるいは命令=勧誘法）があることである。感嘆文ではこれは感嘆文の術語の特別な形式があることである。この規則の例外は特別に以下に見るであろう。

§108. 合成述語 これは名詞あるいは非活用形容詞あるいは数詞あるいはいくつかの副詞, 特別な条件においては繫辞付加成分を作る活用形容詞と動詞=繫辞である。繫辞は抽象化した *otvlechennye* 繫辞と半物質的 *poluveshchestvennye* 繫辞に分かれる。抽象化した繫辞には肯定繫辞이다と否定繫辞아니다が属する。抽象化した繫辞は動詞の体系の中で特別な位置を占める。この特別な位置はこれらの繫辞に備わったいくつかの独特な位置的範疇と非位置的範疇によって規定される。これらの特殊性のうちもっとも重要なものを列挙しよう。

位置的範疇：

a) 終止形（終結述語性の範疇）のうち断言法と命令=勧誘法がない；中立=直説法の語尾は動詞に備わったこの法の語尾とは完全に一致しない；

b) 繫辞の連体形は1つの意味のみを持ち, 名詞に対する関係の就職的性格を示し, テンスを表わさない；語尾は1つ—*ㄷ*である；特別な条件において, まさに不確実性というニュアンスがある時, いくつかの補助名詞と助詞の前では ㄷ の代わりに語尾 ㄹ が用いられる；

c) 接続形の体系は完全である：先行, 同時性, 目的, 結果, 多回的=分離的, 意図, 動作様式の接続形がない；接合的接続形として고と며と並んで否定繫辞において 라 (아니라) 及び肯定繫辞において요 (이요) が用いられる。

非位置的範疇：

a) 他動詞性=自動詞性（転移性=非転移性）とヴォイスの範疇がない；

b) 絶対的テンスの身あり, 総体的テンスがない；現在テンスはゼロ形態素で表わされ, 接尾辞 -는 / -ㄷ はない。

c) 「動作様式」の文法範疇はない；

d) モダリティーの範疇は不完全である；例えば, 多分意図, 試み, 希望の範疇はまったくないだろう。

繫辞이다が末尾母音を持つ繫辞付加成分に接合する時, そして繫辞がその際

テンス接尾辞によって複雑になる時, 音声的序列のいくつかの変化が生じ, これは以下の表に示される:

現在テンス	노 (이) 다
過去テンス	노여쓰다
未来テンス	노 (이) 겠다

[注] この表で繫辞이다は繫辞付加成分とともに名詞노<鱧>が与えられている; ここで見るように, 現在テンスと未来テンスで -이が脱落する; 過去テンスでは繫辞の語根 -이はyに変わる.

繫辞付加成分は以下のもので表わされる:

- a) 語幹格; 肯定繫辞이다に付く.
사람은 만물의 으뜸이다.
저녀자는 누군가? 내 누이 일세.
- b) 主格; 否定繫辞아니다に付く.
이것은 작자의 죄가 아리다.

抽象化した繫辞이다と아니다のほかに半物質的繫辞がなおもある. これに属するのは自動繫辞(非転移繫辞) 되다と多動繫辞(転移繫辞) 여기다, 삼다, 하다, 만들다等々である.

繫辞되다における繫辞付加成分は名詞, 数詞, 代名詞である; それらは主格によって作られる; また具格も可能である.

우리들은 일학년이 되었습니다.
우리들은 일학년으로 되었습니다.

繫辞여기다と삼다における繫辞付加成分は名詞, 数詞, 代名詞, 活用形容詞である.

名詞, 代名詞, 数詞は具格で作られ, 活用形容詞は -게形を取る. 繫辞만들다, 하다(「させる」という意味)における繫辞付加成分は名詞, 数詞, 代名詞の具格のみであり得る.

수들이는 공부실로 위방을 독차지하였다.
이 일을 그다지 대수롭게 여기지 않는다.

繫辞하다(「名付ける」という意味)における繫辞付加成分は名詞のみであり得る. それは繫辞이다の変種の1つ이라によって作られる; 繫辞付加成分は繫辞=形態素고と結合する.

물속을 다니는 군함을 잠수함이라고 합니다.

§109. 派生合成述語 単純述語と合成述語は述語のもっとも簡単な形である. これらのもっとも簡単な形とともになおも述語の複合形がある. これがいわゆる派生合成述語である. それは単純述語からも合成述語からも作られる.

単純述語からの派生合成述語は：

a) 第1体言形（語尾 -ㅁ）及び繫辞（いくつかの書き言葉の文体では脱落し得る）

b) あるいは連体形及び繫辞によって作られた後続の補助名詞짓.

第1のタイプ（現在テンス）の公式：함이다；第2のタイプ（現在テンス）の公式：하는 것이다.

오늘 오전 열시부터 일을 시작하게 되었음이라.

우리 민족의 해방은 우연한 것이 아니라 쏘련군대의 영웅적 투쟁과 승고한 피의 희생에 의하여 이루어진것이다.

合成述語から作られた派生合成述語は以下のものである：

a) 合成述語から作られた，繫辞に伴われた第1体言形（語尾 -ㅁ）：말이다—合成述語，しかし말임이다—同じ意味を持つ派生合成述語；

b) あるいは合成述語から作られた連体形及び繫辞によって作られた後続の補助名詞짓；例：말이다—合成述語，しかし말인 것이다—同じ意味を持つ派生合成述語.

体言形を持つ派生合成述語は連体形を持つ派生合成述語のようにさまざまな文体の書き言葉，そしてこの書き言葉に向いている話し言葉の文体でも用いられる。したがって派生述語の非派生述語との第1の，基本的な違いはあれこれの異なる文体的いどりである。しかし派生合成述語の形が特別な意味を持つ場合がある。特別な意味のはっきりした例として派生合成述語を否定繫辞とともに用いることを挙げることができる。この術語の形は普通，否定が述語それ自体にではなく，なんらかの他の文の成分に及ぶところで用いられる。

그는 처음으로 바닷길을 떠나는 것이 아닙니다.

§110. 終結述語性の機能を持つ非終結述語性の範疇 述語の基本的特徴は，上に述べたように，終結述語性の範疇，つまり人間関係の範疇と法の範疇があることである。それが述語の典型的な形である。しかしこの一般的な規則に例外がある。これらの例外は終結述語性の機能で非終結述語性の形が用いられることにある。

接続形のうち終止形として用いられるのは先行の接続形（語尾 -ㅁ / -어）である。それが用いられるのは中立=直説法（叙述形も疑問形も）と命令=勧誘法の2つの法においてのみである。この場合それは非礼形（人間関係の観点から第V段階）に属する。しかしこの形に感嘆=述語助詞요を接合すると，それは鄭重形（人間関係の観点から第I段階）に転化する。

이리 와.

결혼을 했어요?

어떤 꽃을 조와하시요? (ここでは尊敬形조와하시다の接続形)

을에 나이 몇이서요? (ここでは尊敬繫辭이시다の接続形).

連体形は疑問=述語助詞가⁽²⁰⁷⁾で終わる疑問文で無条件に必要である.

動詞で:

現在テンス: 는가

未来テンス: ㄹ가 (同じ形は蓋然性, 不確実性を表わすのに用いられる)

過去テンス: 던가

[注] もしも -는가純粹に形式的に, すなわちテンス的意味なしに用いられるなら, その前にテンス接尾辭が可能である; 例: -았-는가過去あるいはパーフェクトの意味で.

形容詞で: ㄴ가

繫辭で: 인가, 일가

내가 보았던가?

어디로 가는가?

종달새는 무엇 먹고 살가?

나는 어떻게 할가?

그러나 그는 살았는가?

무산 꽃이 좋은가?

홍길동전의 작자는 누구일가?

성명은 무엇인가요?

同じことは派生合成述語で:

이것은 무엇을 의미하는 것입니까?

갈것인가?

글이란 어떤 것인가?

さらに, 主語がいろいろな種類の補助的な單語, 例えば: 걸, 만하다, 터이다, 듯하다, 모양等々に伴われる場合に連体形は無条件に必要である.

모레는 회의 있을 걸.

지금은 그들이 점심을 먹었을 걸.

아직 돌아오시지 않은 모양입니다.

完全に例外的な場合はいくつかのモーダルな單語結合の前で用いられる第1体言形(語尾 -ㄴ)を挙げることができる; 例: 틀림에 없다.

「오」와 「어」는 서로 구별됨에 틀림이 없다.

この体言形は派生合成述語における体言形とは區別しなければならない; 派生合成述語における体言形は繫辭に伴われる(繫辭がないのは随意的である); この場合の体言形は繫辭によっては伴われ得ない.

補語

補語は名詞, 数詞, 動詞, 活用形容詞, 代名詞, 代数詞の統辞論的機能である. しかし上述の品詞の各々にとって補語となる可能性は一様ではない. 名詞(及び代名詞)が主語と同じく補語にさえなる可能性は名詞の第一次的な統辞論的機能である. 他のすべての品詞にとっては補語になる可能性はそれらの第二次的な統辞論的機能である.

§111. 名詞=補語 補語は連用的(述語付加的; 動詞と活用形容詞に付く)と連体的(名詞付加的)とに分けられる. 前者は動詞あるいは活用形容詞に従属する: 독립을 [独立—] 쟁취하다 [争取—]. 後者は名詞に従属する: 독립을 [独立—] 위한 [為—] 전쟁 [戦争].

連用的(述語付加的)補語は次のように表わされる:

a) 対格によって. この補語は直接補語と呼ばれる; これは他動詞(転移動詞)にのみ付き得, 活用形容詞には付かない. 낮을 씻고 있다という文で낮을が直接補語ならば, 물속을 다닌다という文では対格は直接補語ではなく, これは対格状況語である. 対格が状況語的性格を持つのに3つの場合が取り出される. それは自動詞(非転移動詞)に付いて場所の対格(길을 걷다)であり, 時間的意味を持つ名詞に付いて時間の対格(두달을 그 섬에서 살았다)であり, 内的対象の対格(ロシア語の“dumat' dumu”<思いをめぐらす>, “gore gorevat”<悲嘆にくれる>のタイプ; 잠을 자다)である.

b) 後置詞を伴わない斜格(対格以外)によって. この方法で表わされる補語のうちいくつかのタイプが認められるが, 重要なものは以下の如くである:

1) 動作の受信者あるいは動作のみなもとの補語(「誰に」, 「誰から」):

형님에게 물어 보았습니다.

어머니에게 편지를 썼습니다.

2) 受身ヴォイスに付いて動作の現実の遂行者の補語:

그들은 어부에게 구조를 받았던 것이다.

3) 使役ヴォイスに付いて動作の直接の遂行者の補語:

누이에게 동생을 업힌다.

4) 共同参加する人物の補語:

그와 경쟁합니다.

5) 道具あるいは手段としての対照を表わす補語:

삽으로 구멍을 팝니다.

c) 後置詞を伴う斜格によって. 例:

보고에 관하여 의견을 교환하였다.

d) 語幹格によって; 助詞 -는 / -은, 도等々が後ろに付く. 話し言葉では語幹格は助詞を伴わないこともあり得る. 特に指摘しなければならないのは, 補語が主語に先行し, いわゆる二構成文の第1成分をなす (§103 参照) ところで補語として助詞 -는 / -은を持つ語幹格が用いられることである.

그것은 누구나 다 압니다.

連体的 (名詞付加的) 補語は次のように表わされる:

a) 後置詞を伴う斜格によって:

자유독립훈장의 제정에 관한 전쟁.

b) 属格と結合した斜格によって:

조선인민과의 단결세계주간.

c) 属格の後置詞を伴って斜格によって. これは後置詞있어서に付いてのみ可能である:

전쟁 목적 규정에 있어서의 차이

これが連体的 (名詞付加的) 補語の形成方法である.

連体的 (名詞付加的) 補語のもっと稀で, 特殊な場合になお触れる必要がある.

날 따뜻해지거든 할아버지와 두분이 꼭 한번 다녀가시라고 여쭙서요.

この場合補語が補われるものに接合するのが新しい対象ではなく, 補われる単語にすでに含まれているものの一つであること (単語「お二人」にお爺さんに対する指示がすでに含まれている) に注意を向けなければならない.

多分このタイプの連体的 (名詞付加的) 補語に属するのが, 与格 (2つ以上の名詞が同種成分と等価である場合に見られる) によってある名詞が他の名詞を支配することである: 넓은 이마에 길다란 눈썹에 둥글한 눈.

数詞=補語は名詞=補語と同じ規則に従う.

§112. 動詞=補語 補語の位置における動詞は第1体言形あるいは第2体言形のしかるべき格の形をとる: 함을, 하시기.

봉투를 떼기를 최축한다.

그는 말하기를 조와하오.

§113. 特殊な種類の補語 補語のうち特殊なグループを取り出す必要があるが, これは常に主として語幹格と助詞 -는 / -은, 稀には主格によって作られる, したがって主語と一致するという特徴がある. これらの補語はこのほかに常に主語に先行する. それらは主語に対する特別な関係のおかげで容易に識別される. この「関係」は3種類ある.

a) 補語は, 主語が部分を表わすところで全体を表わす. 部分としては普通体

の部分が見れる :

노루는 꼬리가 짧하다.

나는 머리가 아프다.

그는 나이가 젊다.

b) 補語は、主語が所有の対象を表わすところで所有の主体を表わす :

나는 돈이 없소.

두사람은 한참동안 말이 없었다.

c) 補語はなんらかの感情を経験する人物を表わす (主語はこの感情を呼び起こすものを表わす) :

나는 호랑이가 무섭다.

最後のタイプの文はそれに内容の点で似た他の文に転換し得、その際補語は主語に、主語は補語に転換する。しかしこれが可能なのは、普通この種の文によくある形容詞=述語が動詞に移行する (これは形容詞の第3語幹に補助動詞하다が接合することによって達せられる ; 例 : 무섭다 → 무서워하다) 場合だけである。

나는 호랑이를 무서워합니다.

特殊な種類の補語を持つ文を複合文 (複合文に入り込んだ述語文を持つ) と見なしてはならない。それらが単純文であるのは、それらが2つではなく1つだけの術語を持ち、したがって、主文と不可分に分けられ得ないためである。

状 況 語

状況語は副詞、動詞、名詞、数詞及び代副詞、代動詞、代名詞、代数詞の統辞論的機能である。しかしここに挙げた品詞の各々にとっては状況語になる可能性は一様ではない。副詞が状況語になる可能性は副詞の第一次的な統辞論的機能である。すべての他の品詞にとって状況語になる可能性はそれらの第二次的な統辞論的機能である。

§114. 副詞=状況語 これは形式的な点でもっとも単純な文の成分である。この成分が他の成分への従属性を表わすためにいかなる特殊な語尾を持たないからである。

꽤 편리하다

깨끗이 걷우다

기치를 높이 들다 ; 잘 공부하다

§115. 名詞=状況語 名詞=状況語は次のように表わされる :

a) 後置詞を伴わない斜格で : 나무에 말을 매다 ; 한줄로 버리지다 ; 두패로 [一牌一] 갈라지다, 농촌에서 [農村一] 살다, 세시에 [一時一] 돌아오다 ;

b) 後置詞を伴う斜格で : 조국의 [祖国一] 독립과 [獨立一] 자유를 [自由一] 위하여 [為一] 싸우다 ; 인민위원회사업에 [人民委員會事業一] 대하여 [對一] 결정을 [決定一] 채택하다 [採択一] ;

c) 後置詞の斜格で : 마을앞에는 강이 [江一] 흐르오 ; 물속을 다니다 ;

d) 運動の自動詞 (非転移動詞) 及び時間の意味を持つ名詞に付く対格 : 길을 걸다, 두달을 마을에서 살다 ;

e) 状況語的助詞を持つ名詞, 例 : 마다, 깃, 처럼, 대로, 만치⁽²⁰¹⁾ : 나비처럼, 산만큼 [山一, 힘껏, 말씀대로, 해마다.

§116. 形容詞詞=状況語 普通は状況語の位置における形容詞は副詞と理解される. 基本的にこの見解が本書で取られている. しかし -게形はロシア語では副詞に「訳されるにもかかわらず, 朝鮮語では形容詞のすべての性質を保っていることを考慮しなければならない. 語尾 -게はここでは品詞の変化 (形容詞から副詞へ) ではなく, この「品詞の統辞論的機能の変化を指している. もしもこの語尾が統辞論的機能をも品詞の変化をも示すならば, このことは品詞と文の成分の間には完全な同一性があることを意味するだろうが, 同一性は, 知られるように, 実際には存在しない.

밝은 달이 우리 아가 잠던 얼굴 곱게 곱게 비쳐 준다.

§117. 動詞=状況語は次のように表わされる :

a) 状況的意味を持つ接続形によって. 例 :

나는 형님과 같이 식물 채집을 하러갔습니다.

この文では接続形は目的の状況語を表わす.

일하면서 공부합니다.

この文では接続形は同時性の状況語を表わす.

b) 状況的意味を持つ補助的な単語と結合した連体形で ; 例 : 채(로), 대로等々.

입은 채로 자리에 누었다.

앞은 대로 고개를 그의 어깨 곁으로 굽혔다.

c) 体言の格の形で, 後置詞を伴うことを伴わないこともある. この場合に用いられる体言形の典型的な形 :

第1体言形

具格	함으로
具格 ; 後置詞に伴われる	함으로써

与格 ; 後置詞に伴われる 함에도 불구하고
 第2体言形

与格 하기에

具格 하기로

对格 ; 後置詞に伴われる 하기(를) 위하여

最後の場合格は普通落とされる。

状況語として現れる動詞は動詞に従属する文の成分によって広がり得るから、普通動詞的状況語は単語結合にまで拡大する。

고요한 밤은 공부하기에 좋은 밤입니다.

자유를 쟁취하기 위하여 필기하다.

거짓말을 아니하기로 결심하였습니다.

規定語

規定語は副詞, 動詞, 名詞, 代名詞, 数詞の統辞論的機能である。しかし上述の品詞の各々にとって規定語となる可能性は一様ではない。形容詞が状況語になる可能性は形容詞の第一次的な統辞論的機能である。すべての他の品詞にとって規定語になる可能性はそれらの第二次的な統辞論的機能である。

§118. 形容詞=規定語 規定語としての活用形容詞の形は連体形 (あるいは規定形 : 語尾 -ㄴ) : 깊은 바다, 높은 산 [山]. 語尾ㄴはㄴの代わりに, 形容詞が不確実な特徴を表わし, あるいは때のタイプのいくつかの補助名詞に対する規定語として現れるところに現れる : 깊었을 때.

非活用形容詞は通常規定される名詞に追加的な形成なしに接続する : 사회주의적 [社会主義的] 국가 [国家] (規定語には적 [的] のタイプの非活用形容詞), 불요불굴의 [不撓不屈] 의사 [意思] (規定語には의のタイプの非活用形容詞), 새해 (規定語には語尾変化のないタイプの非活用形容詞). しかし非常にしばしば, 特に現代の評論文では적 [的] のタイプの非活用形容詞が規定される単語に対するその関係を -인 (繫辞이다の連体形) によって表す: 사회주의적인 국가. 規定語を補足的に, かつ特殊に表わす必要性は, かつて -적で終わる形は同時に規定的機能と状況的機能の2つの機能を持っていた (すなわち広い意味で修飾語である) ことによって説明される。これが多義であることを避けるためには, 言語は -인は規定的機能, -으로는状況的機能というふうに区別する手段を作り上げたのである⁽²⁰²⁾. -으로는この場合状況語の義務的特徴であるから, -으ろのない -적 [的] は規定語と知覚されるのである。このタイプの規定的機能を表わすための -인が随意的であり, 義務的でないことが出て来るのである。

§119. 動詞=規定語 規定語としての動詞の形は連体形である(第1部 105 ページ参照) : 산위에서 [山一] 부는 바람, 어저께 본 신문 [新聞], 아침에 먹던 밥, 원산으로 [元山一] 내려갈 결심 [決心].

動詞=規定語と補助名詞₁からなる規定語を特に取り出さなければならぬ;このような規定語は規定される名詞に直接接続して, 受身的な意味を持つ: 맡은바 임무, 아는바 모르는것을 말하였다.

§120. 名詞=規定語 規定語としての名詞の形は属格である: 농부의 [農民一] 노래, 조선인민의 [朝鮮人民一] 영웅 [英雄]. 属格の基本的な意味はロシア語の属格の基本的な意味と一致する: 属性 (아버지의 집), 関係 (조선인민의 [朝鮮人民一] 영웅 [英雄]), 全体 (집의 지붕), 特徴の担い手 (전사의 [戰士一] 대담성 [大胆性]), 主体 (젓먹이의 울음), 対象 (계획의 [計画一] 완수 [完遂]) 等々.

語幹格はある名詞の他の名詞への修飾的關係をも確立する. しかしこの關係の文法的性質は今まで明らかではない. この場合問題となっているのは “izba-chital’nja” <農村図書室> [izba <百姓屋>, chital’nja <読書室>] のタイプの語根複合なのか, あるいはこの關係は單語結合の形を持っているのか明瞭でないままである. このことから正書法にゆれが生ずる: すなわち朝鮮語で2つの名詞語幹인민 [人民] と위원회 [委員会] の結合である “narodnyj komitet” <人民委員会> は, したがって, 規定語を語幹格で作る規定語タイプの單語結合として分かち書きされたり (인민 [人民] 위원회 [委員会]), したがって, 複合語として, 続け書きされたり (인민위원회 [人民委員会]) である.

§121. 数詞=規定語 規定語としての数詞は普通規定されるものに先行する. その際一部の数詞 (§21 参照) は特別な規定的な形を取る; 例え, 두사람 (둘 사람의代わり), 스무살 (스물 살의代わり) 等々. 対象数詞 (助数詞の入る数詞) は規定される名詞に関して二重の位置を占める: すなわちそれらは規定される名詞に直接付いて, 名詞とともに1つの曲用する全体をなすか (말 두마리가—主格, 말 두마리를—対格等々), あるいは名詞に先行し, 属格によって作られるか (두 마리의 말⁽²⁰³⁾) である.

[注] 한학생 [一学生] というタイプの單語結合は학생들(의) [学生一] 하나というタイプから区別しなければならない. 前者では規定語は数詞で, 單語結合は「1人の学生」を意味する (「ある学生」をも意味し得るが, この場合 한は数詞ではなく代形容詞である). 後者では規定語派名詞であり, 單語結合は「学生のうちの1人」を意味する.

付 加 語

付加語となり得るものは名詞のみである。付加語はそれが関連する単語に先行し、あるいは後続する。

付加語に関連する単語に先行する付加語は次のように作られる：

- a) 語幹格 (付加語が関連する単語に直接接続する) によって⁽²⁰⁴⁾ : 조선인민의 [朝鮮人民—] 영웅 [英雄] 강남주 [×××] .
- b) 繫辞이다の連体形 -인によって⁽²⁰⁸⁾ : 공산주의의 [共産主義—] 창건자인 [創建者—] 영웅적 [英雄的] 쏘베트인민 [—人民] 만세 [万歳] !
- c) 란 (母音の後で) / 이란 (子音の後で) —繫辞이다の変種이라の連体形によって ; 란 / 이란の代わりに라는 / 이라는が可能である⁽²⁰⁸⁾ : 박이라는 [朴—] 교수 [教授] , 강이란 [×—] 청년 [青年] .

付加語に関連する単語に後続する付加語は具格あるいは具位格 (語尾 -로, -로서) によって作られる⁽²⁰⁹⁾ .

김진구는 지금 한몫덩이로서 세계의 경쟁에 참가하고 있다.

[注] 付加語の特徴としての란 / 이란は主語の特徴としての란 / 이란から区別しなければならない。後者の場合란 / 이란のㄴは助詞는の短縮形である。

그러나 그세계의 경쟁이란 결국 별개의 것은 아니다.

同 種 成 分

同種成分とは、文において等しい機能を持ち、同じ問に答える文の成分である (例えば、1つの述語に対する2つ以上の主語、1つの述語に対して2つ以上の直接補語等々)。同種成分の間の関係は結合的、分離的あるいは対立的であり得る。同種成分がどのような品詞によって表されているかによって、名詞同種成分、動詞同種成分、形容詞同種成分及び副詞同種成分に分かれる。

§122. 同種成分間の接合的結合

a) 名詞同種成分 このグループに入るのは名詞だけでなく人称代名詞、対象代名詞そして数詞でもある。

名詞同種成分の関係は非終結的列挙を表わす関係と終結的列挙を表わす関係の2つのタイプを区別する必要がある。

非終結的列挙は名詞の辞書形を互いに接続させることで表わされる。同種成分グループと他の文の成分との関係は最後の文の成分の後ろでのみ表わされる。

例えば, 同種成分グループが主語であるならば, 主格の指標あるいは分離助詞 -는 / -은が最後の名詞の後ろに接合されて, そのこと自体によって同種成分グループの各々の成分も主語であることを示すのである.

そのような語尾はグループ的語尾と呼び得る.

거리에는 전차 자동차 우차 마차가 연달아 오고간다.

列挙の非終結的性格を強調するために, グループの最後の成分の後ろに(しかし格語尾の前に)非終結的列挙の助詞들(これを複数語尾と混同してはならない)⁽²⁰⁵⁾あるいは등 [等] があり得る.

조선어 로어 용어들을 배웁니다.

終結的列挙は次のように表わされる:

1) 接続詞과 (末尾子音を持つ名詞の後ろ) / 와⁽¹⁹⁶⁾ (末尾母音を持つ名詞の後ろ) によるすべての同種成分の接合; 接続詞は列挙される同種成分のうち最後のものの後ろにも(しかし格語尾の前に)続き得る; 과 / 와の代わりに接続詞및を用い得る.

우리들은 우리 역사와 우리 말과 우리 글을 알아야 한다.

우리들은 조국의 자유와 독립을 쟁취하였습니다.

2) あるいはすべての同種成分(最後の成分を除く)を互いに辞書形で接合させることによって; 最後の名詞の前にはこの場合接続詞및あるいは과 / 와⁽¹⁹⁶⁾が立つ. このタイプの関係は同種成分グループが2つ以上の単語からなるところで可能である.

우리는 조선어 일본어 및 영어를 배웁니다.

[注] 接続詞 'and' の方言的変種は랑 (母音の後) / 이랑⁽²⁰⁶⁾ (子音の後) である. 普通列挙された成分の各々の後ろに接合して, 列挙の非終結的性格を表わす.

接続詞 'and' の意味では하고と급 [及]⁽²⁰⁶⁾も用いられる. 後者は書き言葉的性格を持つ.

同種成分の各々に対する一定の独立性を取り立て, 強調し, 付与する時, 同種成分の各々は接続詞ではなく助詞도によって作られる.

우리 집에는 전기인두도 전기풍로도 있습니다.

우리 집에는 전기인두도 전기풍로도 없습니다.

しかし助詞도が同種成分のグループを終結するのであれば, その助詞は同種成分の与えられたグループにおいて先行する文で列挙された対象に補足的に対象が列挙されていることを示す.

우리 집에는 전기인두와 전기시계와 전기풍로도 있습니다.

同種成分のグループに入る名詞の作り方特に言及しなければならぬ. この場合, 接続詞による同種成分の列挙された接合方法のほかに, 繫辞이다の接

続形によって同種成分を結合する方法が用いられる. 接続形としては語尾 -며
がしるしであるような接続形が用いられる. この語尾は同種成分の各々に現れ
るしるしが1つの主語に同時に属し, それを異なる側面から特徴づけることを
示している.

그는 선량한 사람이며 남이 알아주거나 말거나 진심으로 일에 충실한
사람이다.

[注]もっと少なく用いられるのはしるしが語尾 -고であるような接続形
による同種成分のつながりである.

末尾音が母音である名詞の後ろには繫辞語根이は脱落し, それ故 -이며
は -며の形を取る.

그는 학자며 작곡가이다.

同種成分のグループの後ろには “vse”, “vse éto” <すべて>等々のタイプの一
般化の単語が立ち得る. 一般化の単語は種概念でもあり得る.

백두산 금강산 묘향산 지이산 한라산 다 아름다운 선이다.

두루미 봉어 가재 세늬이 짐 실은 수레를 끌고 가지고 멩에를 메었습니
다.

b) 形容詞同種成分 このグループには活用形容詞も非活用形容詞も入る.
同種成分のグループに入る活用形容詞はしるしが語尾고である接続形によっ
て互いに結合される: 깊고 넓은 바다.

非活用形容詞 (何よりも적のタイプの形容詞) は接続詞 (普通및) あるいは
繫辞이다 (接続形 -며形を取る) によって互いに結合される.

물질적 및 문화적 수요의 최대의 충족.

まったく同じ方法, すなわち接続詞によって, 規定語の位置で形容詞の機能
を持つ名詞 (特別な形を持たない) も接合する: 경제 및 문화 생활의 전설; 중등
및 특별 학교 최고학교.

c) 動詞同種成分は接合の接続形 (語尾 -고及び -며) によって互いに接合す
る. これらの接続形の機能と意味については§55 に詳しく記述されている.

우리 부대들은 대담성을 발휘하며 전과를 보장하였다.

추운 겨울에는 농민들이 새끼를 꼬고 가마니를 치며 베를 짭니다.

これらの目的では語尾 -고を持つ先行の接続形も用いられる.

문은 닫고 오너라.

語尾 -아 / -어という特徴を持つ先行の接続形は多分状況的意味を作り得るだ
ろうし, 同種成分を作らない. 同時性の接続形 (語尾 -면서) についても同じこ
とが言える. 間に同時性の関係が現れる同種成分の結合のためには結合的 ㅁ 接
続形 (語尾 -며) が用いられる.

漢字語名詞から作られる動詞は接合的接続形によらずに同種成分のグループ

を作り得る. そのような動詞を結合して同種成分のグループとなすには, 最後のものを除いてすべてから補助動詞하다を取り去れば足りる.

우리들은 조국의 자유와 독립을 쟁취 보장하였다. (쟁취하고 보장하였다の代わりに).

d) 副詞同種成分 通常同種成分のグループを作る副詞は互いに接続する. しかし形容詞から作られる副詞(接尾辞 -게)は互いに接続して同種成分のグループを作る際に接尾辞 -게を接合的接続形の語尾 -고に取り換える: 대답하고 [大胆—] 용감하게 [勇敢—] 싸우다.

[注] 副詞のこの結合方法は, 副詞のしるしとしての -게という一定の条件付きで採用された流布した観点 (§82 の注参照) がまるで明らかでないことを補足的に確証することに役立っている. もしも2つの同種的な副詞のうち第1のものが語尾 -고 (これはいかなる理由によっても副詞のしるしとは解釈され得ない) を取るならば, このことは明らかに, 語尾 -게によって作られる単語も副詞ではなく, したがって語尾 -게は品詞のしるしではなく, 文の成分のしるしであるということになる. 品詞としては, -게によって作られた単語は形容詞であり, 文の成分としては状況語である. この問題全体は討論に付されるべきものである. 今のところそれは最終的には決定されていないし, われわれは文法の基本的なテキストでは伝統的な観点を保つてであろう.

§123. 同種成分間の分離的結合

a) 名詞同種成分 同種成分をなす2つの同種的な名詞の分離的結合は接続詞 혹은 [或—], 또는あるいは繫辞이다の語根に接合する助詞나, 건, 든 (これらは通常各々の名詞の後ろに置かれるが, 義務的ではない) によって実現される. 名詞が末尾母音を持つ時は, 繫辞の語根は脱落する. したがって나... 나 / 이나... 이나; 건... 건 / 이건... 이となる.

옛적에는 먼 길을 가려면 흔히 걸을 수 밖에 없었습니다. 급한 일이 있을 때에는 말이나 마차를 타는 수 밖에 없었습니다.

농민들의 집회에서 나라를 구하자고 웨치는 열혈 청년가운데 혹은 장안 종로거리를 미군의 전차앞으로 돌진하는 로동자들속에 그를 보는 듯하였다.

少し異なった性格を持つのが各々の名詞の後ろで繰り返される形態素ㄴ지 (子音の後ろでは인지) による名詞の結合である. この結合の際に各々の名詞は独立の述語性を獲得する; そのような2つの名詞はあたかも互いに分離的關係によって結合した付加文のようである.

낮인지 밤인지 잘 분간할 수가 없는 침침하고도 음산한 날이 계속되었

습니다。

b) 動詞及び形容詞同種成分 この場合の分離的關係は次のように表わされる。

1) 語尾 -나あるいは -거나 / -건을しるしとして持つ分離の接続形によって；同種成分の間では接続詞혹은 [或—] も可能で，これは接続形によって表された關係の分離的性格を強調する。

빙궁과 기아는 불구하고 되거나 혹은 병에 걸린 자본국가 노동자들을 위협하고 있다。

2つの同種成分のうち第2のものがその意味からして第1のものの反意語であるならば，具体的な自立的な動詞の代わりに代動詞タイプの補助動詞말다가同じ語尾とともに (마나あるいは말거나) 用いられる。

덧신이 있는 사람은 길이야 질건 말건 그것을 신고 다녔고 우산을 가지고 있는 사람은 해가 비치건 말건 받고 나왔다。

この文には질건말건と비치건말건という同種成分がある。これで見ると補助動詞말다は類似の構造でロシア語の “net” <英 no> に対応する。

2) 結合的接続形 (語尾 -고) によって；同種成分のこの方法は結合的接続形を扱った章で詳しく観察されている (§55 参照)。

少し異なる性格を持つのは動詞の連体形に接合する形態素지, 가⁽²⁰⁷⁾により実現される動詞の結合である。普通グループの中で第2の動詞として現れるのはすでに言及した말다である。これらの結合の特殊な性格は第1に，それらが分離的關係によって結合している特殊な付加文を作ることにある。もっともよく用いられる構造は次のものである：

지から : 할지 말지
 할는지 말는지
 하는지 마는지
 하던지 마던지⁽²⁰⁷⁾

가から : 할가 말가
 그이가 일을 할는지 말는지 모르겠소。
 내가 공부를 하던지 마던지 네게 무슨 상관이 있느냐?

§124. 同種成分間の反意的結合 ここでは2つのタイプの關係を区別する必要がある：すなわち第1の場合では成分のうちの1つは自身に否定を取り (“priroda ne xram, a masterskaja” <自然は神殿ではなく，アトリエである>），もう1つの場合では両方の成分とも否定ぬきの肯定のみである (“den’ solnechnyj, no xolodnyj” <日が出ているが寒い日>)。

これらの關係の形式的な表現方法は朝鮮語文法にはなく，それらの表現方法は研究されておらず，それ故反意的意味を持つ同種成分の接合方法を示すいく

つかの一般的だが全く完全とは言えないものを以下に示す。

第1のタイプの関係(否定的成分を持つ):成分のうち第1のものは繫辞아니라 (아니다から) を持つ主格を取る。

별판이 아니라 논입니다。

両方の成分が動詞(あるいは形容詞)である場合には,成分のうちの第1のものは補助名詞짓の規定語となる連体形を取る;「連体形+짓」という結合は主格形を持ち繫辞아니라を伴う。したがって構造の原理は名詞の場合と同じである:

그는 읽는 것이 아니라 쓴다。

上述の場合では同種成分のうちの1つが否定であることは,主格との結合はこの否定の成分ではなく,他の肯定の成分であることを示している。主語を持つ関係が1つの成分に限定されず,他の成分にも及んでいることを示す必要がある時は,他の構造が用いられる:すなわち2つの成分のうち第1のものはこの場合未来テンスの連体形を取り,この連体形の後ろに뿐더러あるいは助詞뿐/뿐만(これは否定繫辞아니라を伴う)を取るのである。

적을 뿐더러가뵈소。

피로할 뿐아니라 병까지 났다。

第2のタイプ(否定の成分なし)は反意的接続形によって表される (§65 参照)。

一成分文

主語(これは言外にそれと理解し得るものでもあり得る)と述語が入る文は2成分文と呼ぶならば,述語(述語に従属する成分を持つ)だけが入り,主語が存在せず,それと理解し得ず,復元され得ないで文に入り込むような文は1成分文と呼び得る。一成分文は2つのタイプが取り出される:

a) 述語がこれ以後言及されるであろう事件の完結する時間を示すような一成分文。

재작년의 봄이었다。

벌써 여러해전이였다。

b) 主語が存在しないのは述語に表された動作を帰せしめ得るようななんらかの人物あるいは対象を示してはならないからであるような一成分文;ここでは動作は不定の人物群に帰せられる。

사람은 만물의 으뜸이라고 한다。

第1種の文は無人称文と呼び得るが,第2種の文は不定人称文と呼び得る。人称の範疇のない朝鮮語に関してこの名称は条件付きのものである。

II. 複合文

従属複文

§125. 従属複文の特殊性 複合文はより高度の序列の統辞論的統一体である。複合文では2つの構造の異なる部分, 2つの構成が取り出される。1つの構成はその構造からして基本的に単純文に対応する。特にはっきりとこの対応が現れるのは文の主成分においてである。その構造からして単純文に対応する従属複文の構成は主語と述語という文の主成分を持ち得るのである。

これらの文の成分は単純文におけると同じように作られる。特に重要なのは、この従属複文の述語が単純文の述語と同じ特徴、すなわち終結述語性の範疇があることによって、つまり人間関係の範疇と法の範疇があることによって認知されることである (§§46-47 参照)。複合文のこの構成を主文と呼ぶことができる。したがって、朝鮮語の主文とはその構造からして、主成分が単純文の主成分に対応し、述語が終結述語性の範疇があることによって、つまり人間関係の範疇と法の範疇によって認知されるような単純文に対応するような文のことである。単純文の述語に関して見られるこの規則の例外はすべて複合文の主たる構成においても繰り返される。考慮されているのは主文の述語に非終結述語性の形をわれわれが上に説明した厳密に一定の場合に用いることである (§110 参照)。

しかし従属複文の主たる構成は単純文に対応するだけであって単純文と等しくはくない。次の単純文と複合文の2つ、すなわち文 “**ja predpologaju vyexat' zavtra**” <英 I intend to depart tomorrow わたくしは明日出かけようと思う (出かけるつもりだ) > と文 “**ja predpologaju, chto on vyedet zavtra**” <英 I suppose that he will depart tomorrow わたくしは彼は明日出かけるだろうと思う (予想する) > を比べれば、このことを容易に確認する。単純文は終結した発話である; 単純文においてなんらかの思考が実際に物質的な言語的外見へと形作られているのである。第2の従属複文においてではない。従属複文の主たる構成 “**ja predpologaju**” <英 I suppose わたくしは思う (予想する) > は終結した発話ではない: すなわちその従属複文で物質的な言語的外見へと形作られているのは終結した発話ではなく、この思考の要素、断片に過ぎない; 単語は結合して文になっているが、終結した性格をこの文が受け取るのは、それに対して他の、それを体言化する文が付け加わった後においてのみである。“**ja dumaju, chto on vyedet zavtra**” <英 I think that he will depart tomorrow わたくしは彼は明日出かけるだろうと思う > のような文においてさえ、この主たる構成 “**ja dumaju**” (英 I think < わたくしは思う > は外見でのみ終結した思考の性格を持つ発話である

に過ぎない；何故ならば単純文として発話された “ja dumaju” (英) I think<わたくしは思う>及び従属複文 “ja dumaju, chto on vyedet zavtra”<英 I think that he will depart tomorrow わたくしは彼は明日出かけるだろうと思う>において発話された “ja dumaju” (英) I think<わたくしは思う>という文との間には根本的な違いがあるからである。単純文においてはその述語で陳述は絶対的な性格 (ja myslju<わたくしは思考する>, ja sushchestvuju<わたくしは存在する>のタイプの性格) を持っているのに対して、主文においてはその述語で陳述は相対的な性格を持っているのである；陳述は一定の事件を考慮に入れ、それにのみ及ぶのである。したがって、主文は単純文に対応しつつも、同時に単純文と等しくないのである；このことは従属複文の主たる構成が言語的外見へと形作るのは思考の断片のみであるということに現れるのである；従属複文の主たる構成が思考の完全に終結したことを受け取るのは第2の構成がある場合だけなのである。したがって、主文とは、単純文に対応しつつも、他の文との総体においてのみまとまった思考を言語的な外見へと形作るような文のことである。従属複文の第2の構成を作るもう1つの文は付加文⁽²¹⁰⁾と呼ばれる。朝鮮語の付加文は主文とは根本的に異なる。この違いは構造上の性格を持っている。この違いは何よりも文の成分に現れる：すなわち従属複文には文の独立成分、すなわち呼びかけ obrashchenie がない；従属複文にはそれ自身の本来の主語を持たないこともあり得る：すなわち従属複文の主語は主文の主語と一致し得るのである。付加文と主文との違いは、さらに、主成分の形にある。付加文の主語は普通は主格によって作られる。単純文とは異なり、一定の場合に付加文の主語は属格によって作られるのに対して、単純文の主語は決して属格によって作られることはない。単純文では主格によって作られる主語及び語幹格と助詞 -는 / -은によって作られる主語は相対的である (§103 参照) のに対して、付加文ではこの相対性は多くの場合 (これはまだ徹底的に研究されていない) 破られ、単純文におけるように主語を作る2つの可能性の代わりに1つの可能性しかない (例えば、付加規定文では主格のみ)。

付加文の述語が主文と単純文の述語と異なるのはさらにくっきりした形においてである：すなわち付加文の述語は終結述語性の形 (終止形)、したがって人間関係の範疇と法の範疇を持ち得ないのである。付加文の述語の基本的なしるしとは非終結述語性の形 (非終止形) と体言形のことである。もしも付加文に終止形があるならば、それは一定の条件においてのみである。それに加えて終止形はこの場合でも非終結述語性の形 (非終止形) によって複雑化されなければならないのである (例えば하다고であって하다ではない；하다면であって하다ではない；하다마는であって하다ではない等々)。

最後に、付加文の第3の特殊性は、文の独立した成分をなさずに付加文と主

文との関係, この関係の性格を表わす単語, 品詞と小品詞 (そして形態素) が付加文に入り得ることにある。この特殊性は述語が連体形あるいは体言形であるような付加文に現れる; 述語が接続形であるような付加文にはこの特殊性は存在しない。

したがって従属複文とその2つの構成は, より低い統辞論的統一体としての単純文と質的に異なるけれども, 単純文ですでに与えられたすべての要素の展開と完成である特殊な統辞論的統一体である。

従属複文は言語全体に固有なものであるが, 複合文の多様性と豊かさが現れる言語の特徴的な領域は書き言葉の文体である。まさに言語のこの領域こそは, 複合文が形作られ, 複合文のタイプと変種が豊かになることにもっとも大きな影響を与えたのである。

疑いなく複合文の形成と完成は文法の諸側面の1つでもあり, そして文法の完成は文字, 文学に負っているのである。

さらに, 朝鮮語の従属複文の叙述に際してわれわれが文法形式から文法的意味に進むのであって, 逆ではないことは, われわれの見るところでは, I・V・スターリンが言語学に関する彼の著述の中で発展させた言語の本質に関する基本的命題に合致する。

その際われわれが出発するのは付加文の2つの本質的な特徴からである: すなわち第1に, 付加文の述語形から, 第2に, 付加文と主文の関係を確定する形から。

述語形の観点からは付加文は3つの基本的タイプに分かれる:

- a) 述語が連体形を持つ付加文;
- b) 述語が体言形を持つ付加文;
- c) 述語が接続形を持つ付加文。

主文との関係の形あるいは表現方法の観点からは付加文は3つの基本的な種類に分かれる:

a) 主文との関係が語尾によって表される付加文; 接続形によって表される付加文ではそれは接続形自体の語尾である; 述語が体言形を持つ付加文ではそれは体言形の格である; 述語が連体形を持つ付加文ではそれはいくつかの場合では (本来の規定文) 連体形自体の語尾である。主文との関係が語尾によって表される付加文は個々の場合では語尾の後ろに助詞 (야, 도, 는) を持ち得る。

b) 主文との関係が補助名詞のなんらかの格 (後置詞を伴わない; 짓을等々,あるいは後置詞を伴う; 데에 있어서等々), 助詞 (수록等々)そして後置詞 (가운데等々) によって表される付加文; 付加文と主文の関係のこの表現方法は付加文の述語が連体形を持つところに現れる。

- c) 主文との関係が単純文によって表される付加文; 付加文と主文の関係のこ

の表現方法は述語が連体形を持つ付加文においてのみ例外的な場合に（いくつかの付加疑問文）現れる。

以後朝鮮語の付加文は第1の分類を基礎に叙述されるであろう；第2の分類は補助的な意味を持つ。

連体形の述語を持つ付加文

連体形の述語を持つ付加文はすべて形式的には付加規定文である：何故ならば連体形の存在自体が関係の修飾的性格をすでに物語っているからである。しかしこのことが形式的にのみ真実である。形式的には *립증하는* [立証—] *사실* [事実] という結合と *립증하는* [立証—] *것* という結合の間にはいかなる違いもない；双方ともに修飾的關係を持つ2つの単語，すなわち連体形の動詞=規定語と規定される名詞があるのである。しかし実際にはそれらの間に存在するのは、例えば、単語結合 “*molot' kofe*” <コーヒーを挽く>の中の単語 “*molot'*” <挽く>と “*kofe*” <コーヒー>の間及び単語結合 “*molot' vzdor*” <くだらぬおしゃべりをする>の中の単語 “*molot'*” <挽く>と “*vzdor*” <たわごと>の間の関係と全く同じものである；もしも “*melet kofe*” <彼はコーヒーを挽いている>という文で単語 “*melet*” <挽いている>が述語で、単語 “*kofe*” <コーヒーを>が直接補語ならば、“*melet vzdor*” <彼はくだらぬおしゃべりをしている>という文ではそのような関係はない (“*chto on delaet?*” <彼は何をしているか?>という問に対して “*melet*” <挽いている>と答え、“*cho melet?*” <彼は何を挽いているか?>という問に対して “*vzdor*” <たわごとを>と答えることは馬鹿げたことだろう)；この単語結合全体はほぼ動詞 “*boltat*” <無駄話をする>に対応する統辞論的に1つの総体なのである（なおも “*nesti meshok*” <袋を運ぶ>と “*nesti okolesicu*” <バカげたことを話す>、“*bit' sobaku*” <犬を打つ>と “*bit' baklushi*” <無為に過ごす>等々を参照せよ）。そしてこのことは単語結合の諸要素の1つが語彙的に他のものと対等でないこと、すなわちそれが文法的機能を持っていることによるのである。われわれの例でそのような文法的要素とは語彙的に自立的でない単語 *것*（これは純粹に補助的な文法的機能を果たす）である。形式的な規定文が本来の規定文（規定語は形式的であるのみならず現実のものである）と形式的な規定文（規定語は形式的であるだけで、現実のものではない）という2つに事実上分かれる所以である；そのような文の現実的な性格はそのような形式的な規定語に伴われる要素によって確定する。

§126. 本来の規定文 本来の規定文は自立語の名詞（補助名詞ではない）を規定する。これらの文の述語は連体形を持つ。この形は名詞とともに規定文と規定される名詞の關係を表わす。本来の規定文はそれが規定する名詞に常に先行

する。

[注] ロシア語文法は付加規定文 “**uzkaja doroga byla pokryta snegom, kotoryj provalivalsja pod nogami**” <狭い道は雪に覆われており, 雪は足もとで崩れた> [関係代名詞による結合] と分詞 (形動詞) 構文 “**uzkaja doroga byla pokryta snegom, provalivavshimsja pod nogami**” <狭い道は雪に覆われており, 雪は足もとで崩れた> [分詞 (形動詞) による結合] を区別する。これとともにこれらの2つの構造が意味上著しく近いことが示されている。朝鮮語では付加規定文は分詞 (形動詞) 構文に対立していない (知られるように, そのような対立はロシア語でも一連の条件がある時にのみ可能である (Grammatika russkogo jazyka, ch. II, Sintaksis, Uchpedgiz, <『ロシア語文法, 第2部, 統辞論』, 国立教育出版社> 1948, str. 105-107 参照)). 何故もともと朝鮮語にはロシア語にある2つの可能性がないのか? 何故ならば朝鮮語には関係接続詞⁽²¹⁾と接続語がないからであり, 動詞の規定語が終止形ではなく連体形でのみ表され得るからである (いずれにせよ, 連体形の存在は規定語の最低限のしるしとして必要である)。朝鮮語では“**kotoryj provalivalsja pod nogami**” <雪は足もとで崩れた> [関係代名詞による] と“**provalivavshijsja pod nogami**” <雪は足もとで崩れた> [分詞 (形動詞) による] というタイプの単語結合は何なのか? 形式的には, 動詞が連体を持つことから出発すると, それらは分詞 (形動詞) 構文である。しかし, これらの単語結合は自身の主語を持つ可能性のおかげで, ロシア語の付加規定文と等価的である。したがって朝鮮語の構造はロシア語の規定文とロシア語の分詞 (形動詞) 構文とを併せ持っているのである; しかし朝鮮語の構造はそのどちらでもない。このことはそのような構造に必要なのはその構造の特徴を確定するような特別な術語であることを意味する。このことは似たような特徴がひとり朝鮮語にのみ固有なものではないだけに必要である; この構造は多分すべてのアルタイ諸語に固有なものである。われわれはこの著述では「付加規定文」という術語を採用する時, 朝鮮語 (もっと広くはアルタイ諸語) のタイプの付加規定文, すなわちロシア語の分詞 (形動詞) 構文に固有な特殊性を内包する付加文を考慮に入れている。われわれが「付加規定文」という術語をより好むのは, 以下に見るように, そのような文の述語が多くの場合述語形 (これは連体形語尾にもっぱら伴われる) を持ち得ることと結びついている。これらの条件において終止形は述語性の表現手段となり, 連体形は, ロシア語の接続詞あるいは接続語になんらかの程度において対応しつつ, 修飾的 (規定的) 関係の表現手段となるのである。このことは述語性の表現と関係の表現が2つの形態

素に配分され, このことがこれらの形をロシア語の付加規定文に近付けていることを意味する.

規定文の述語の典型的な形:

動詞において:

1) 本来の連体形:

하는	(現在テンス)
한	(過去テンス)
할	(未来テンス)
하였던	(過去テンス, 第1部 111 ページ参照)

2) 同伴的形式的連体形を持つ述語性の形:

한다는	(現在テンス)
하였다는	(過去テンス)
하겠다는	(未来テンス)
하리라는	(未来テンス)

形容詞において:

1) 本来の連体形: 한

2) 同伴的形式的連体形を持つ述語性の形: 하다는 (한다는ではない)

名詞述語において, より正確には繫辞付加成分の後ろの繫辞において: (이)라는

派生名詞述語において:

하는 것이라는	(現在テンス)
한 것이라는	(過去テンス)
할 것이라는	(未来テンス)

토끼가 달아난 자취는 더욱 재미있다. 발이 셋밖에 없는 짐승이 다닌 것 같이 보인다.

나무가 없는 붉은 산은 보기에 흥합니다.

바다에는 날마다 배들이 지나간다. 깃발이 펄럭거리는 배를 따라 갈 매기들은 어디론지 날아간다.

[注] 朝鮮語の付加規定文はいつもロシア語の付加規定文に対応するわけではない. 朝鮮語には, 主語と述語を持つけれども, ロシア語に訳す時には規定的単語結合に変えられるような規定文がある: 전차가 [電車—] 지나가는 소리 ‘zvuki proxodjashchego tramvaja’ [直訳<通り過ぎる電車の音>], 토끼가 달아날 자취 ‘sledy probezhavshego zajca’ [直訳<逃げる兎の足跡>] 等々. この種の文のタイプに関する問題はロシア語・朝鮮語対照文法で解決されなければならない.

付加規定文の主語は普通主格形を持つ (例は以下を参照). しかし付加規定文

が主語と述語からのみなるならば, 主語は語幹格の形を持ち得る.

거리에서 전차가 지나가는 소리가 들려옵니다.

우리 나라에는 나무 없는 산이 많습니다.

[注] 主語のこの表現方法がロシア語で規定的単語結合によって訳されるような付加規定文と直接結びついていることは非常にあり得ることである. ただし나무 없는 붉은 산を参照せよ.

語幹格の代わりに主格を持つ付加文の述語は, すでに述べたように, 連体形を持つ. この連体形のテンスは常に相対的である. しかしこのような文における未来テンス連体形はモーダルな意味(可能性, 必然性)を持ち得る.

이것은 우리가 전심 고구할 문제입니다.

付加文の述語が補助動詞あるいは補助形容詞(通常モーダルな意味の)を伴うならば, 規定文の規定される名詞への従属性は補助的な単語の連体形によって表される. 述語自体の連体形はこの場合形式的で, その後ろに続く補助的な単語に従属する.

내 고무신 바닥에는 째극째극 소리가 난다. 마치 머구리가 우는 듯한 소리다.

この文では述語울다は補助形容詞듯하다によって形作られ, この形容詞は比較という補助的ニュアンスを持つ. 名詞に対する規定的関係はこの補助形容詞の修飾語形듯한によって表される; 基本的な術語=動詞の連体形우는に関しては, それが現れるのはこの動詞と規定される名詞との修飾的關係を表わすためではなく, 述語と補助形容詞듯하다との關係を確立するためである.

上に述べたように, 付加文に対する規定されるものとして現れるのは自立的な名詞である.

上に挙げた例では付加規定文は叙述形である. しかしそれは疑問形でもあり得る. この場合付加規定文の動詞あるいは形容詞は疑問の助詞가を持つ派生合成述語の形を持つ; この文と規定される名詞との關係は補助動詞하다の形式的な連体形는によって実現される: 하는 것인가 하는(現在テンス), 한 것인가 하는(過去テンス), 할 것인가 하는(未来テンスあるいは不確実性, 必然性).

그러면 중국문화도 아니고 조선문화도 아니면 대체 어느 나라 문화에 속할 것인가 하는 의문이 일어날 것이다.

§127. 主語文 形式的には主語文は補助名詞것¹⁰と이の主格あるいは語幹格(助詞 -는 / -은を伴う)に対する規定文である. 主語文の述語は次のように連体形を持つ:

a) 動詞=述語においては하는(現在テンス), 한, 하던(過去テンス), 할(未来テンス; また不確実性のニュアンスを持つ)あるいは, 終止形の後に形式的

な連体形を伴って, **한다**는 (現在テンス), **하였다**는 (過去テンス), **하겠다**는 (未来テンス), **하리라**는 (-리라によって持ちこまれるモーダルなニュアンスを伴う);

b) 形容詞=述語においては**한**あるいは, 終止形の後に形式的な連体形を伴って, **하다**는 (한다는ではない) ;

c) 名詞=述語においては**인** (繫辞付加成分の後).

補助名詞**것**と**이**の主格あるいは語幹格とともに形式的な規定文は現実の主語文を作る.

중국문학이 한문으로 쓰이고 영문학은 영문으로 일본문학은 일본문학으로 쓰이는 것은 원형리정이다.

그 결의가 실천되면 숙청될 것이 겁이 나서 반동자들은 이것을 맹렬히 반대하고 나왔습니다.

그러나 이번에는 아무도 선뜻 대답하는 이가 없었습니다.

넘려할 것 없소.

[注] 1. 의심할 바 없는 것이다, 더 말할 바 없다のタイプの固い單語結合 *ustojchivye slovosochetaniya* は形式的には主語と述語のグループからなる. しかし先行する主語文に対する述語を作る1つの総体と見なし得る.

2. 上に挙げた付加文は主文の述語に対する主語でありつつ, この述語及びこれと関連ある單語(補語, 状況語)とともに1つの複合文を作る; それらは同じ現実の内容を持つ單純文には変えられ得ない. このような複合文は複合文に入った主語文(これは單純文の変形したものである)から区別しなければならない. 例えば, 單純文 “**vse konchilos' v polovine chetvertogo**” <すべては3時半に終わった>は複合文に変えられ得る.

そのように変える必要があるのはこの文の述語が思考の一定の対象を表わす場合(すなわちすべてが終わったことは既知であるが, 終了時間が未知であり, この文で初めて認識される時)である:

다 끝난 것은 오후 세시반이었습니다. **vse konchilos' v polovine chetvertogo.**

ロシア語訳ではこのような複合文はいろいろな方法で伝えられるが, その方法は朝鮮語とロシア語の対照文法で考察されなければならない.

§128. 補語文 補語文の述語は連体形を持つ. 名詞(これはしかるべき格によって動詞に対する付加文の関係を確立する)として**것**, **이**, **말**, **줄**, **일**, **모양** <模樣>, **데**, **마**が現れる.

a) **것**はもっとも多くは対格 -을によって作られる. 与格, 具格, 比較格その

他の格も可能である. 付加文の述語は付加主語文の述語と同じ連体形を持つ (§127).

어머니가 얼굴을 찌그리고 약을 잡수시는 것을 보고 동생 문잔이가 「어머니 그 약을 씹니까? 쓰거든 사탕을 넣어잡수십시오」 하고 말하였습니다.

덕준이 무슨 중요한 공작을 맡고 있는 것을 점순이는 짐작하고 있었습니다.

그는 결국 다시 인쇄소를 들어갈 것을 결심하였다.

가로 쓴 것은 세로 쓴 것보다 보기가 편리하다.

b) 말의対格; 主文の述語が「知る」, 「聞く」, 「聞き出す」等々のタイプの動詞であるところで것の代わりに用いられる. 付加文の述語としてもっとも多く現れるのは形式的な連体形한다는, 하였다는等々である.

몇일전에 인쇄에 붙인 잡지 원고의 교정이 오늘부터 나온다는 말을 들은 경수는 아침을 재촉해서 먹고 그 길로 바로 인쇄소로 달려갔다.

c) 줄의対格 (より稀には具格)あるいは語幹格 (しばしば助詞 -은あるいは-을을伴う) は, 主文の述語が動詞「知る」, 「知らない」, 「信ずる」, 「理解する」, 「判断する」等々であるところで것の代わりに用いられる. 付加文の述語形は動詞の場合하는 (現在形), 한あるいは하던 (過去テンス), 할 (未来形); 形容詞の場合한, 不確実性のニュアンスを持つ할; 名詞の場合인である.

어떻게 대답할 줄을 모른다.

그에게 다만 한 누이가 있는 줄을 안다.

그런 줄을 안다.

나는 그것이 김인 줄 알았다.

[注] 「動詞連体形+줄+알다あるいは모르다」という単語結合では動詞알다と모르다는それぞれ「できる」と「できない」という意味を持つ: 기뻐할 줄을 알다, 들을 줄을 모른다.

d) 補助名詞데; もっとも多くは次の2つの形に見られる:

1) 語幹格で; この場合与格の機能の1つを担う. 補助名詞데の語幹格による付加文の形成は主文の述語として動詞있다가現れるところでは無条件に必要である.

신라는 대립을 제거하고 여러 종족을 하나의 국민으로 형성하는데 핵심적 역할을 하였다.

우리 과업은 이 계획을 초과완수하는데 있습니다.

2) 語幹格と後置詞있어서及び대하여.

히틀러 독일을 격파하는데 있어서 쏘련 군대의 역할은 결정적이였다.

지도일군들은 초급당단체의 역할을 높일데 대한 관심과 고려가 아직도

부족하다.

[注] 上に挙げた後置詞のほかに, 語幹格の後ろに後置詞반하여もあり得る; しかしこの後置詞が作るのは反意的性格の従属複文であり, 補語文ではない.

북조선에서 민주개혁이 실시되고 인민경제가 성공적으로 부흥발전하고 그 기초위에서 인민의 물질조건이 훨씬 향상하고 있는데 반하여 남조선에서는 민주개혁도 경제부흥도 볼 수 없으며 인민은 빈궁과 기아의 비참한 형편에서 살고 있습니다.

付加文の述語はどのテンスの連体形をも取り得る: 하는, 한, 할.

名詞테はいくつかの場合に物質的意味を持つ: 사는데, 우연히 나 있는 데를 알았다; 物質的意味を持つ테は完全なパラディグマを持つ: 데가, 데를, 데로等々. しかしロシア語訳では物質的意味は ‘tam (gde...)’, ‘tuda (kuda...)’ 等々に訳される: 사람 없는 데로 갔다 ‘uexal tuda, gde nikogo net’.

e) 마. 補語文を形成するものとしてのこの補助名詞の条件はまったく明瞭ではない. 마の用法の2つの場合がわれわれに知られている.

1) 마の対格.

지금까지 지내오던 마를 말하였다

2) 마の語幹格; 「異なる」, 「違う」等々の動詞や形容詞とともに, また副詞같이, 마찬가지로等々とともに.

이 일에 대해서 그가 생각하는 마와는 다르게 생각한다.

사태는 제국주의자들이 생각하던 마와 판이하게 정반대로 전개되고 있다.

보도에서 볼 수 있는 마와 같이. . .

말한 마와 마찬가지로. . .

f) 모양 [模樣]. この半自立的な名詞は主文の述語に一定の動詞がある場合にのみ, 것の代わりに, 用いられる. しかしこれらの動詞の範囲は不明のままである. これは「見る」, 「想像する」, 「思い浮かべる」等々であるとのみ想定し得る.

또 그는 다른 종족이 살아가는 모양을 구경하려고 룝지로 내려가서 그들의 언어랑 풍속을 익혔다.

g) 양 [樣]. この補助名詞は主文の述語に動詞보다がある場合に, 것の代わりに, 用いられる (この場合ロシア語訳では付加文は接続詞 “что” <英 that> ではなく接続詞 “как” <英 how> によって導かれる).

나는 기차가 출발하는 양을 보았다.

§129. 疑問主語文と疑問補語文 上に挙げた主語文と補語文は叙述形である.

これと並んで疑問形（ロシア語の “Ne znaju, xorosho éto ili ploxo” <それがよい
か悪いか知らない>のタイプ）も可能である。この種の文の述語はまた連体形
を持ち得る。しかし非疑問文，叙述文とは異なり，この場合連体形は半自立的
あるいは非自立的な名詞によって要求されず，疑問助詞가，지⁽²⁰⁷⁾によって要求
される。付加文全体は主文との関係を語幹格（しばしば助詞는に伴われる）あ
るいは対格あるいは与格（後置詞대하여 [対一]）を伴う：하는가에 대하여 [対
一]）によって表す。

疑問の助詞가는付加文の述語が動詞の場合形式的な連体形 -는を，形容詞の場
合 -ㄴを持つことを要求する。

김진구는 계획성 없는 작업이 얼마나 위험한 것일가를 작년 겨울에 자
기 눈으로 똑똑히 보아 잘 안다。

리순신이 어떤 사람인가를 알으시라거든 아무러한 조선사람에게나 물으
십시오。

왜 조선어 국어 되지 않으면 아니되며 조선 글이 국문으로 되지 않으면
아니되는가에 대한 주시경 선생의 견해는 「국어와 국문의 필요」 라는
논문에서 설명되고 있다。

疑問の助詞지는付加文の述語が動詞と形容詞の場合形式的な助詞 는（하는
지（現在テンス）；하였는지（過去テンス），할는지（未来テンス）），繫辞の場
合（인지）を持つことを要求する。ただし지가非形式的な連体形にも接合する
ことは可能である：한지，할지。

여러분이 입고 있는 옷은 무엇으로 만들었는지 압니까?

그도 내가 어디 있는지를 몰랐다。

남의 책인지 내 책인지 분간할 수 없었다。

[注] 1. 付加疑問文では疑問の助詞지와가はないこともあり得る。付加
文の疑問的性格はこの場合終止形の疑問形によって規定されるのであつ
て，連体形の後ろの疑問の助詞によってではない。付加文と主文の間の
関係はこの場合でも格によって表される。

이 목적을 어떻게 달할 것이냐가 우리들이 전심 고구할 문제이다。

2. ここで観察された構造は「基本的な動詞の連体形（普通は -는）+疑問
の助詞지+助詞 도+動詞모르다（모르다は ‘vozmozhno’ <あり得る>を
意味する）」という単語結合を生むこととなった。

시집 갔을지도 모르리라 하였다。

§130. 時間の状況文 2つの文の間の時間=状況的關係は半自立的名詞あるい
は補助名詞때, 적, 제, 사이, 무렵, 다음, 後置詞동안, 뒤, 후[後], 이래[以
来]等々によって確立する。

a) 때 (しばしば与格 -에) はロシア語の接続詞 ‘kogda’ <英 when> に対応する: 때마다はロシア語の ‘kazhdyj raz kogda’ <英 every time when> に, 때마침はロシア語の ‘kak raz kogda’ <英 just when> に, 때부터はロシア語の ‘s tex por kak’ <英 since> に対応する. 付加文の述語は普通は未来テンス連体形であるが, これはこの場合形式的である: 할は現在及び未来テンス (過去テンスにも用いられ得る), 하였을は過去テンスである. したがってこの連体形のテンスはこの場合相対的であり, 終止形に依存する.

길거리에 나설 때는 언제든지 정신을 차려야 합니다.

싸우실 때에는 언제든지 전투에 서시었습니다.

한가지 차례가 시작될 때와 끝마칠 때마다 요란한 박수소리가 들렸습니다.

어떤 날 해와 바람이 누가 힘이 센가 하고 서로 다툰 때마침 한사람이 두루마기를 입고 길을 가고 있었다.

나는 Y 군의 뒤에 머리를 숙으려고 서 있는 젊은 남녀를 보았을 때 깜작 놀랐다.

b) 무렵 <頃> ; 러시아語의 ‘kogda’ <英 when>, ‘kak tol’ko’ <英 as soon as> に対応する; 通常未来テンス連体形に接合する; 与格形を取り得る.

해가 아슬 아슬 서산에 기울어질 무렵 이 포위망은 완전히 조여들었다.

c) 사이あるいは, ai가 é となった後, 새; 러시아語の ‘poka’ <英 while>, ‘tem vremenem’ <英 meanwhile> に対応する; 通常未来テンス連体形に連接する; しかし他の連体形もあり得る. 사이 / 새は普通与格形を取る.

한번 말하고 두번 깨우치고 세번 호소하는 새에 무엇보다도 인민경제 계획완수가 중하다는 정신이 안해의 머리속에 뿌리 박히게 되었다.

d) 동안: 러시아語의 ‘poka’ <英 while>, ‘v techenie’ <英 during> に対応する.

그러나 조선사변이 버러진 이래 일년이 계속되는 동안 사태는 제국주의자들이 생각하던 바와 판이하게 정반대로 전개되고 있다.

e) 다음; 러시아語의 ‘vsled za’ <英 after> に対応する.

인민해방군은 적군의 근대식 요색을 파괴한 다음 동도 내에 진격하였으며 동도는 십륙일에 해방되었다.

f) 뒤(에), 후(에) [後—], 이래 [以来]; 러시아語의 ‘posle togo kak...’ <英 after> に対応する; 付加文の述語は通常過去テンス連体形を持つ.

선생님이 나가신후 (あるいは후에, あるいは뒤에) 우리들은 일년을 팔각 팔갈 뒤쳐 보았습니다.

국민당 복건성 정부는 팔월에 복주가 해방될 이래 대만에 피난하였었다.

g) 적(에)あるいは제 ; 러시아語の‘kogda.’<英 when>に対応する ; 付加文の述語は通常未来テンス連体形を持つ (テンスは形式的).

동사의 어간에 「이, 히, 기」가 붙을 적에 어간의 끝 음절의 홀소리가 그 「이」 소리를 닮아서 달리 나는 일이있다.

[注]半自立的名詞적は적이있다<... したことがある>, 적이없다<... したことがない>という固い単語結合にも入り込む ; この結合はロシア語の‘prixodilos’<... することになった>, ‘ne prixodilos’<... することにならなかった>に対応する ; この単語結合に従属する文は規定文である (ただし上に挙げた例におけるような時間の規定文ではない) ; そのような規定文の述語は過去テンス連体形を持つ.

한번도 본 적은 없었다.

h) 지 ; これは多分助詞であって名詞ではない⁽²¹²⁾ ; 付加文の述語は過去テンス連体形を持つ ; 主文にはなんらかの日付, なんらかの時間を表わす単語が必ずなければならない ; この日付は付加文で述べられることの出発点となる.

부부가 읍내 들어간지가 벌써 닷새나 되어서도 아무 소식이 없었다.

§131. 理由の状況文 2つの文の間の理由的關係は半自立語까닭(에)と補助名詞고로 [故一] (本来고 [故] の具格) によって確立される.

눈이 온 까닭에 아니 왔다.

중국은 남반에 장하가 많은 고로 선박으로 통행한다.

同じ意味で탓の与格あるいは具格탓으로, 탓에도用いられる.

그는 어젯밤 늦게야 잠이 들었던 탓으로 열시에 일어났다.

特に取り立てなければならないのは予想される理由の状況文である. これは現在テンスあるいは過去テンスの連体形の後ろの지 : 하는, 한, 하였는, 하던 によって表される.

참새들은 처마 끝에 앉아서 무엇을 찾는지 까만 눈을 또록또록하며 머리를 기웃거립니다.

§132. 比較の状況文は連体形の後ろの듯이あるいは듯하여によって表される. 基本的な意味は ‘(tak) slovno’<英 as if>である.

눈송이가 그의 입술 끝에 녹아지고 또 녹아졌다. 그는 찬 냉수를 마시는 듯하여 가슴이 시원하군하였다.

§133. 限定の状況文 この文は, 主文で述べられていることが効力を持つ条件を表わす : この關係は이상 [以上], 한(에) [限一] ‘poskol’ku’<英 as far as> によって確立される.

제국주의자들은 월남에서 민주세력이 살고있는 이상 그를 자기의 식민
지로 만들 수 없다는 것을 잘 알고 있습니다.

내 아는 한에는 그런 일이 없었습니다.

§134. 程度の状況文 만큼 / 만치 (古風な書き言葉만큼) によって表される
文は2つのニュアンスを持つ. このニュアンスの1つはロシア語の接続詞
‘poskol’ku’<英 as far as>を伴う付加文に対応する;付加文の述語はこの場合過
去テンスの連体形한, 하였던を持つ. このもう1つのニュアンスは, ロシア語
で主文に副詞 ‘tak’<英 so>を持ち, 接続詞 ‘chto’<英 that>を伴う付加文 ‘tak,
chto...’<英 so that...> (‘v takoj mere, chto...’<英直訳 in such degree that...>)
に対応する;付加文の述語はこの場合, 連体形が可能であるほかは, 接尾辞리
によっても作られる (하리).

그 규정은 원본에는 없던 것으로 뒤에 부가된 것이 확실한 만큼 이부가
의 시기를 명백히 할 필요가 있다.

少し異なるニュアンスを持つのは未来テンスの連体形(形式的)の後ろの수록
によって表される付加文である. それはロシア語の ‘po mere togo, kak ...’<英
(in proportion) as>に対応する.

날이 갈수록 그들은 사랑이 깊어졌든 것이다.

푸른 바다는 볼수록 넓다.

§135. 同伴状況文 この文は主文が付加文で述べられていることと完全に対
応して行われることを表わす. この関係は대로によって確立する;付加文の述
語はどのテンスの連体形によっても作られる.

햇살이 퍼지는 대로 일기는 따뜻해진다.

남은 학동들은 선생님이 가르치시는 대로 구멍에 물을 붓고 묘목을 심
습니다.

[注] 文をなさない単語結合では, 単語結合の中に過去テンス連体形の
動詞がある場合には, 대로의前の単語結合は状況的意味を獲得する: 외
투를 입은 대로 ‘odetyj v pal’to’<英 dressed in a coat>.

§136. 照応の状況文 付加文に表された事件が主文に表されたものに先行す
る,あるいは主文に表されたものを同伴することを示す. 前者のニュアンスは
後置詞가운데(서)により, 後者のニュアンスは길의与格길에によって表される.

우리들은 너무 좋아서 함박눈이 펄펄 내리는 가운데서 재미있게 놀랐습
니다.

귀를 고치는 길에 새 잠을쇠를 고쳐 두면 좋겠소.

§137. 目的の状況文 この文は未来連体形の後ろの차로によって表される.

중국어를 준비할 차로 가정 교사를 고빙하였다.

차로의代わりに양으로 [様一]もある.

§138. 述語文 これは他の文あるいはその代替物(しばしば了解される代名詞 'éto' <それは>の形で)との関係において述語として現れる文である. 述語文は朝鮮語では理由の意味を持つ. この意味は連体形の後ろの補助名詞까닭(繫辭を伴う; 하는 까닭이다)によって作られる.

감탄문의 어조도 또한 다양각색으로 된다. 감탄문은 감정의 실로 무한한 뉴안스를 표현하는 까닭이다.

体言形の述語を持つ付加文

体言形の述語を持つすべての付加文は, どのような体言形がこの文の述語形であるかによって2つの基本的なグループに分かれる; 第1のグループに入るのは述語が第1体言形である付加文であり, 第2のグループに入るのは述語が第2体言形である付加文である. 付加文と主文との関係は付加文の体言形=述語が作られるしかるべき格(後置詞を伴わず, あるいは後置詞を伴う)によって表される. 各々のグループは次に, なんらかの付加文がどんな意味を持つかによっていくつかの下位グループに分かれる. 紙数の節約のためにわれわれは今後付加文の2つのグループを1つにまとめるであろう.

§139. 主語文 基本的しるし: 体言形の主格あるいは語幹格(-는 / -은を持つ): 함은あるいは하기는; 하기가あるいは함이; 述語はどのテンスも持ち得る: 함은, 하였음은等々.

그의 리론은 명석하고 철거함이 그의 장처이다.

그는 이처럼 걱정하기가 처음이다.

§140. 補語文 基本的しるし: 体言形の主格あるいは語幹格(-는 / -은を持つ; まれにそれを持たない): 함을あるいは하기를; 함은あるいは하기는; 述語はどのテンスも持ち得る: 함을(現在), 하였음을(過去)等々.

우리는 어서 꽃이 피기를 기다립니다.

기사가 되기는 간절히 권해요.

그러나 내적 요인외에 사회적 역사적 제요인이 아울러 작용하고 있었음을 간파하여서는 아니된다.

§141. 状況文 状況文は意味の点で下記のものに分かれる.

a) 理由の状況文 これは第1体言形(語尾口)の具格あるいは体言形(語尾口)の後ろの名詞때문의与格: 함으로あるいは때문에によって表される; 具格の後ろでは後置詞인하여 [因一]が可能である: 함으로 인하여 [因一].

소금이 녹아졌음으로 짐이 매우 가벼웠습니다.

거북선은 결코 다른 나라를 빼앗겠다든지 약한 나라를 치기위하여 만든 것이 아닙니다. 왜놈이 우리 조선을 쳐들어 올 때 나라를 구하고 인민을 살리려는 충심으로 만드신 것이기 때문에 이것은 우리 조선의 한 자랑입니다.

最後の例は体言形を持つのが動詞自体ではなく、繫辞=述語であることを示している. これは閉じられた構造の法則によって作られる: 하는 것이다, 하는 것임으로, 하는 것이기 때문에.

列挙された理由的關係の2つの基本的な表現方法のほかに第3の方法, すなわち第2体言形の与格하기에が可能である.

도시는 상당한 거리가 있다[하]기에 자기로 하였다.

[注] 現代語には「第1体言形+具格」という結合の簡單化への明確な傾向が表れている. すなわちこの結合は1つの分かれ難い総体, 1つの形態素 -므로に変わるのである; これは特殊な理由の接続形として扱われる; したがって함으로는하므로となる. これは特殊に正書法にも現れる(すなわち함으로ではなく하므로).

b) 目的の状況文は第1体言形の後ろの後置詞위하여 [為一]あるいは第1体言形の後ろの与格하기 위하여 [為一]あるいは하기에によって表される.

반동격을 격퇴하기 위하여 련대장은 자기의 예비대로 있는 자동총중대를 전투에 인입하였다.

고요한 가을 밤은 공부하기에 좋은 밤입니다.

c) 時間の状況文 時間の状況文を表わすために体言形が後置詞전에 [前一]との結合においてのみ用いられる. このような付加文はある事件が他の事実に先行することを示す: 하기전에 [前一] ‘do togo kak ...’, ‘prezhde chem’ <英 before >.

전 [前]の前には強調の助詞도が可能である.

날이 채 밝기도 전에 전차 소리가 들린다.

d) 動作方法の状況文は第1体言形の後ろの語尾로써すなわち함으로써によって表される.

세계인민은 조선에 대한 제국주의자의 무력침공을 파탄시킴으로써 세계 평화와 안전을 유지하려는 목적하에 우리의 투쟁을 적극적으로 지지 원호하고있다.

e) 同伴的状況の状況文は第1体言形の後ろの与格と後置詞있어서すなわち

함에 있어서 ‘pri...’ <英 in the presence of ...> によって表される.

당단체들은 경제건설에 대한 당적 지도사업을 진행함에 있어서 초급 당 단체들과 광범한 당열성자들에 의거하며 당정치 사업에 전체 당원들을 적극적으로 참가시키고 당내 민주주의를 강화하며 비판과 자기비판을 강화 하여야 할것이다.

f) 比較の状況文は第1体言形の比較格によって表される :

가로 쓰기는 세로 쓰기보다 보기가 편리하다.

g) 讓歩の状況文は第1体言形の後ろの与格と後置詞불구하고 [不拘一] によって表される ; 与格は普通強調の助詞도を伴う : 함에도 불구하고 [不拘一].

우리 조국의 전체 애국적 민주 력량은 평화적 방법으로 조국을 통일시키기 위하여 투쟁하였음에도 불구하고 리승만 매국 역도들은 인민을 반대 하여 동족상쟁의 내란을 도발하였습니다. .

[注]あまり用いられないものとして第1体言形の代わりに連体形と補助名詞테との結合がある ; 한데(도) 불구하고 [不拘一] ; 後置詞の前の与格はこの場合普通用いられない.

§142. 述語文 これは他の文あるいはその代替物(しばしば了解される代名詞 ‘éto’ <それは>の形で) との関係において述語として現れる文である. 述語文は朝鮮語では理由の意味を持つ. この意味は第2体言形の後ろの補助名詞때문(繫辞を伴う ; 하기 때문이다) によって作られる.

同じ複合文の内部での主語文に対する述語文 :

종이가 젖지 아니한 것은 겹속에 들어 있던 공기가 물을 막기 때문입니다.

述語文は主語として現れる先行する文の代わりに代名詞 ‘éto’ <それは>の形で主語を持ち得る ; しかし代名詞はないこともあり得る :

이것은 작자의 죄가 아니다. 불리한 객관적 조건 때문이다.

해방직후에 전조선 생산기관은 대개 정지상태에 빠졌다. 일본놈들이 패망할 때에 그대부분을 파괴하였기 때문이다.

接続形の述語を持つ付加文

§143. 付加文で接続形の述語を持つ複合文の基本的タイプ 付加文の述語は次の接続形であり得る : 述語的接続形 (§58), 瞬間性の接続形 (§59), 結果の接続形 (§61), 理由の接続形, 本来の理由の接続形, 理由=時間的接続形 (§63), 条件の接続形 (§64), 讓歩的接続形 (§66), 比較的接続形 (§67), 動作様式の接続形 (§68). これらの接続形はそれぞれの章で詳しく記述されているが, 意味の点で理由, 時間, 条件, 讓歩, 状況の付加文をなす. 完全な資料はそれぞれ

れの接続形を扱った章で与えられている。

並立複文

§144. 並立複合文の基本的タイプ 朝鮮語の並立複文は形態論的観点から2つの基本的タイプに分かれる。

第1のタイプに属する並立複合文は、文の部分の間の関係が2つの並立複合文のうちの1つの文の接続形によって表されるものである。

第2のタイプに属する並立複合文は、文の部分の間の関係が2つの並立複合文のうちの1つの文の連体形に接続する補助名詞によって表されるものである。両者の形の違いは関係の緊密さの程度と関連している。通常、補助名詞によって表された接続形は並立複文の2つの部分の間のより緊密な関係を確立する；逆に並立複文の2つの部分の間の関係は常に緊密さが薄い；そのような並立複文の部分は多かれ少なかれ独立の統一体として知覚されている。

第1のタイプの文 並立複文の2つの部分の間の関係には次の接続形が用いられる。

a) 先行の接続形 (語尾 -고) ; この接続形は並立複文の2つの部分の間の接合的關係を確立する。1つの文に表わされた事件はもう1つの文に表された事件に先行する。

해가 지고 달이 떴다。

b) 結合的接続形 (語尾 -고あるいは -며) ; この接続形は並立複文の2つの部分の間の接合的關係を確立する。1つの文に表わされた事件は第2の文に表された事件とは時間的平面で決して関連しない。この接続形はこれらの事件が等価的であることだけを強調している；もしも複合文の2つの部分の間に同時性の関係が見られるならば、それは2つの相互関連する文の内容から出て来るのであって、接続形自体の本質から出て来るのではない。

제비는 봄에 왔다가 가을에 가고 기러기는 가을에 왔다가 봄에 가오。

この接続形は反意的關係をも確立し得るのである：

당신은 평양으로 가고 나는 함흥으로 가겠습니다。

しかしこの場合でも反意的意味は接続形自体の意味からというよりはむしろ2つの相互関連する文の内容から出て来ると思われる。このような接続形を反意的と名付けるのは正しくないだろう。

c) 反意的接続形 (語尾 -지마는, -건마는等々) この接続形は、この名付け自体からして、並立複文の2つの部分の間の反意的關係を確立する (例は§65を参照せよ)。

d) 述語的接続形 (語尾 -니) ; この接続形は並立複文の2つの部分の相互關係をもっとも一般的な特徴において予定する；したがって機能的にはそれは、上

にすでに述べたように、関係をやはりもっとも一般的な特徴において予定だけして決める補助名詞に近づく。このことはそのような接続形が真の意味での接続形と補助名詞との中間的な状態を占めることを意味する。2つの結びついた文の現実の内容に応じてそれらの間の関係は時間的あるいは理由的等々のようにさまざまに理解され得る。

개가 짖으니 사람이 오는가 보다。

他の例は§58を参照せよ。

第2のタイプの文 並立複文の2つの部分の間の関係には補助名詞마と데も用いられる。데に先行する文の述語は、動詞ならば、形式的な現在テンスの接続形で終わり(하는데, 하였는데), 形容詞(한)あるいは繫辞(인)ならば, ㄴで終わる。마に先行する文の述語は現在テンス連体形(하는)あるいは過去テンス連体形(한)で終わる; また하였는다고 하던という形も可能である。

마によって確立される関係は接続形によって確定される関係よりも、すでに述べたように、性格が不明確である。それ故その関係は明確な定式化の形で規定するのは困難である。通常마の用いられるのは第2の文が第1の文で伝えられたことの論理的継続あるいは終了である場合である。

오늘은 출판물에는 「북벌」에 대한 군사전략 계획도가 발표되는바 이것은 남조선 소위 특군본부에서 발표된 것이다。

데によって確立される関係は마によって表される関係同様不明瞭ではあるが、少し異なる。

ある場合には2つの対立する事件が述べられているかのようである; 데は2つの文の関係に反意的な性格を付与するかのようである。

앞에 서서 가는 말은 쉬지 않고 열심히 끌고 가운데 뒤에 가는 말은 가다가는 쉬고 조금 가다가는 또 쉬고 하여 피를 부리었습니다。

しかしこの意味は補助的な単語自体の意味からというよりは2つの相互関連する文の内容からむしろ出て来るように思われる。

他の場合では、第1の文で伝えられることを基礎に第2の文で発展させられるなんらかの補足的な考えが問題となっている; ここでは데は接合的、補充的な意味を持つ。

저 사람은 일을 부끄럽히 하는데 우리도 빨리 합시다。

그 돈이 공금이란 설이 있는데 증인은 어떻게 생각하는가?

一般的な接合的な意味が데の基本的な意味であると推定するべきである。2つの結びついた文の内容の関係からのみ結合的、反意的、理由的、時間的その他の意味が出て来るのである。例えば、次の文では2つの事実の現実の関係はそれらの間の理由的關係を暗示している。

문선이 서둘러서 준장에 빨강 글자 투성을 만들게 하는 골치가 아파

서 전달 수 없다.

話法

直接話法

他人の言葉の逐語的な正確な伝達である付加文を持つ複合文は直接話法の付加文を持つ複合文と呼ばれる。直接話法の付加文は他人の言葉が逐語的に伝えられる複合文の部分である。誰が直接話法の主体であるか、どのような動作をその主体が行った(言った, 訊ねた, 答えた, 思った等々)かを示す主文は地の文 *avtorskaja rech'* の主文と呼ばれる。

直接話法の付加文を持つ複合文の研究は次の4つの問に対する答えに帰せしめられる:

- a) 直接話法の付加文の述語の形はどういうものか?
- b) 主文と付加文, すなわち直接話法と地の文との関係はどのように表わされるか?
- c) 地の文の主体(主語)の位置はどういうものか?
- d) 地の文の述語(すなわち「言う」, 「答える」等々のタイプの動詞)の位置はどのようなものか?

§145. 直接話法の述語形 直接話法の付加文が他人の言葉の正確な伝達であり, この点でそれが複合文の中ではっきりと取り出され, それ自体の一定の独立性によって地の文に対立するのであるからには, そのような付加文の述語は他の種の付加文とは異なり, 終結した独立の文の述語と同じく, すなわち終止形によって作られる。

「웃은 무엇으로 만듭니까」 하고 선생님이 물으시었습니다.

「그것은 무명으로 만듭시다」 하고 대답하였습니다.

§146. 主文と付加文(地の文と直接話法)の関係の表現 直接話法と地の文との関係は次の3つの方法によって表される:

- a) 接続; 直接話法は補助的な形態論的な手段を用いずに地の文に直接接続する。この関係のこの表現方法は通常地の文(すなわち主文)の述語が動詞하다「言う」, 「訊ねる」, 「答える」等々である場合に見られる。

「조금씩 잡수시지 말고 한번에 더 많이 잡수시지요. 그리하면 빨리 나오시겠지」 하였습니다.

ところで次を参照せよ:

뻘오네르 지도자가 뻘오네르를 만나면 오른 손을 들며 「준비하고 있거

라」 라고 합니다。

地の文の述語として他の動詞が現れる場合には接続はそれほど普通には用いられない。

「목화송이속에 있는 딱딱한 씨를 뽑으면 숨이 됩니다。」 선생님은 이렇게 설명하시었습니다。

b) 補助動詞 하다の하고形. この表現方法は地の文の述語が具体的な動詞(すなわち하다以外のすべての言語活動と思考の動詞)である場合に用いられる。

「이만하면 모두 볼 수 있겠지」 하고 선생님은 우리들을 돌아다 보시며 물으셨습니다. 나는 곧 구석자리에 가서 앉아 보고 「이 곳에도 잘 보입니다」 하고 대답하였습니다。

c) 形態素고あるいは라고は, 直接話法の述語が母音아 (야) に終わる終止形を持つ場合に通常用いられる. それ以外では라고が用いられる. これが規範である. しかし現代語では고가期待されるところでも라고が見られる. この表現方法は地の文の述語で動詞하다の前でも, どの具体的な動詞の前でも用いられる. この方法はしたがって地の文と直接話法との関係の上述の2つの方法にまたがっている。

조금만 기다려라고 하고 하였습니다。

뻘오네르 지도자가 뻘오네르를 만나면 오른 손을 들며 「준비하고 있거라」 라고 합니다. 그러면 「항상 준비되어 있다」 라고 대답하며 역시 오른 손을 눈높이 듭니다。

§147. 地の文の述語の位置 地の文の述語は直接話法の付加文に関して二様の位置を占める。

a) 地の文の述語は付加文, すなわち直接話法の後ろに続く. 述語としては任意の具体的な言語活動の動詞, 例えば言う, 訊ねる, 答える, 命ずる, 叫ぶ等々, 及びそれらの具体的な動詞のすべての代理たる動詞하다が現れ得る。

「누가 힘이 센가」 하고 서로 다투었다。

「너는 누구냐」 하고 물었습니다. 「나는 정식이다. 너는 누구냐」 하고 대답을 하였다。

述語として言語活動の動詞以外の動詞も現れ得る; これらの動詞では言語活動を伴うなんらかの動作(喜ぶ, 笑う等々)が表わされる. 言語活動の動詞はこの場合存在しない. このことは, 直接話法が地の文と하고によって結びついている場合に普通見られる. この場合言語活動の動詞の機能を担うのは補助動詞하다である。

「그것은 참 좋은 생각입니다」 하고 기뻐하였습니다。

「어서 병아리가 나오면 ...」 하고 기다립니다。

b) 地の文の述語は直接話法の付加文に先行する。この場合地の文の述語は第2体言形の対格形하기를取る: 말하기를, 대답하기를 [対答一] 等々。

그는 말하기를 「아니, 아니, 그렇지 않소」。

直接話法に先行するこの述語は直接話法に続く述語をしばしば伴う。直接話法に続くそのような述語はこの場合動詞하다のみである。この囲み構造では第1の述語は任意の言語活動及び思考の動詞(言う, 思う等々)の代理たる最後の述語하다の具体的内容を暴いているかのようなのである。

古い書き言葉では直接話法に先行する動詞は第1語幹に接合する語尾대によって作られた: 말하대, 대답하대 [対答一] 等々。中国化した文体では中国語から借用された動詞알 [曰] が用いられる。

§148. 地の文の主体の位置 地の文の主語は直接話法に先行するか,あるいは後続する。それが必ず先行するのは,主文の述語(「言う」,「答える」,「訊ねる」等々)が直接話法の前にある場合である。

그는 말하기를

その他の場合では先行は随意的である。主語は直接話法に後続する時,直接話法と地の文とを結ぶ形態素の後ろに位置する。

「우리들의 옷감은 목화송이로 만듭니다」 하고 선생님은 말하시었습니다。

間接話法

他人の言葉(あるいは思考)の語り直しを含む付加文のある複合文は間接話法の付加文を持つ複合文と呼ばれる。間接話法の付加文は他人の言葉(あるいは思考)がおおよそ,間接的に伝えられる,すなわち語り直されるような複合文の部分である。誰が間接話法の主体(主語)か,そしてどのような動作をその主体が行った(言った,訊ねた,答えた等々)かを示す主文は地の文の主文と呼ばれる。

間接話法の付加文を持つ複合文の研究は直接話法の研究の際にも生ずる4つの間に対する答に帰せられる (§145の前を参照)。

§149. 間接話法の述語形 直接話法とは異なり,間接話法は主文との結びつきがもっと緊密であり,独立性が相対的に弱い。間接話法はまた終止形によっても作られるとはいえ,述語性の可能な形の数は厳しく限定されている;ここでは殊に人間関係(方向付け)の範疇はいかなる役割も果たさない (§46参照)。したがって終止形はこの場合3つではなく2つの意味しかない:すなわち終止形は動詞が間接話法の最後の述語であること,そしてその動詞がなんらかの点

でモーダルであることを示しているのである。終止形としては人間関係の第4段階（親密形）の語尾が用いられるが、これらの具体的な条件においては第4段階（親密形）の語尾は中立的な意味を持つ（ここでは他のいかなる形（鄭重形, 丁寧形等々）も親密形に対立しないから）。

	動詞		形容詞	名詞
直説法	叙述形	(ㄴ,는) 다	다	라,리라,다
		더라, 리라		
	疑問形	느냐, 는가	냐, ㄴ가	냐,
命令形	(으)라		—	—
勧誘形	자		—	—

나는 어디로 무엇 하라 가느냐고 묻지도 않았다.
오늘이라고 환자를 입원시켜야 된다고 말하였다.

§150. 主文と付加文（間接話法と地の文）の関係の表現 間接話法と地の文の関係は形態素ごによって実現される：

특지에 돌아오니 전화가 왔다 라고 한다.

§151. 地の文の述語の位置 地の文の述語は間接話法の後ろにのみ続く：

가라고 하오.

배우라고 하오.

배우라고 하였다.

述語として具体的な意味を持つ動詞もそれらの代理たる動詞하다も現れ得る。

[注] 地の文の主語は普通間接話法に先行する。

§152. 間接話法を持つ文と構造的に同等の複合文 間接話法を持つ文は思考の動詞（「思う」、「推測する」、「判断する」等々）を持ついわゆる説明文と構造的に等しい。

자기도 그만한 말을 넉넉히 할 수 있으리라(고) 하였다.

§153. 間接話法を持つ複合文にさかのぼる単純文 付加間接命令文（가라(고) 하오のタイプ）の後ろの代動詞=述語하다において語根하가落ちると、動詞하다の語尾は付加文の述語の語尾と溶け合って、その結果隠れた間接話法を持つ単純文が作られる。動詞하다は語尾が脱落した後どのような語尾が残ったかによって、隠れた間接話法を持った2つのタイプの単純文が区別される。

第1のタイプは間接命令法の語尾 -라と直説法の語尾(-합니다, -합니다等々)との融合から生ずる:

	I	II - III	IV - V
叙述形:	랍니다	라오	—
疑問形:	랍니다까	라오	라느냐

このような単純文は疑問形では許可(命令)の依頼を, 叙述文では許可を示す.

- 이책을 보라오?
- 영화구경을 가랍니다까?
- 들어오랍니다까?
- 들어오랍니다。

第2のタイプは間接命令法の語尾 -라と目撃法の語尾との融合から生ずる:

	I - II	III - IV
叙述形:	랍니다다	라더라
疑問形:	랍니다까	라더냐

このような単純文は疑問形では2人称を通して3人称の側からの命令の存在を明らかにし, 叙述文では3人称の側からの命令の存在(1人称によって実証される)を示す. このような文では間接的な命令が及ぼされる人称は対格で作られる.

- 그가 누구를 오랍니다까?
- 그가 동무를 오랍니다다。

§154. モーダルの=強調的間接話法 発話が絶対的に信頼し得ること, そして述べられた言葉が重いものであることを強調(疑問の場合では説明)する必要があるれば, 末尾の名詞말と繫辞を持つ特別な構造が用いられる; 付加文(これの内容の重さが強調される, あるいは疑問形では説明される)の述語は第4段階の述語性の述語形(語尾 -다)を持ち, 形態素_Lによって名詞말と結合する.

- 그 사람이 일한단 말이오。
- 그 사람이 죽었다단 말인가?
- 그렇단 말이오。

多くの場合この構造は疑問形では話し手が疑問を発していることを強調して示すのに用いられる.

- 그 일이 무슨 일이란 말인가?
- 무슨 사람이란 말이오?

略号

形態素及び補助的な単語索引

目次

ホロドーヴィチ, 『朝鮮語文法概要』原著者注

9 G. Ramstedt, *Grammatika korejskogo jazyka*, IL, 1951, str. 85 参照.

10 このほかに, 主たる述語に動詞보이다<... ようだ>がある特別な場合に補助名詞양 [様] が것の代わりに可能である.

ホロドーヴィチ, 『朝鮮語文法概要』訳者注

(138) 韓国の正書法では올바르다と書かれる.

(139) しかしながら南北朝鮮の辞書には누르스름하다とある.

(140) しかしながら南北朝鮮で이익하다, 리익하다 [利益—] という形容詞は辞書に登録されていない.

(141) しかしながらこれらは属格助詞しか結合し得ない特殊な名詞ともとれる. しかも多くは -의なしに述語としても用い得る.

(142) しかしながらこれらは接尾辞とともに名詞である可能性が強い. 등황용의 [灯火用—], 력사상의 [歴史上—] が可能であり, 력사상 [歴史上] は副詞的にも用いられる.

(143) これらは南北朝鮮で普通は冠形詞, 日本で連体詞と呼ばれる.

(144) これは南北朝鮮の標準語で우습다と言われる.

(145) 재미は南北朝鮮の標準語で재미と言われる.

(146) これらは南北朝鮮で불긋하다と書かれる.

(147) これらは南北朝鮮で불그레하다と書かれる.

(148) これらは南北朝鮮で불그스름하다と書かれる.

(149) これらは南北朝鮮で불그속속하다と書かれる.

(150) これらは南北朝鮮で불그땡땡하다と書かれる.

(151) -되- は現在南北朝鮮で -디- と書かれる.

(152) これらは南北朝鮮で불긋불긋하다と書かれる.

(153) 고프다는常に主語배가を伴ってのみ用いられる.

(154) このタイプは日本語ではいわゆる形容動詞に属するが, 朝鮮語の場合機能が形容詞に似た一種の名詞と見ることができる. 菅野はこのタイプを日本語の場合も朝鮮語の場合も形容名詞と名付ける.

(155) しかしながら있다は, 없다とともに, 「自立的形容詞」としてであれ, 「補助形容詞」としてであれ, ある時は動詞的, ある時は形容詞的に活用する.

(156) 原文に *masöpta* という発音表記があるが, 実際には *madöpta* である.

(157) 南北朝鮮の正書法で *데낮추다* と書かれる.

(158) しかしながら *없은* という形はなさそうである. なお *있은* と *있는* は存在するが, 前者は特に動詞的な場合にのみ用いられる. 一般に *있다* は *없다* よりも動詞的である (*있다* は命令=勧誘法等を持つ). このようにいろいろな点で *있다* と *없다* が動詞と形容詞の間で揺れる現象のために河野六郎博士はこの2単語に存在詞という名付けを行った. なお (155) 参照.

(159) 原文には *조식으로* ‘*sistematically*’ <体系的に>, *조식* ‘*sistema*’ <体系> という訳語が与えられているが, このような単語は南北朝鮮の辞書に見出し得ない.

(160) 南北朝鮮の正書法で *길쭉하다* と書かれる.

(161) *맞나다* は形容詞としてよいが, *맞이 나다* は動詞である.

(162) *빛나다*, *빛이 나다* 双方とも動詞と認められる.

(163) これは韓国では *올바르다* と書かれる.

(164) *열심히* [熱心—] 参照. ただし形容詞的な *열심인* [熱心—] も. 述語形 *열심이다* [熱心—]. これらは *적극적* [積極的], *적극적으로* [積極的—], *적극적인* [積極的—], *적극적이다* [積極的—] とほとんど同じ現れをするから, *적극적* [積極的] と同じ種類に属すると言い得る. (154) 参照.

(165) *마침*, *마침내* という形はあるが, *마침에* はありそうもない.

(166) *나중에* のほかに *나중* という形がある.

(167) *의외에* [意外—] は *의외로* [意外—], *의외의* [意外—] という形のほかに *의외이다* [意外—] のように述語的にも用いられるところを見ると, *의외* [意外] は名詞に近いと言える. *의외* [意外] が副詞的意味を持つことはないと考えられる.

(168) 厳密には *이러하다*, *그리하다*, *저리하다*, *어떠하다* からではなく, これらの省略形 *이렇다*, *그렇다*, *저렇다*, *어떻다* からと言うべきである.

(169) しかしながらこの形は見当たらない.

(170) 原文の発音表示は *kudi* とあるが, 実際には *kudzi* と発音される.

(171) *-씩* は助詞というよりは接尾辞と呼ぶべきだろう. 例えば *하나씩* はそれ自体で状況語的にも用いられるが, いろいろな点で体言とほとんど同じ機能を持つから, *-씩* は体言的機能を持つ接尾辞と言える.

(172) *듯이* は補助形容詞 *듯하다* のいわば副詞形であり, これらは連体形に接合する. これを敢えて特別に助詞と認めることはいかなることか?

(173) *오늘*, *래일* [来日, 韓国내일] などはいろいろな点で体言とほとんど同じ機能を持つから, 名詞ととらえ, 副詞的に単独で, 格抜きの形で状況語として用いられるのは名詞のはだかの形の副詞的用法ととらえるべきかと思われる.

(174) 代名詞よりは「代詞」とでもした方がよいかも知れない。

(175) ここに代動詞を追加し得ると思われる (이러다, 그러다, 저러다, 어찌다).

(176) これらは動詞派生の助詞と見た方がよさそうである。

(177) 母音 *i* は本来繫辞語幹であり, 母音の後ろでそれが脱落したことによりこれらの用言語尾が体言の助詞と化した。

(178) これは中期語彙に由来する人称代名詞で, 本来は「自分」という意味を持ついわば再帰代名詞とでも呼ぶべきものであり(したがって具体的な人称は1人称, 2人称, 3人称のいずれかであり得る), これが現代語で1人称謙讓代名詞に転化したと見るべきである。

(179) しかしロシア語の類似の場合を参照せよ: 例えば, “vozle” は絶対的に用いられる場合は「副詞」, 属格名詞を従える場合は「前置詞」。

(180) 앞이は韓国では앞니と書かれる。

(181) 現在우は北朝鮮, 위は韓国の標準語形とされる。

(182) 웃이 [운니] は韓国では웃니 [윈니] とされる. 아랫이は韓国에서아랫니と書かれる。

(183) ホロドーヴィチの言う前置詞と後置詞とが等価的という指摘は問題があると思われる。むしろ前置詞に似ているのは彼のいう名詞語尾であると思われる。

(184) これらは日本, 韓国, 北朝鮮ともに普通は名詞として扱われる。「本来の後置詞」は補助名詞(日本では形式名詞, 韓国では依存名詞, 北朝鮮では不完全名詞と呼ばれるものに相当する; 注(82)参照)として扱われるのが一般的である。ホロドーヴィチがここで述べていることはほとんどが特殊な名詞の記述として理解し得る。

(185) ヨーロッパ人がヨーロッパ語を基準にして実質的意味と関係的意味とを他の言語に及ぼす傾向があるが, 言語間でそれらが常に対応するものではないことは事実が示している。

(186) これらは助詞として扱うのが適当である。

(187) これらは補助副詞あるいは後置詞と認定し得るものであろう。

(188) -에다가, -에게다가のほかに -한테다가もある(このことから -한테は一種の格助詞と認定されるべきである)。これらは1) 話し言葉でのみ用いられる, 2) これらの後ろに付き得る動詞, すなわちこれらが支配する動詞には何らかの限定がありそうである。-다 / -다가の起源はともあれ, 現代語ではこれらは与格助詞とともに与格助詞の変種と見るべきではないかと思われる。

(189) -로부터あるいは -에서부터は現代語では -로あるいは -에서の変種として扱うのが適当であろうと思われる。

- (190) 「小詞 *chastica* (英 *particle*)」を菅野はここでは「助詞」と訳した。
- (191) -만, -라야は助詞, 뿐, 따름は補助名詞, 다만は副詞, 뿐더러はㄷ뿐더러という形で用言の接続形と見た方がよいと思われる。
- (192) 「否定助詞」は接頭辞に近い副詞とみるべきだと思われる。
- (193) 같이は助詞に近付いた後置詞的な単語である。
- (194) 만하다は全体として補助形容詞と認められる(北朝鮮では前の名詞と続け書きされ, 韓国では分かち書きされる)。-만 못하다はこのように만と못하다を話して書くのが普通である。만は本来は補助名詞であると考えられる(만하다は動詞と形容詞の -ㄷ連体形に接合し得る)。
- (195) 現在では느긋녕のように続け書きされる。
- (196) -과 / -와は「助詞」(接続助詞)として扱われるべきである。
- (197) 朝鮮語の語順は日本語, モンゴル語, 満洲語, テュルク諸語と同じく(1) 述語が文末に来る, (2) 修飾語は常に非修飾語の前に来るという規則に帰せられる。
- (198) 朝鮮語の形容詞は, 西欧の辞書で示される訳語の形式(例えば, 크다 *To be big*)に似て, 規定語的であるよりは述語性が重要視されているように思われる。ホロドーヴィチには動詞と形容詞を「用言」に一括する発想はない。他方ロシア語文法では不変化の規定語的品詞(日本で「連体詞」, 朝鮮で「冠形詞」と呼ぶもの)を「活用しない形容詞」と呼ぶ習慣がある。注(36)参照。
- (199) 現在少なくとも韓国では主語を表わす属格はほとんど見られず, それは日本語の直訳を連想させるという語感を持つ人が多そうである。
- (200) 하였기 때문에というのはあるが, 하였기는という形はないのではないか?
- (201) 마다, ㅏ는接尾辞, 처럼は助詞, 대로, 만치는補助名詞と扱うべきだろう。
- (202) ホロドーヴィチがここでこう述べていることは, 漢字語について彼が言っていることと併せて, 実は日本語からの借用である可能性が強い。
- (203) この表現は日本語の影響である可能性がある。韓国では現在あまり使われない。
- (204) 朝鮮語で真の付加語と言えるものは多分この場合だけで, その他は朝鮮語においては規定語あるいは状況語として扱うしかあるまいと思われる。
- (205) しかしながらこれはいわゆる複数助詞 -들用法上の違いとするべきである。ついであるがこの助詞は朝鮮語では副助詞的な機能を持つ。
- (206) -랑 / -이랑(主として幼児語)と -하고(話し言葉)は接続助詞, ㅏ[及][書き言葉]は接続詞とするべきだろう。
- (207) 가, 지. これらは中期朝鮮語あるいはそれ以前の時期において名詞であった可能性がある。なおㄷ가だけは韓国では何故かㄷ까と書かれる習慣がある。

また마던지は韓国では普通말던지와書かれる。

(208) これらは朝鮮語においては「規定語」の一種と見なすべきではあるまいか?

(209) ロシア語文法での扱いに応じてホロドーヴィチはこのように見るのだが、朝鮮語としては「状況語」とするべきではあるまいか?

(210) 付加文はいわゆる従属節に該当する。いわゆる主節は主文と呼ばれる。

(211) いわゆる関係代名詞, 関係代形容詞, 関係代副詞を指す。

(212) しかしながらこの形態素が主格助詞 -가を取ることから, 多分名詞とせざるを得ないだろう。

翻訳者あとがき

ヨーロッパで最初に出されたと思われる朝鮮語の文法書たる **G. J. Ramstedt, "Korean Grammar", Helsinki, 1939** をホロドーヴィチは入手して, 自己の朝鮮語研究に大いに活用したと思われる。Ramstedt のこの著書は 1951 年にロシア語訳が出版された。Ramstedt 同様日本語をよく知るホロドーヴィチにとり朝鮮語の研究はさほど難しくはなかったと思われる。またホロドーヴィチは 1949 年平壤刊行の『조선어문법』を丹念に読んだはずである。Ramstedt 同様ホロドーヴィチも北部方言に関心を示したが, 恐らくは在ソ朝鮮人との接触からも刺激を得たと思われる。Ramstedt の文法が形態論の記述に偏っているのに反して, ホロドーヴィチは文法論それ自体にも深い関心を寄せたことがこの著書及びその後の論文からも明らかである。両者ともにヨーロッパ人の著述の常としてわれわれの目からは受け入れられない記述もあるが, 朝鮮語の諸様相を非常に詳細に論じたものとして, 本書は高い評価に値する。旧ソ連におけるいわゆるアルタイ諸語のうちモンゴル諸語, テュルク諸語の総合的な文法書と比較してもホロドーヴィチの文法論の質の高さが認められる。本書が Ramstedt の陰に隠れてヨーロッパでもさほど注意されてこなかったことについては, ロシア語がヨーロッパ人にとってもなじみの薄い言語であること以外の理由を見いだせないのはまことに残念である。いまだに **exhaustive** な朝鮮語文法の刊行が見られない今日, 本書を見直すことは大いに意義のあることである。ついであるが本書に採用されている例文はすべて独立直後から朝鮮戦争前後の北朝鮮のものあるいは旧ソ連の朝鮮語出版物*であるが, 正書法, 語彙, 文の内容等々について現在の北朝鮮のものとの違いが認められ, 興味深い。なお最近モスクヴァからこの『朝鮮語文法』の再版が, **G. J. Ramstedt, "Korean Grammar", Helsinki, 1939** のロシア語訳の再版と併せて, 刊行されたことを付記する。菅野裕臣記

- * 例文の出典を明らかにした個所の略号その他は以下の如くである：
- Cho Chen Chxol', Partizanskaja doch'** チョ・チョンチョル, 『パルチザンの娘』
- G. K. – Grammatika ko0rejskogo jazyka, Pxen'jan, 1949.** 『朝鮮語文法』, 平壤, 1949.
- I. A. Krylov, Lebed', Rak i Shchuka** I・A・クルイロフ, 『白鳥とざりがにとかます』
- Kan Gën É, Problema cheloveka** カン・ギョンエ, 『人間の問題』
- Li Gi En, Desjat' let spustja** 李箕永, 『10年後』
- Li Gi En, Zemlja** 李箕永, 『土地』
- R1 – Rodnoj jazyk 1, Pxen'jan, 1948.** 『国語1』, 平壤, 1948.
- R3 – Rodnoj jazyk 3, Pxen'jan, 1948.** 『国語3』, 平壤, 1948.
- SL – Sovremennaja literature, Pxen'jan, 1949.** 『現代文学』, 平壤, 1949.
- Svift, Gulliver** スウィフト, 『ガリヴァー』
- Xan Ser Ja, Tédongan** 韓雪野, 『大同江』